ふる里を記憶と写真で綴る
昭和・平成

坪井　克
Tsuboi Katsu

ふる里を記憶と写真で綴る

昭和・平成

まえがき

私は昭和８年に旧山方村野上の地に生をうけ、大東亜戦争の真只中での少年時代を過ごしました。元々農家の生まれ農家で育ち昭和33年に山方町役場に就職するまでは毎日百姓を手伝い、百姓のことは何でもやりました。したがって冠婚葬祭や行事、祭り、風習などすべて顔を突っ込んで指導をうけ経験しました。

ここで書いたことは、全部自分が実際に経験したもので、記憶をたどり書いたものです。特に魚捕りが好きで川でのことは何でも経験しました。

昭和20年8月15日、朝からうだるような暑い日で、この日は６年生数人で現在のケビン村付近の赤松の大木の森で軍用燃料にするとのことで松の油（松根油）とりをしていた時､先生から作業をやめて学校へ戻るようにとの連絡を受け戻りました。天皇陛下の終戦の玉音をラジオで聞きました。すべてが終わった。一生で一番忘れられない一番長い日となりました。

子供の頃は、ラジオもテレビもなく、遊びと言えば野山で木登りや、草野球、兵隊ごっこなどをして、物がない時代の中でも、のびのび過ごし幸せでした。

内容は、旧山方町を中心としたものです。

文章の中で理解できない所や読みにくい部分が随所に出てくると思いますが、内容が判って頂ければよいということを前提に書きました。出来るだけ写真を多くして判りやすくしました。どうぞご笑覧下さい。

坪井　克

祝　辞

ふる里の昭和・平成集を上梓されるにあたり

元山方町長・前常陸大宮市長　三次 真一郎

常陸大宮市大字「野上」を中心にした自然や人文を20数年の長きにわたって兀々（こつこつ）と調査、収集、記録、分類され、このたび『ふる里を記憶と写真で綴る昭和･平成』という冊子にまとめ、関係者や後輩・後世のために上梓された坪井克さん、誠におめでとうございます。と同時に、心から敬意と感謝を申し上げます。筆者は今年満88歳、米寿（正確には数え年なので昨年かもしれませんが）を迎えられました。重ねてお祝い申し上げます。

ところで、私の妻の祖母（名前は「てつ」といいます）は、坪井克さんの家から来て祖父（名前は「野上仁平（にへい）」といいます）と結婚しました。また、私が町村合併前の山方町議会議長（昭和62・63年）のとき、著者は議会事務局長として当時30代だった弱輩の私の面倒をよく見てくださいました。さらに私が山方町議員会長の平成６年１月、議員会主催のイタリア・ギリシア訪問団に同行していただき、エーゲ海クルーズではアーモンドの花咲くエギナ島に上陸。エギナの女神を祠るアフェア神殿で著書とツーショットしたときのことを懐かしく思い起します。そして、縁あってご次男の研二君と千恵子さんの媒酌人を務めさせていただきました。ことほど左様に、著者と私は公私にわたる長いご厚誼があって今に至っており、このたびのご上梓は人一倍の嬉しさであり、寄稿の喜びも一入（ひとしお）のものがあります。

さて今回の著書は、８編124項目と「野上の言葉」約850単語、そして多くの写真から成り立っています。通読させていただきましたが、「あそび」編では私も経験したことのある遊びを楽しく追体験させてもらった一方、「水ハゴとバカハゴ」「ブッチメ罠」など未経験で全く知らない遊びも紹介されておりました。また、「漁猟」編の「うなぎ鎌」「イタチのバッタ罠」「野うさぎのヒックグシ罠」は見たことも聞いたこともなく、遊びと漁猟が一体となっている様にも見受けられ、私にとっては興味津々で物語にぐいぐい引き込まれてゆく思いでした。私も子供時分、久慈川の本流ではない小さな川で、ドキドキしながら「テビシャギ」で魚を捕まえたものでした。「石タタキ漁」もやりました。これらは、われわれの祖先である縄文人たち

が１万年以上も昔から実施してきた原始的かつ伝統的な漁法で、それを後々の子供たちが引き継いできた最も手軽で簡単な魚の捕まえ方だと思います。豊かな野山や河川の恵みを享受するためには、その豊かな山河を大切にしながら自然と共生してゆく工夫が必要です。それにしても、著者の時代の子供たちは今と較べて何と知恵があったのだろうと、感心したり納得したりしながら次へ次へと興味深く読ませていただきました。「信仰」編の「八丁じめ」や「年中行事」編の「しわすついたち」川浸しも初めて聞くものでした。一方「山方空襲」で親友だった同級生が死亡したこと、アメリカ兵が現在の常陸大宮市山方支所に来たときの様子を綴った「敗戦直後の出来事」等々、緊張なくしては読めないものもありました。

著者と私との年齢差は15歳ですが、親子ほどの差があるでもなく、兄と弟ぐらいの隔たりにも拘わらず、時代の流れが速いせいか、また生まれ育った所が野上と山方の違いのせいなのか、共通している点もあれば、そうでない点も多々ありました。ですので、この冊子は私にとっても大変意義深く、是非多くの人の目に触れてほしいと願いながら読ませていただきました。

著者が冊子の中で語っていましたが、「地名」編の「サイコ入り」の推定樹齢500年の「サスルベリ」は既に枯れてしまい、「越地」の石炭を掘り出したという「坑道跡」も今はなく、「年中行事」編の「山入り」「鍬入れ」などの諸行事も今では廃れてしまい、時代は昭和から平成、平成から令和へと急速に移っていて、後ろを振り向く暇もなく超音速旅客機に乗せられたまま先へ先へと進んでいるような気がしてなりません。古いものがなくなり、捨てられ、忘れ去られることは已むを得ませんが、それらがすべてなくなれば人は根無し草になってしまいます。形あるものはいずれなくなっても、そこに生きて次代に承継しようと努力された著者の意思と業績は誠にすばらしいものがあります。今回の冊子の中には、野上のたくさんの宝物が埋もれています。関係する多くの人たちに読まれ、その宝物がより多くの人たちの目に触れて広まっていけば、著者の本懐になるのではないかと思量します。

願わくば、この冊子に触発され、著者の意思を引き継いでくれる人がひとりでも多く現われ、実践してくれれば幸いに存じます。そうなることが、郷育立市を推奨してきた者としての喜びであり望みでもあります。

結びになりますが、坪井克さんのこのたびのご苦労にあらためて敬意と感謝を申し上げ、ますますのご健勝とご多幸を祈念して擱筆いたします。

目　次

年中行事 …… 1

衣食住 …… 18

信　仰 …… 36

漁　猟 …… 46

あそび …… 58

冠婚葬祭 …… 70

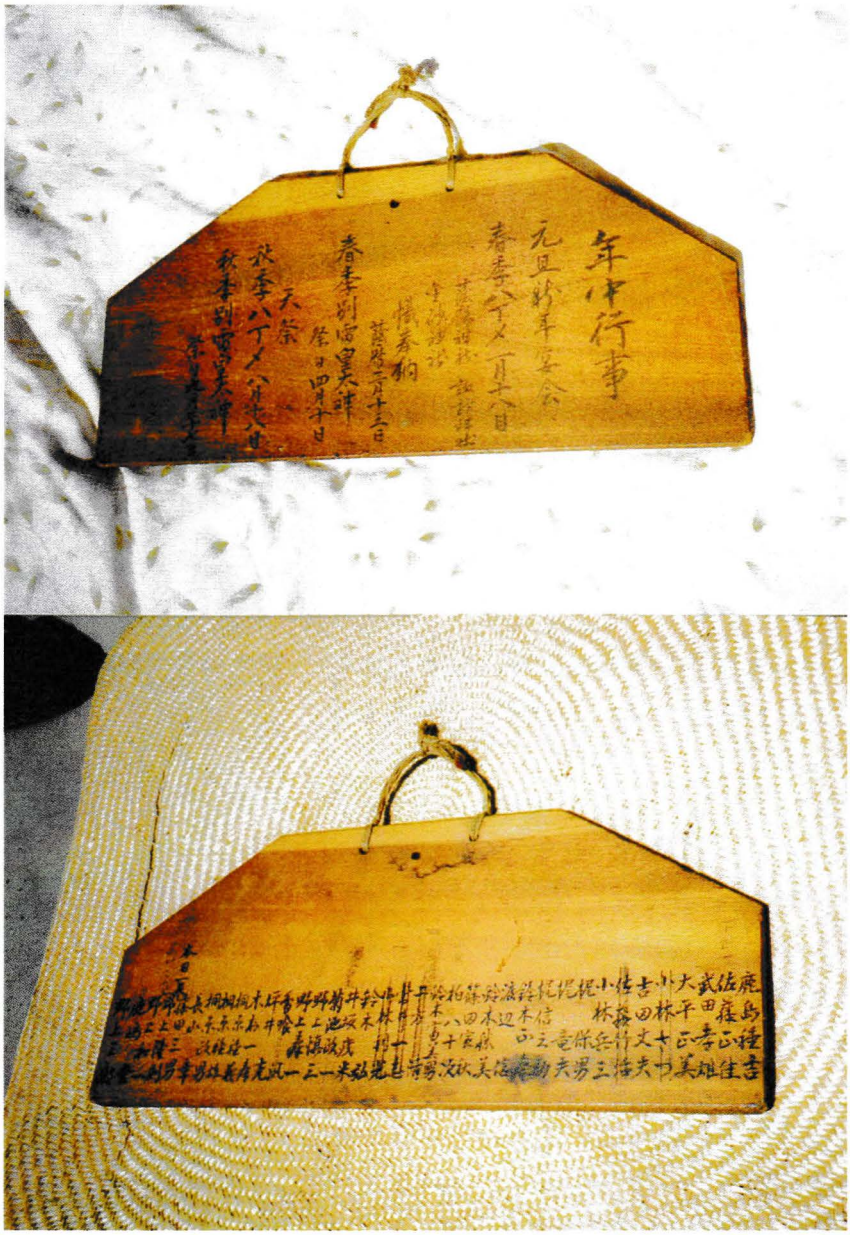
思い出 …… 75

地　名 …… 81

野上のことば …… 85

史料写真 …… 95

年中行事



さし板

若水

年の始めの朝（元朝）に汲む水を若水といった。

暮れのうちに準備しておいた新しい桶（手桶）に、その家の主人が早く起きて井戸から手桶に若水を汲んでくる。

この水を鉄瓶に入れて囲炉裏で湯を沸かし、茶を入れて一番茶を神棚や仏壇に供えた。

また、若水でご飯を炊いたり雑煮餅をつくったりした。若水を使ってつくつたものを食べると、邪気を払い一年間健康で居られると傳えられてきた。

若水桶

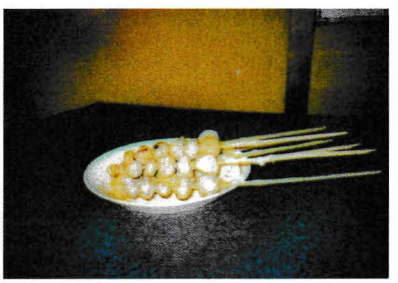
手桶は、暮れのうちに桶屋にお願いして新しい桶を準備し、桶の持ち手のところに毛筆で若水桶と書いた。

現在ではプラスチック製の容器に変わり、木製の桶はあまり見られなくなった。

正月料理（元日）

正月三が日の食事や料理は、その家や地方によってさまざまな家例（代々伝えられてきたやり方）があった。

野上地方では、ほとんどが農家だったので正月には里芋の芋串をつくる家が多かった。暮れのうちに、モッコという縄で編んだ袋のようなものに里芋を入れて、その袋を二人がかりで引っ張り合って、上げては落としを繰り返して打ち、袋の中で芋同士がこすり合い皮をきれいに落とした。更に芋を桶（八升樽）に入れて芋こしり棒という道具を使って擦って洗った。正月の三が日分を洗って準備した。



芋串

ヤキコ

旧冬に準備しておいた里芋を大きい釜いっぱいに茹で、芋を元の方に親芋を刺し上の方には小芋を竹串に刺した。味噌でつくったタレをつけて囲炉裏にどっさりおこした炭火でこんがりと焼きあげた。芋串は焼きあがってくるとキーンという音がして、焼きたての芋串はおいしかった。子供の頃は腹いっぱい食

べて芋串で朝食となった。

里芋は一個の親芋に小芋がいっぱい育つことから子孫繁栄を祈り、縁起を担ぎ正月料理としてつくるようになったと言われる。

芋串づくりは正月の三が日位続いたが、一週間位続ける家もあった。また、芋串のタレをつけて焼いた餅も軟らかくておいしかった。囲炉裏での餅焼きは、ヤキコという囲炉裏専用の餅焼きが販売されていて、遠足のときなどのおにぎりなども、このヤキコを使って焼いたものである。

元日の朝には、赤飯を炊く家、雑煮餅をつくる家など、それぞれの家例によって異なった。極端な家例に、元日の朝食を便所で食べるという変わった家例があると聞いたことがある。

新築家屋の構造や生活様式の変化に伴い、囲炉裏がなくなるにつれて正月に芋串をつくる家は少なくなった。

新年会

昔も、集落の新年会は元日に行われるところが多かった。

諏訪神社

上の原集落でも元日の朝に行われ、以前は諏訪神社を借りて拝殿の広間を利用しで行われてきた。集落に集会施設がなかったからであった。

元日の朝、八時集合で諏訪神社に集まり、前夜の晦日参りと元朝参りの焚火の残り火にあたりながら全員揃うのを待った。世話人は、集落代表と差し番（集落の年間行事を書いた板）による当番の人があたり、暮れのうちに各戸を回って集めたお金で、御神酒やつまみ等を購入して準備した。他に煮しめなども用意して持参し、一足先に行って拝殿の大広間に準備した。

以前は、上町集落のうち、西の坪の五戸もすべての冠婚葬祭や行事等は、上の原集落と一緒に行われてきた。当時は上の原と西の坪を合わせても二十数戸位であった。

また、小屋場集落でも同じく諏訪神社を利用したので、拝殿の間の半分ずつを使って行われた。新年会は集落代表の新年の挨拶に始まり、長老の乾杯で冷たい御神酒で始めた。少し酒がまわるまでは胴ぶるいである。最初に集落の三役（集落代表、納税組合長、農家組合長）を決める。現在は回り番で決めているが、当時は当日の人気指名でお願いしたので、同じ人が何年も再任されることもあった。他に陰陽神

社の御祭礼があり、その世話人等も決めた。昭和四十年代は若い人が揃っていて、酔ってくると元気になり賑やかであった。区長さんや地元の議会議員さんなどから祝い酒も届き、午後まで宴会が続いたこともあった。

上の原に、高齢者コミニュティセンターが建設されてから暖かい部屋で新年会ができるようになった。

山入り（一月六日）

山入り

新しい年を迎えて、初めて山に入る時の儀式を山入りといった。

和紙を切って作った幣束を若い松の枝につけて準備して早朝に山にでかけ、米、豆類や雑穀の他、煮干し、こんぶ、などを半紙に包んだものを三包みつくって持参し、山の神様に供えた。多少遠くても自分の山に行って供え、山入りの儀式をした。山の守り神とされる烏を大声でカラース、カラースと呼んで供えた。

山仕事の事故防止と、山の幸に恵まれ一年間の山に対する平安無事を祈願して行われる行事である。

この山入りの行事が済むまでは、山仕事や山での刃物は一切使わなかった。山入り前に刃物を使うと災いが起こるといわれた。

山方の、市の沢にある八幡様の北側の坂道に、山入りの日には両側の立木の小枝に山方の宿通りの人達が供えた幣束がいっぱい結ばれ、七夕のようにきれいであった。この道は野上や大久保方面の子供達の通学路の一部であったので、毎年見かけたものであった。

鍬入れ（一月十一日）

鍬入れ

山入りと同様で、山入りは山に入る時に行い、鍬入れは畑や田んぼに初めて入るための行事で、田や畑の神様に一年間の無事と五穀豊穣を祈願して行われたものである。

松の若木を準備し、山入りと同様に和紙でつくった幣束を松の枝につけ、田と畑に一組ずつ作って準備して行う。畑では麦の畝を三本畝、鍬を入れて山入りと同様に幣束のついた松を立てて、米や穀物等の他、煮干し、こん

ぶ、餅を細かく切ったもの、などを半紙に包み三個準備し、これを一升枡に入れて持参し、それぞれ畑と田んぼに松の幣束を挿して穀物等の入った包みを広げて供え、大きな声でカラース、カラースと呼ぶ。すぐに烏が来て食べたものである。烏は神の使いとされていた。子供達も一緒についてきて、カラース、カラースの怒鳴り役であった。

また、包みの中の穀物に早生、中生、晩生の三種類に分けて入れておき、その中で一番先に烏が食べたものがその年の豊作になる種類といわれた。この日は早朝から、あちらこちらからカラース、カラースの呼び声が聞こえたものである。

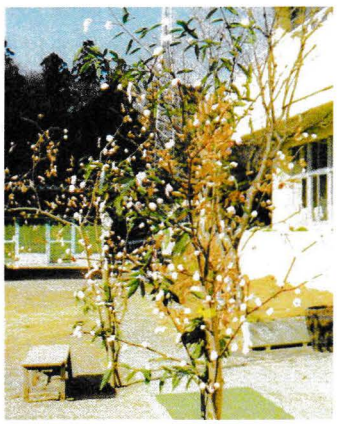
この行事も山入りと同じく昭和三十年代以降は見られなくなった。

花餅とダンゴ飾り（一月十四日）

小正月を迎え十四日は、正月を迎えて初めて餅をつく日であり、若餅ともいわれた。餅米の餅の他、うるち餅（米の粉で搗いた餅）も搗いた。小正月は十五日で裏正月ともいった。

樫の木、モチノキ（ヤマコーバシ）や、ミツノキなどを台所に立てて、紅白のうるち餅のダンゴや短冊に切った餅などを枝の先に刺して飾った。たわわに実をつけた果樹を表現したものといわれた。また、神棚には梅の小枝に七個のダンゴをつけて飾り、床の間には切り株から小枝が何本も出た、ボクという株に花餅という細かく切った紅白の餅や、短冊餅などをきれいにつけて飾った。この飾りつけのボクの株採りも、正月の楽しみの一つであった。前年に切り倒した木の柿や欅の株のボクが良いとされ、形の良いボクを探して自慢し合ったものであった。

花餅



ダンゴ飾り

その他、お釜様（勝手場）には三十六個、馬小屋には十六個のダンゴを樫の木の枝につけて供えた。昔の農家は、馬小屋つきの広い台所の家が多く見られた。飾りつけたダンゴや花餅は一月二十日の朝にとりはずして、後で油で揚げておやつとして食べた。

飾り付けの、木の種類などは地方によって異なった。台所に飾ったダンゴは多くつける程その年は豊作になると言われた。家内安全、五穀豊穣を祈願しての行事である。

鳥追い（一月十四日）

正月の十四日は鳥追いの日であり、男の子が生まれたり、跡とりに嫁を迎えた家などが鳥追い行事を行った。また、鳥追いの行事をワーホイともいった。

近くの畑や空き地に、ナガラや竹などを使って小屋をつくり、周りにムシロやコモなどを下げて風除けをつくり、小屋の中には囲炉裏を造ってドッサリ炭火をおこし、楮（コウゾ）の木を燃やして、おしるこや麹でつくった甘酒、その他、豆腐を短冊に切ったものを平たい串に刺してつくった豆腐のでんがく、その他芋串などをつくって近所の人達を呼んでご馳走した。豆腐にタレをつけて、こんがり焼いたでんがくはおいしかった。

健やかな子や孫の成長と家内安全を祈願し、併せて邪気を払ったものである。

鳥追いという名の行事から農作物を荒らす鳥を追ったのか、悪鳥を追うための行事なのか、さだかでない。

ワーホイ、ワーホイ今夜はどこの鳥追いだ、カンマクラの鳥追いだ、などと叫び歳神を迎えて夜を明かし、カックライというお年玉を頂いたりして、子供達にとって待ち遠しい正月ならではの行事であった。

隣り近所では、この日に豆腐二丁を重箱などに入れて届けた。鳥追い小屋は造らなくても家の中で囲炉裏を囲んで同様の行事を行って祝った。

えびす講（商人）（一月二十日）

えびす講は年二回、一月二十日と十月二十日に行われるが、一月二十日は主に商人のえびす講として行われ、商売をしている家で主に行われた。

恵比寿、大黒の置物や、掛け軸などを床の間に飾り、生魚のお頭つきのものを供えたり、うどんや、手打ちそばなどをつくって供えた。えびす様に財布やガマ口を供えるとお金が貯まるといわれ、ガマ口を開けて供えたものである。

当日は、商人以外の一般の家庭でも仕事は休み、ご馳走をつくって神事とした。

節分

節分の日には、大豆の枝に鰯の頭とニンニクを刺したものを玄関や出入り口の柱、戸袋などの割れ目などに刺した。

ニンニクの臭いと、鰯の大きく開けた口に驚いて鬼が逃げ出すといわれた。大豆殻の他、柊の小枝を使うところもあった。夜には大豆を炒ってつくった炒り豆を、年男が「福は内、鬼は外」と大声を上げて撒く。神棚、仏壇、床の間、玄関の他、

倉や納屋等にも撒いた。福の神を呼び込み、悪魔を追い払う行事である。

残った豆を自分の歳の数だけ食べると一年間健康でいられるといわれた。また、一回で自分の歳の数だけ掴めると縁起が良いといわれ、何回もやったものである。

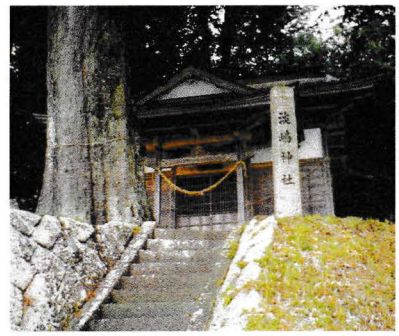
最近では大きい神社や寺院などで、知名人等が参加しての節分祭が盛大に行われるようになった。

節分

針供養（二月八日）

昔は、和服が日常の衣服であったので、和裁（裁縫）は女子の必修である大切な修業であり、裁縫の先生の家に修業に通った。その裁縫で一年間使った古い針を供養するのが、針供養である。

当日、女性達は裁縫を休んで、折れた針や、古くなって使えなくなった針を集め、豆腐に刺して淡島神社に納めて供養した。針に対する日頃のご恩に感謝し、併せて裁縫技術の向上を祈願したものである。



淡島神社

この日は裁縫仲間が集まり、ご馳走をつくって裁縫のお師匠様を招待し、日頃のご指導のご恩に感謝をした。

長田にある淡島神社は、この日ばかりは針を供養する女性達で賑わった。女性達が集まれば当然のように若い衆も集まり、淡島神社周辺は近郷近在の若者達で賑わった。

目かご立て（二月八日）

二月八日は悪病神が通る日といわれ、柊の小枝に豆腐とニンニクを刺したものを家の入口の戸や柱の割れ目などに刺し、また、屋外には目籠（メカゴ）や草刈籠などを、洗濯干しの柱や竿の先に掛けて立てた。

悪病神を追い払う行事で、家の入口には柊の葉のトゲと、臭いニンニクで侵入を防ぎ、外には目籠や草刈籠の、いっぱいの目で見張られ、悪病神も入る隙もなく退散というものである。臭いの強いニンニク、籠の

目かご立て

いっぱいの目、悪病神を追い払う手段として実にユニークな発想で面白い行事である。しかし、何処の家でも必ず行った行事であった。家だけやらないと悪病神に狙われるような気がして、結局やらざるを得なかったのかも知れない。

雛まつり（三月三日）

桃の節句で女の子のお祝いである。お雛様を飾り、白酒や紅白の餅など供えて健やかな成長を祝った。初めて迎える節句では、親戚などからお祝いの品や祝い金などが贈られる。

最近では高価で豪華なお雛様が店頭に並び飾られるようになり、当日のお祝いも派手に行われるようになってきた。当時、野上あたりは大半が農家であり、あまり派手な飾りやお祝いはしなかった。雛飾りなどもごく少数の家でしか見られなかった。

雛まつり

お彼岸（三月と九月）

お彼岸は、春季と秋季の二回あって、大祭日は、春季は春分の日、秋季は秋分の日であり、彼岸の中日である。お彼岸は入りの日から、お帰りの日までが七日間あり、昔から、「盆、盆とただ三日、くされ彼岸は七日ある」と言われるように、彼岸の入りからお帰りまで中日を挟んで七日間である。

また、暑い寒いも彼岸まで、の例えのように季節の変わり目でもあり、農家では農作物の種播きや収穫時期などの目安とされている。七日間あるが、一般的に中日だけを休みとして仕事は控え目とした。法事や墓参りなどは中日の日に行われることが多い。ダンゴやおはぎなどつくって仏壇に供えたり、墓参りするのが習わしである。

彼岸の七日間は、縁談や新築上棟などの祝い事は嫌い、何事も控えめに過ごす。

お釈迦様（四月八日）

四月八日は、お釈迦様の誕生を祝って行われる行事である。

昭和二十年頃、山方の常安寺で一度だけ体験したことがあった。花御堂という屋根のついた御堂に、真鍮のようなもので造られた高さ四十センチ位で、両手が天上天下を指さしたお釈迦様が甘茶の上に安置され、頭から甘茶をかけた。甘茶は薄い

甘味のあるお茶で、あまりおいしいものではなかった。当時は非常時の最中で、砂糖などなかった時代であった。大勢の人がお参りに来て、お釈迦様に甘茶をかけ合い賑わっていた。

端午の節句（五月五日）

端午の節句は男の子のお祝いの行事である。吹流し、鯉のぼりや武者絵の小旗という幟旗などを立てて健やかな成長を祝った。

最近では、鯉のぼりなど立てる場所などの関係から、武者人形や鎧兜などの内飾りを飾る家が多くなった。男の子が生まれると嫁いできた実家からは吹流し、親戚からは鯉のぼりや幟旗、内飾りなどが贈られてくる。

端午の節句

前日には、悪魔除けとして菖蒲と蓬を家の軒下に刺した。現在では茅葺屋根の家もなくなり、この行事も見られなくなった。菖蒲を風呂に入れて菖蒲湯にした。菖蒲湯に入ると中風にならないと言われ、また、菖蒲を頭に巻くと頭が良くなるとも言われた。当日は餅を搗いて柏や朴の葉にくるんで、かしわ餅をつくって祝った。

菖蒲の香りで邪気を払い、蓬の臭いで蛇除けになったといわれた。

ボーッパギ

昔は、五月六日に田んぼに入るとボーッパギになるといわれた。ボーッパギという言葉も意味もさだかではないが、ボーッパギは足の脛（ハギ）、ふくらはぎ、のことらしく、五月六日に田んぼに入ると足の脛が腫れるということらしい。

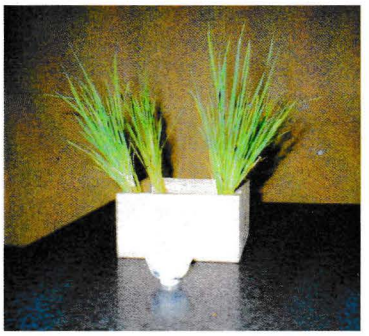
昭和二十年代の頃、小学校の児童による勤労奉仕作業として、水稲の水苗代の害虫駆除を五月六日に実施したことがあった。膝まで水につかって苗代の苗を篠竹で撫でて葉についている虫や卵を捕った、脛を蛭に吸われながら虫捕りをした。捕った虫や卵の数によって褒美として鉛筆やノートなどを戴いたことがあった。しかし、このボーッパギで足が腫れた話を聞いたことはなかった。

農家の嫁さんは、前日の五月五日に節句礼に実家に行くので、翌日の六日の日は田んぼに入れないのでゆっくり一泊して帰れるようにと、架空の病気、ボーッパギをつくり嫁を気遣って作った日ではないかといわれた。

サナブリ

田植えが終わると、サナブリといって余った苗をひとにぎり持ち帰り、よく洗って一升枡の四つ角に苗をいれ、苗の上から大麦を炒って粉にしたコガシを苗に振りかける。コガシの粉を花に見立てたものといわれた。お釜様にお神酒と一緒に供えて、田植えが無事終わったことを感謝し、併せて豊作を祈願したものである。

この日はサナブリ神事とし、農作業は休みとした。



サナブリ

カマノフタ（八月一日）

地獄の釜の蓋開きといって、お盆も近づき地獄の釜の蓋が開いて仏様が出てくるという日であり、手打ちうどんなどつくり仏壇に供えた。

この日をカマノフタといって、一般的に農作業などは午前中位にして午後は休みとした。

七夕（七月七日）

六日の夕方、子供達は今年生えた新しい笹竹を切ってきてタナバタさまをつくって飾った。色紙を短冊型に切って、それぞれ思い思いに願いごとや、川の名や山の名、星の名などを書いて笹の枝につける。とりどりの色紙を使って結びつけるのできれいである。

これを七日の日は軒下や庭に立てておき、八日の朝に近くの川に流した。

オカシマさま（八月十日）

オカシマさま（お鹿島さま）の人形は、小麦藁で作るのが多かった。小麦藁を束ねて藁縄を巻いて作る。子供達が大人の人達に教わりながら、それぞれ自分で人形を作った。

出来上がった人形にトーモロコシの葉を肩から胴に掛けてタスキに見立て、腰には若い篠竹を切ってナスを輪切りにしたものを刀の鍔にし、大小の二本の刀を差した。

顔には半紙に武士らしく強そうな顔を書いてつける。

小麦粉で造つくった饅頭を肩に刺し、いざ出陣のいでたちとなる。この人形を新竹の笹枝を三本位つけた竹に刺して出来上がり。庭に立てて日の暮れるのを待つ。

オカシマさま

夕方になると、それぞれ人形を担いで門の辺りや近くの三叉路などに立て、麦藁をいっぱい燃やした。その煙に乗って戦に旅立つ姿を表現したと言われる。「オカシマさまのー大明神、鬼が勝ったりうさいな(みーさいなあ)」などと掛け声をかけ、集まった友達の人形同士をぶっつけ合い、弁当の饅頭を交換して食べた。終わってから、その場で小麦藁と一緒に人形も燃やした。また、人形を残して、道路の三叉路などに立てて疫病除けとした。

鹿島の神が香取の神と共に蝦夷征伐の際に常陸の人々が鹿島の神の応援に出陣したことに由来し、その時の兵士の姿を再現したものといわれた。

墓なぎ（八月十日）

八月一日には釜の蓋も開き、いよいよお盆を迎える前の墓掃除である。この墓掃除のことを、墓なぎ、といった。

朝早く掃除道具の鎌、唐鍬、熊手、竹箒、その他掃除に必要なものを籠に入れて墓地に行き、除草、草刈り、墓石の掃除をしたり花を供える竹筒を立てたりした。

この日は朝からどこの墓地でも一斉に掃除をするので、草や木の葉などを焼く煙がのぼり墓掃除の煙だとすぐわかった。昭和三十年代までは土葬だったので、現在のように墓地も整然としていなかったので墓地の掃除も大変であった。最近では勤めの人が多くなり、お盆前の日曜日など休日に行う家が多くなった。

現在では、土葬はなくなり火葬となったので墓地も立派に造られ、以前のように草が生えたりしなくなったので墓なぎも容易になった。

お盆（八月十三日）

昭和二十年代以前は、旧暦の七月十三日に行われてきたが、戦後は都会に倣い自然と新暦に行われるようになった。

座敷に盆棚をつくり、棚の上にはゴザを敷いた。菰の葉を編んでコザをつくる家も多かった。盆棚の上には、先祖代々の位牌を並べて飾り、供え物として新しくできた野菜や果物を里芋の葉の上にのせて供えた。他に生花を棚の両側に供えた。盆に供える花は、前日に山に行ってキキョウ、オミナエシなどの自然の野草の花を採っ

てきて供えるのが多かった。当時は山も手入れされていたので、花もいっぱいあり、墓に供える花も一緒に採ってきた。

お盆

夕方になると家族揃って線香、水、花など持参して墓参りに行った。山から採ってきた花も供え、親戚の墓や隣の墓の方まで花や線香を供えた。新盆の家では早めにお参りを済ませて家に戻り、お参りに来る客を迎えた。昔は新盆の家に供えるものは、ほとんどが大きい束の島田うどんで、二束をのし紙に包んだものを供える人が多かった。また、新盆以外の親戚や知人宅の盆参りは、翌日の十四日に行くのが多かった。

新盆の家では親戚などから贈られた提灯を飾りつけ、お参りに来た客には酒、肴でもてなした。

十六日は盆送りで、盆棚の供え物をゴザにのせて持参し、墓の入口や近くの三叉路の一隅などの毎年決まった場所に置いて線香を供えて送った。菰で作ったゴザはゴザごと置いて送った。

お月見　十五夜（旧暦の八月十五日）

すすきの穂二本を瓶などに挿して供えた。すすきの穂はお月さまの箸代わりとされ、二本供えるところが多かった。ダンゴやおはぎ、秋の味覚である柿や栗などの果物の他、新しくできた里芋の入ったケンチン汁なども供えて月の出るのを待った。十五夜の供え物を盗み歩くのも子供達の楽しみであった。この日ばかりは月見ドロボーを見ぬふりをして盗ませた。盗まれるほど縁起が良いとされた。それでも子供達は腰を低くして見つからないように盗んだものである。

お月見

また、この日には稲藁の中に、里芋の茎やミヨゥガの茎などを芯に入れて縄で巻いてつくった、オームギバッタというもので地面を叩く風習があり、子供達はそれぞれ自分で作って「オームギバッタソバアタレ、サンカクバッタソバアタレ」などと叫びながら、庭や地面を叩いたものである。叩く音が方々か

オームギバッタ

ら聞こえてくると、負けずに本気になって叩いたものである。芯に里芋やミヨゥガの茎を入れるのは音が良くでるからである。隣近所の家まで叩いて回った。地面を叩くのはモグラに盛られないよう、追い払うために行ったといわれた。このオーギバッタの使用後は、柿の木に吊るしておくと柿の実が豊作になるといわれた。

十三夜（旧歴の九月十三日）

八月の十五夜と同様に、お月様に供えるものは秋に収穫した野菜や果物の他、ダンゴやおはぎなどを供える。十五夜には、ススキを供えたが、十三夜には大根を供える。ススキと同じくお月様の箸代わりとされ、二本の大根を供えた。

お月見は、片見月になるので十五夜に月見をすれば、十三夜も同じように月見をするものだといわれた。

二百十日（九月一日）

二百十日、立春から数えて二百十日目で、普通は九月一日の日にあたる。

前日の夕方、嵐除けとして神棚に御灯明を上げ、御神酒を供えて今秋の平穏無事を祈った。二百二十日の日も同様に嵐除けを祈願した。

この季節は、丁度秋雨の降る時期でもあり、また台風もこの頃が一番多く発生する季節である。

十日礼（十月十日）

田の神様を祭る行事で、田の神様が農事等が無事に終わったのを見届けて、天に帰る日といわれた。

新穀で餅を搗き、箕の中に餅と大根二本を入れて、米俵の上にのせて秋の収穫に感謝する。

農家では、この日を、農上げ、といって嫁さんは餅を持って実家に十日礼として泊りに里帰りする。また、農作業を手伝ってくれた家にも餅を持って礼に行った。

十日礼

一年の農事も一段落し、田の神様に感謝し農事が終わったお礼の祭事であり、十日礼、とか、農上げ、といった。

えびす講（十月二十日）

一月二十日は、商売繁昌を願っての商人のえびす講であったが、十月二十日は農家のえびす講であり、五穀豊穣、豊作を祈願してのえびす講である。恵比須様、大黒様の掛け軸や置物などを床の間に飾り、手打そばや手打うどんなどをつくって供えた。また、谷津田の水田などの堀や水溜りでドジョウや鮒などを捕りに出かけて、お頭つきの魚を供えた。

えびす様に財布やガマ口を供えるとお金が貯まるといわれ、一月のえびす講と同じく家内中でガマグチや財布などの口を開けて供えたものである。その他に、農作業に使用する縄や、井戸払いや車井戸で使う太い綱も、隣近所の人と共同作業で作って供えた。昔の井戸は跳ねつるべか車井戸であった。

現在は、生活様式等の進歩に伴い、また水道の普及により、跳ねつるべや車井戸はなくなり、テレビの時代劇で時々見るくらいである。

山の神（十一月六日）

山の神様を祭る日で、この日山に入ると罰があたるといわれた。また、山で刃物を使ったりすると怪我をしたり、災いが起こるといわれ、六日の日は山の仕事は休んで、山での災難がないようお祈りし神事とした。

手打ちそばやうどんなどをつくって御神酒と共に供えて、山の神に山の安全と平安を祈願した。

地域によっては、山の神講をつくって男達が宿回りで集まり、山の神の掛け軸を掛けて、ご馳走をつくって御神酒と一緒に供えて山の安全を祈願し、酒を酌みかわし夜を過ごした。

ツボ餅

ツボ餅とは、土穂餅のことで、庭寄せ餅や播き上げ餅などとも言われた。稲のこないものが終わって最後に掃き寄せたものや、落穂などの土で汚れた土穂などのクズ米を集めて精米し、粉にひいて餅にしたもので、うるち餅といった。搗いた餅は大根のように円筒型に丸めて棒餅といった。

最近は手間がかかるので、うるち餅をつくる家は少なくなった。ツボ餅をつくる日は決まっておらず、坪内や近所隣りで申し合わせ、秋の取り入れなど収穫が全部終わってから行なった。

金砂まち（十二月十二日頃）

金砂神社のお祭りで金砂まち、といった。当時は娯楽などは少なく、お祭りなどはどこでも盛況であった。

当日はお赤飯などつくって仕事は休みとし、自転車や歩きで金砂神社までお参りに出かけた。

戦後の昭和二十年代は、地下足袋にゲートル巻きで一日がかりで歩いてお参りした。

ゲートル

当時としては賑やかなお祭りで、遠方からの大勢の客で賑わった。

露天商が並び、客でごったがえした。しかし当時は戦前戦後の非常時で、店で売っているものは柚子に柿ぐらいで、蜂谷柿の干し柿などは最高の土産であった。特に竹の串に刺して何段にも編んで吊るした小さい柿の干し柿は、名物であった。他に十二合桶といって、板を十二枚合わせて造った桶があった。この桶を買ってきてドブロクをつくった。

金砂まち、と共に、瓜連の静神社の秋祭りも賑わった。

七五三（十一月十五日）

女子は三歳、男子は五歳の時に行うお祝いである。昔は七歳になった女子が、付け紐のある着物から紐をとり、帯を締めるようになったところから帯解き、ともいわれた。子供が成長して一人前になったことを祝う行事であった。現在では、七五三の祝いとして、女子は三歳と七歳、男子は五歳として豪華な晴れ着を着飾って、お寺や神社にお詣りをするようになった。健やかな子供の成長と、無病息災を祈願して行われるものである。

七五三

しわすついたち（十二月一日）

師走一日（十二月一日）を、しわすついたち、といった。川浸しの日である。餅を搗いて二個の小さいお供え餅を持参して川に流す風習があった。川浸し餅とか、かわっぺいり餅などといって、川に尻を浸して、水難を逃れるように餅を川に供え

てお祈りしたといわれる。

昔、奉公人が早朝に川の流れに尻を浸して、冷静な気分になって餅を戴いて実家に帰り、餅を食べながらゆっくり今後のことを考えたことから、思案餅ともいわれた。

昔は、川浸しのお供え餅で川底が白く見えるほど多くの人が投げ入れて、水神様に水難除けを祈願したといわれた。

すすはらい（大掃除）

師走になると、正月を迎えるための準備として、大掛かりな大掃除をした。

昔の家はほとんどが茅葺屋根で、家の中の土間に台所があって、カマドや流し（勝手場）が備えられてあり、板張りの居間には囲炉裏がつくられてあり、家の中で一年中火を燃やすので、一年が過ぎると屋根裏や神棚など家の中はすすでいっぱいになり、大掃除をしなければならなかった。家の中の物は戸外に持ち出しての大がかりな大掃除をした。竹の笹で作った特製の箒で軒裏や台所の天上などのすすを払い落とし、家の中も外周りもきれいにして正月を迎えた。

現在は、家の造りも現代風に造り代え、生活様式も大きく様変わりし、電化やガス、灯油などの使用に伴い、火は燃やさないのですすがたまることもなくなり、掃除機などで常に掃除しているので特別に大掃除の必要もなく、大掃除として軒周りのホコリ払いやサッシのガラスを磨く程度で、昔のような大掛かりな大掃除はみられなくなった。

冬至（十二月二十二日）

冬至の日は、太陽が一年中で一番南にあり、昼の時間が一番短いといわれる日である。

冬至の日にカボチャを食べる風習がある。冬至の日にカボチャを食べると中風にならないといわれてきた。冬至が過ぎると少しずつ日がのび始める。

大晦日（十二月三十一日）

一年の最後の日である。家の内外の掃除も終わり正月の準備も大詰めである。門松を立て神棚には新しい飾り付けをしたり、お供え餅を供えたりする。

正月の芋串用の里芋を洗ったり、正月に使用する大根、人参、牛蒡などの野菜などを洗ったりして準備する。なかでも、里芋洗いが大変であった。正月三が日につ

くる芋串なので量も多かった。里芋の皮や土を落とす方法として、縄を編んでつくった芋打ちモツコというものを使った。芋打ちモツコの中に里芋を入れて、両方に縄の紐をつけて両方から二人がかりで、引張り合って持ち上げては落とすを繰り返すことで、芋と芋がこすり合いきれいになる。これを木の樽に里芋と水をいれて芋こしり棒という、松の枝が八方に出た部分を利用して作ったもので、ゴシゴシこすり洗いをしてきれいにした。

芋洗い

大晦日の日は、どこの家でも朝から手打ちそばや手打ちうどんをつくった。つくったそばやうどんは桐の板で造った蓋付きのハンギリというものに入れて正月の三が日保存して食べた。

夜は三十日そばを食べ、囲炉裏には炭や薪を燃やして、米麹でつくった甘酒や、おしるこなどを飲んだりして年越しをした。ラジオやテレビなどなかった時代であり、もっぱら一年を振り返っての雑談で年を越した。

衣食住

米のできるまで

田起こし、田植え、刈取り、脱穀乾燥と、一連の作業がすべて大型機械によって行われている現在では、当時の農作業は想像もできないような手作業による重労働であった。

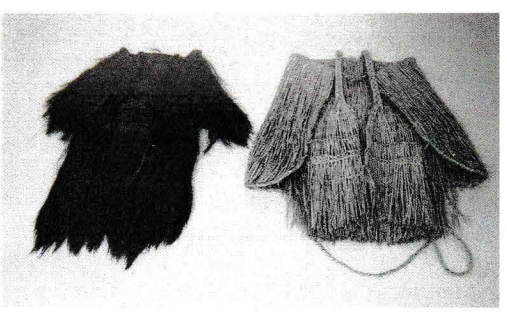
秋の取り入れが終わると、すぐに来年の米作りに向けて作業が始まる。最初に田起こしの旧冬うないである。旧正月前の秋、旧冬に行うことから旧冬うないといった。

刈りとった水田を、万能で一メートル位の幅に螺旋状に起こし土を重ねていく。草の根や球根等を凍らせて枯らすのと、土を乾燥させるために行うもので、荒起こしである。

春になると、冬期間に準備しておいた木の葉を、旧冬うないをした水田に均等に散らして耕す。旧冬うないをしたところを再び耕すことから、くりがえし、といった。次に水田の周りの草を草刈鎌できれいに刈り、草を刈ったところを鍬で削り、水が漏らないように万能で土を寄せて、柔らかくなるまで水を入れて置く。これをクロ寄せ、といった。柔らくなった泥土を削ったところに手ではりつけて、水が漏らないようにする。その上を鍬できれいに撫でたら、クロはりは終わる。クロはりの次に、水を入れ更に細かく耕して、こぎりという仕事が終わる。こぎりの次に、水をいっぱいに入れて更に細かく耕してやっと平らになる。カジロつくりといった。このカジロが現在の代かきである。カジロつくりしたところを、ヤダ棒という均し棒で表面をきれいに均して、やっと田植えができるようになる。

すべて万能による手作業のため、機械の場合一回で済む田起こしが、このように手間を要したのである。

苗は、五月頃水田の中間あたりに苗代をつくって、一晩水に浸した種を播く。これを水苗代といった。育った苗は手でひいて一掴みぐらいに藁で束ねる。束ねた苗を、植え代に適当な間隔に投げいれる。田植えは、隣近所の家などとの共同作業のユイトリとするのが多かった。植え方には、正常植えといって田植え用の綱を張り横一列に並んで綱に添って植える方法と、それぞれ適宜に植えていく、やたら植え、の二通りあった。正常植えは人数の多いときに行った。田植えは農家に

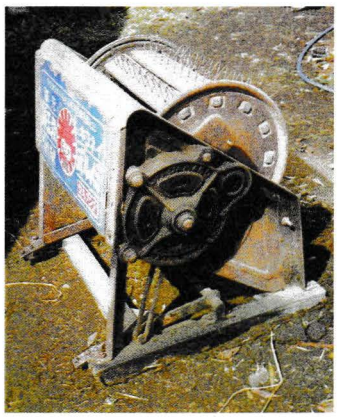


みの

とってはお祭りのようなもので、赤飯を炊き酒肴での豪華なものであった。田植えの時に必ずつくった料理に、磨きニシンとゼンマイその他、切干し大根の煮つけものがあった。

共同作業であり、全部の家の田植えが終わるまでには二週間位続いた。雨の日は雨合羽などはなく、藁やシュロの皮で編んだミノを着ての仕事であった。

田植えが終わると、田の草取りである。一番草と二番草と必ず二回の草取りをした。除草剤などなかった時代なので、手でかき回しての草取りである。四つんばいで腰が痛くなり、立ってばかりいたものである。


足踏み脱穀機

そして秋になり、いよいよ稲刈りとなる。鎌で一株ずつ刈って束ねて、オダを作って一束ずつ掛けて、二十日位して乾いたら束ねて、背負いばしごやリヤカーなどで家に運び、足踏み脱穀機での脱穀である。脱穀した籾は、フルイにかけてゴミを取り除き、唐箕にかけて選別し、これを俵に入れてやっと倉庫入りとなる。旧冬うない、から１年がかりの米つくりである。

昔の田植えは、栗の花が咲く頃が盛りであった。現在より一カ月位遅かった。秋の旧冬うなから秋の収穫までの一年がかりの仕事がすべて手作業であり、朝から晩まで働いても間に合わず、現在より田植えなども一カ月位遅れていたが、遅れていたのではなく、間にあわず遅くなってしまったのである。

こうした手作業は、昭和三十年代までで、以降は経済の成長と共に急速に機械化されて現在の大型機械での農業と変わってきたのである。

旧冬うない

秋の取り入れがすべて終わると、一斉に田起こしの旧冬うないが始まる。

旧冬うないは、米づくりの一番最初に手掛ける仕事である。水田の荒起こしである。

盆や正月など、すべて旧暦で行われていた当時、暮れの旧冬に行うことから、旧冬うないといった。

万能を使って水田の外周りから起こし始め、渦巻き状に中心に向かって起こしていく。

一メートル位の幅に起こしていって、最後は田の中心で終わる。田の土を起こし土を乾燥させて病虫害を防ぎ、また凍らせて草の根や球根を枯らすために、旧冬の寒くなる前に行った。

起こしていると、冬籠り中のドジョウが捕れて追い目になり、仕事の能率も上がったものである。この田起こしも大変な仕事であったので、若い者同士でユイトリでの作業が多かった。夕方には捕ったドジョウ料理での一杯が楽しかった。

旧冬うないは、田に氷がはる頃まで続いた。

木の葉さらい

松喰い虫の被害によって、松の木の大半が枯れてしまって、昔のきれいな松林の面影は全く見られなくなった。尚、電気器具などの普及などに伴って、薪や木炭などの需要が少なくなり、益々山との縁が遠くなってしまった。したがって山は荒れ放題となり、足を踏み入れられないような現状である。

木の葉さらい

昭和の中頃までは、落ち葉を堆肥にしたり、水田に入れたりして落ち葉の需要は多かった。葉煙草の耕作者も多かったので煙草の苗床に使用したり、さつま芋の苗床などにも利用し、落ち葉は農家にとって大切な資源であった。

秋の取り入れが終わると、山の下刈りをして落ち葉さらいがはじまる。落ち葉を熊手でさらい集めて、大きい籠で苗床や水田の旧冬うないをしたところなどに運んだ。

ガゴによる木の葉運び

また、木の葉まるき、といって、運びやすくするために落ち葉を束ねたが、慣れないと難しい仕事で、中々結べず束にならない。二本の縄を地面に並べて置き、その上に藁を均等に敷いておき、熊手で木の葉を捏ねて、両手でしっかりと抱きかかえて持ち上げ、敷いてある藁の上に置く。これを三回位同じように置いて、藁の下に敷いてある二本の縄の片方を、足で動かないように踏みつけていて、反対側の縄をもってロール巻きにして束ねる。この時、踏みつけている縄が足からはずれてしまうと、弾みでバラバラに崩れてしまう。何回も失敗を繰り返して覚えるが、慣れてくると全く同じ大きさの束ができるようになる。

苗代つくりから田植えまで

現在では、水稲の苗は農協に予約して一括して購入できるようになったが、以前

は家で苗を育てて植えた。

昭和三十年代までは、水苗代といって水田の中に苗代をつくった。五月頃に水田の中間あたりの水を入れやすい場所を選び、区画をクロで仕切り、万能でやわらかくなるまで耕して、一メートル幅位の短冊型に泥土を五センチ位盛り上げ、草取りなどのため短冊と短冊の間を二十センチ位空けて、植える面積の量に合わせて短冊をつくる。

植代つくり

種籾は、一晩位水に浸してザルなどにいれて水を切ったものを、短冊の上に丁寧に均等に播いてたっぷり水を入れる。スズメやカラスに荒らされるのでカカシを立てたり、糸を張ったり工夫して防除した。これで水苗代の出来上がりである。

播いてから四十日位で田植えができる位に育つ。

水苗代の苗

田植えになると、苗を水の中で短冊の端の方からひいて、一掴み位を藁で束ね、苗を植代に運んで適当な間隔に投げ入れて配置して植えた。

苗を植える人が植えやすいように、苗を運んだり配ったり気配りする人を、ケロリといった。田植えする人の周りに苗が足りなくなったら投げ入れてやったり、また多すぎるときは持ち出したりと忙しい大役なのに、なぜケロリといったのか分からない。

田植綱

クロはり

水田の水が漏らないように泥土で土手をつくるのを、クロはりといった。

昔は、基盤整備などの改良はされていなかったので、小さい水田が何枚にもなっていたので、このクロはりが大変な仕事であった。特に谷津田などでは、一枚の水田が十坪位の小さい面積の田も多かった。

クロはりの工程は、最初に周りの草刈りから始め、次にクロをつくるところを鍬で削ってきれいにする。次に、削ったところに万能で土を寄せて水を入れる。水持ちの悪いところは、足で踏み固めて水が漏らないようにする。一週間位して、柔ら

かくなった泥土を削ったところに張り付け、鍬できれいに撫でてクロはりの終わりである。

しかし、何枚もの水田のクロはりは重労働であり大変な仕事であった。一見簡単で面白そうに見えるが大変な仕事であり、またクロを撫でるのも鍬先が土に食い込んでしまって思うようにはできないものであった。一時間もすると腰が痛くなり、立っている時間が長くなってくる。

この頃になると、どこの家でも一斉にクロはりが始まり、鍬でクロを叩く音がペッタンペッタン聞こえ、初夏の農村ならではの長閑な情景であった。

家畜を使っての田かき

家畜による田かき

農家では、馬や牛を飼っている家が多く、家畜を農耕に使う家が多かった。

田植え期には、荒起こしをした水田を馬や牛を使って田かきをした。家畜を使っての田かきは、家畜を操る人と、耕すための馬鍬を押す人がいて、二人の呼吸と家畜の呼吸が合わないとうまく耕すことができない。家畜をひいて操る人を、鼻どり（ハナドリ）と言い、馬鍬を押す人を馬鍬押しといった。馬や牛の轡に、竹などの棒を結んで、この棒を引いて操る。しかし、慣れないとうまく引けず、また家畜も思うように言うことを聞いてくれないので、馬鍬押しに怒鳴られる。ハナドリが水田の角を回るのが早過ぎても遅過ぎても、馬鍬がクロや土手に乗り上げてしまうので怒鳴られる。水田に大豆の茎などを肥料として入れてあるので、足袋を履いていても足が傷だらけになる。ミノを着ているが馬の蹴り上げる泥で体中泥だらけになり、顔も泥でだらけで目だけギョロギョロ輝いていた。

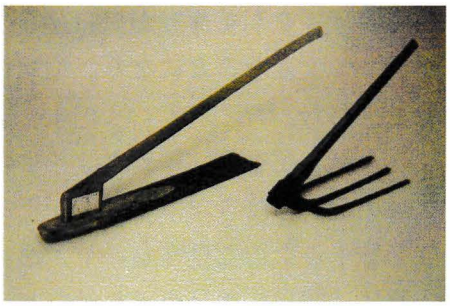
この季節になると、ホーラマワレショーと、掛け声をかけながら手綱を引くハナドリの声が、方々から聞こえたものであった。牛の場合は、馬と違って歩くのが遅いし、おとなしいので、ハナドリは大変楽であった。

家畜を使っての作業は、人間の手作業の数倍の能率が上がった。

畑うない

耕運機や、動力による大型機械などなかった時代なので、畑や水田など耕すのはすべて手作業によるもので、鍬や万能によって行われてきた。

水田は晩秋に旧冬うないで耕されるが、畑は陸稲や大豆などの収穫が終わってから、秋の麦播きの準備として耕すもので、陸稲畑や大豆畑などを鍬で手作業によって耕すことを畑うないといった。


鍬

鍬で耕す力仕事なので、若い者同士でのユイトリでの共同作業で行うことが多かった。

手作業ということもあって、畑うないは半月位続いた。鍬で一本畝ずつ耕していくので、重労働であった。腰をかがめての作業なので、三日も続けると腰が痛くなって休んでいる時間が長くなってくる。しかし、ユイトリ作業は立ってばかりいると、後からうなってくる人に追いつかれるので、つい無理をして頑張ってしまい、夜には腰が痛くて這い歩くようであった。

場所によっては、粘土質で固い畑もあって大変であった。固い土の畑には土を軟らかにするために、掘り込みといってソダ木や藁などを畝の中に入れてうない込んだので、その入れ役が一人余計に必要であり手間がかかった。

休み時間には、力試しの石担ぎや相撲取りなどして力比べをしたものである。夕食にはドブロクなどご馳走になり、腰の痛いのも忘れ鼻歌気分で帰ったものであった。

播きもの

野上の小麦は質が良く、野上の小麦でつくったうどんは風味が良く、昔から有名であった。気候風土や土質に合い生育も良く、良質の小麦ができるので盛んに生産されてきた。

コイフゴ

昔は、民家の屋根も殆んどが茅葺であり、小麦藁をつかったので藁の需要も多かった。

十月半ばを過ぎると、麦播きの、播きものが始まる。朝早くから種を播くところの畑に鍬で畝きりをするが、素足で仕事をした。堆肥に肥料や油粕などを万能で混ぜて、畝に蒔く元肥をつくった。縄を編んで造った担架のような形をした、モッコというものに元肥を入れて、二人で担架の要領で畑に運んだ。家畜の馬を使って運ぶときは、これも縄で編んでつくった肥ビクというものを使い、馬の背の両方に振り分けるように造られた肥ビクを使い堆肥を入れて運んだ。馬の背から堆肥を下ろす時には、綱を引くと落ちるようになっているが、その綱を引くタイミングが難

しく、下手をして片方が先に落ちてしまったりすると、反対側に荷重がかかり、馬が驚いて大変なことになる。堆肥をいれる時も同様で、慣れないと難しく工夫が必要とされた。

運んだ堆肥を藁で編んだコイヒゴというものに入れて、畝の中に均等に蒔いて種を播いた。種播きは慣れた人が播いた。播く種が、厚く播いても薄く播いても収穫に影響する大切な仕事なので、慣れた年寄りが播くことが多かった。

種は、前日に風呂の残り湯などに浸して、ザルに入れて水分をきっておいたものを播いて、最後に、播いた種に足で土をかけて終わる。

播きものが全部終わると、餅を搗いてボタ餅にして手伝いをして戴いた家に配った。これを、播き上げボタ餅といった。

麦ふみ、日向たて、土入れ

秋に播いた麦も、正月を過ぎる頃には芽も大きく伸びてくる。その頃から方々で麦ふみをする姿が見られるようになる。

ジョリン

厳寒期に入ると、霜柱で麦の芽が地面から持ち上げられてしまったり、また伸び過ぎてしまったりするのを抑制したり根張りをよくするために、麦ふみ、日向立て、土入れ、の作業を行った。寒い北風の吹く中、頬かぶりをして麦の畝を、行ったり来たりして一本畝ずつ踏んで行くので、一人でも多い方が能率が上がるので、子供から年寄りまで総出で麦ふみをした。

また､冬の寒い風を防ぐために日向たてをした｡麦の畝を一本畝ごとに鍬でさくって土手を築いて日向をつくり、麦を寒さから守った。他に、麦の根張りを良くするために、麦の頭から土をかける土入れ、という作業も同時に行った。金網のついたジョリンという立鍬で一本畝ごとに土をかけた。根元に土を入れることによって根張りが良くなり倒伏を防ぐために行われた。小麦の他に大麦も栽培されたが、野上地方では主に小麦が多くつくられた。大麦も小麦も、麦ふみ、日向たて、土いれ、の作業は同様に行われた。

作物とコヤシ

戦前、戦後は、化学肥料の製造販売も少なく、また高価であった。戦後は特に少なく、肥料不足の時代があり、あまり使用することができなかった。大豆粕や油粕

などの搾った粕が粉砕しないで塊の儘で配給になり、硬くて砕くのが大変だったこともあった。

このような状況下で肥料を補うために、肥やし（コヤシ）として人糞が一役買った時代があった。

農家の便所の多くは屋外に造られ、汲み取りが容易にできるようになっていた。汲み取り用の桶を、ションベン桶といった。長めの桶と板で作った箱型で柄のついたヒシャクがあり、農家ではほとんどの家で備えてあった。この桶にヒシャクで汲み取り、てんびん棒を使って肩で担ぎ、畑の作物に肥料として施したのである。

ションベン桶

年の暮れなどは、どこの家でも便槽をきれいに汲み取って正月を迎えた。麦畑など遠く迄担いで行って施した。てんびん棒で中身の入った桶を担ぐのは慣れないと難しく、てんびん棒の反動に逆らうと調子が狂い、桶の中身があばれだし大変なことになる。

今では想像もできないことであるが、野菜にまで施した。学校などの便所は、農家の人が馬車に大きな桶を積んできて汲み取って行き、肥料とした。当時は汲み取りの業者はなかったが、このようにして処分されていた。

棒うち（ボーヂ）

秋に取り入れた大豆やそばなどは、束にして運んできたものを、軒下や納屋に立てて置いて、一段落してから天気の良い日に庭に立てて、半日位乾燥させてクルリ棒という竹や木で作った自製の農具を使って脱穀した。クルリ棒は、回転させて反動を利用して穀物の穀に打ちつけて実を落とすというもので、慣れないと中々難しく、腕の肘などに打ちつけてしまい痛い目にあったりする。慣れてくると調子にのり面白くなってくる。

棒打ち用具

野上などの平地では、どこの農家にも広い農作業ができる庭が備えてあり、庭で作業をした。しかし、山間地では斜面に家が建っていて、庭が狭い場所にある家では、クルリン棒は使えないので、庭が狭いなりに工夫し、カケアイのような形をした道具を使って、庭にむしろを敷いてその上で穀物を叩いて収穫した。このように機械が普及するまでは、自製の道具を考案して使い作業をしてきたのである。棒を使って収穫することから、棒打ち、棒打ちが訛ってボーヂと言った。

その昔は、千歯ごき（カナゴキ）で実を落としていたが、足踏み脱穀機が普及したときは数十倍もの能率が上り、農家にとって一大革命であったと思われる。

薪こり

薪こり道具

昭和三十年頃までは、野上地内も半分以上の家が茅葺き屋根であった。また、ほとんどの家の台所にカマドが備えてあり、炊事の煮物や炊きものなどはすべてカマドか七輪であり、燃料は薪や木炭、そだ木などであった。

茅葺き屋根は、家の中で火を燃やすことによって、煙から出るタールが屋根の茅に染みこんで屋根が長持ちしたのである。当時は、どこの農家でも葉煙草を耕作していた。水府煙草やダルマ種の場合は、茎ごと刈って屋根裏に竹串を刺し吊るして乾燥させた。台所のカマドや囲炉裏で、薪や根株などを常時燃やして乾燥させた。したがって、薪やそだ木などは木小屋に一年分を貯蔵しておいた。

農閑期の秋から冬季にかけて、小遣い稼ぎに薪こりをしたものである。薪こりの仕事は出来高で賃金が支払われ、働けばその分が金になったので働きがいがあった。薪にするのは松の木が多かった。くぬぎや楢、かしの木等の多くは、炭に焼いた。薪こりは能率給なので、朝早くから夕方遅くまで働いた。道具の鋸や薪割り、ナタなどの歯物が切れないと能率が上がらないので、道具づくりは自然と身についた。

早朝からの重労働なので、腹が減っては仕事にならないので、箱弁当は土方弁当か重箱であった。土方弁当箱は、普通の弁当の箱より三倍位の大きいもので、当時は何処の店にも売っていた。仲間達もみんな同様であった

炭焼き

木炭は、昔の生活には欠くことのできない大切な燃料であった。

囲炉裏もコタツも、炭火をおこして暖をとっていた。高度成長期を境に、住宅構造も文化住宅に様変わりし、生活様式も大きく変化し電化製品や灯油、LPガス等の普及に伴って木炭の需要は年々減少していった。しかし、最近は木炭が、違った形で見直され、防臭剤や湿気止めなど、その利用も多様化し、竹炭などを焼く人も増え、炭焼き窯も見受けられるようになった。

以前は、雑木山などは大凡二十年位の周期で切られ、炭や薪にすることが多かっ

炭焼き

炭俵

た。炭焼きは久慈川を挟んで東方面が主に白炭で、アカメ焼きの生産が多かった。また、久慈川から概ね西方面の地域では一般的な炭で、黒消しという炭を焼くことが多かった。白炭の場合は、炭焼き窯に火を入れて、焼き上がったらすぐに窯口を開けて、真っ赤なうちに窯から掻き出して土をかけて消す。土灰をかけて消すことによって硬く良質の炭ができた。材料の木も、樫の木などの硬い質の木を選んだ。白炭の窯は、面積は小さいが炭を掻き出しやすく窯口を大きく造ってある。この白炭は高級品で炭火が長持ちすることから、茶道やうなぎ店などで多く使われている。一方、黒消し炭は、焼き上がったら前方の焚き口から、後ろの煙突など全部塞いで密封し、二日位して冷めてから炭を取り出す方法で作られ、一般的に使われている炭である。面積の広い山などは、原木や出来上がった炭の運び出しやすい、山の中間あたりの窪地を選んで炭焼き窯を造った。材料は、主に楢、クヌギなどを焼いたが、雑木類は何でも焼いて炭にした。

窯つくりは、窯打ちとか、はち上げ、といって、慣れた経験者で熟練された人達によって共同作業で造ることが多かった。

窯には、出来、不出来があり、出来の悪い窯は火の回りや、煙突の煙の吸い込みなどがうまくいかず、良い炭が焼けずに灰になる部分か多くなったり、また焼け残りが出来てしまったりした。窯の底の部分で、焚き口から煙突までの勾配の関係や、煙突の造り方などによって微妙に左右され、窯の良し悪しができてしまう。

炭が焼き上がるまでに、煙の色が七度変わるといわれ、この煙の色の見分け方も大事なポイントなる。特に最後の焼き上がり前の色の見分け方が、焚き口や煙突を塞ぐ目安とされる。塞ぐのが早過ぎると燃え残り（ネボエ）が出来てしまい、また遅いと窯の前方の炭がほたけて灰になってしまったりするので、炭焼きの一番緊張する時である。

このようにして焼き上がった炭は、決められた寸法に切ってススキの茎で編んだ炭俵に正味、四貫目を入れて縄で結び表装した。炭にも等級があり、炭の検査員がいて、検査を受けて等級がつけられた。等級によって炭の値段が違った。なお、検査を受けて荷札に検査済の証がない炭は、公定の価格での販売はできなかった。

遠い山などでの炭焼きは、山に炭焼き小屋を造り泊りがけで炭を焼いた。秋から

始めて来春三月頃まで続けられた。

葉たばこつくり

葉たばこつくりは、農家の現金収入には欠かせない作物であった。野上地内で耕作された煙草は三種類で、黄色種、水府、だるま種が耕作されていた。黄色種（米葉）は主に平地の比較的面積の広い地域で耕作され、土の壁で造られた四角い乾燥場で乾燥した。煙草の葉を一枚一枚の茎を縄に挟んで、乾燥場に何段にも吊るして乾燥させた。レンガ造りの大きいカマドがあり、松の薪を燃やし続けて昼夜の番をし、温度調節をしながら一回分を三日位かけて乾燥させる。

葉たばこ乾燥場

水府たばこは、主に山手に近い地域で耕作されていた。葉煙草の茎から葉を三枚位残して、その上の部分を葉のついた儘、刈ってきて藁で結んで屋根裏に吊るして乾燥した。台所や囲炉裏で薪など燃やして乾燥させた。畑に残された三枚位の土葉は、縄に葉の茎を挟んで天日乾燥とした。

葉たばこ（黄色種）

ダルマ種は、茎の葉を全部採ってきて縄に挟んで天日乾燥することが多かった。庭に棚の干場を作って、縄に挟んだ五メートル位の葉煙草を一連ずつ吊るして乾燥させた。ある程度乾燥したら、地干しといって地面に藁を敷いて、並べて干した。大量に干すので、雷雨の時などは二人いないと持てないし、乾いているので葉が欠けてしまうので大変だった。また、乾いた葉の上を猫やにわとりに歩かれることもあり、終わるまで気を抜けなかった。

葉たばこの花

なお、水府煙草やダルマ種は乾燥した葉を一枚ずつ広げて伸ばす、煙草のし、の仕事があり、元の方と先の方を伸ばす二人一組で煙草の葉のしをした。夜なべの時などは子供も手伝わされるが、単純な仕事なので居眠りが出て手を叩かれながら伸ばしたものである。

伸ばした葉は、均等に重ねて上に板を載せて重石を載せて圧縮した。今度は葉を一枚ずつ等級別に仕分けして梱包する。黄色種も水府種も同じように手間がかかった。こうして商品として出来上がった葉煙草を山方宿駅前の専売公社までリヤカー

や馬車などで運んで納付し、鑑定官の鑑定によって等級がつけられて収納した。

正月の苗床つくりから育苗、定植、鍬での土寄せ作業、そして芽掻き、芯切りから虫捕りなど、暑い時期の仕事で大変であった。煙草には、殺虫剤など薬品は使用できないので、虫は一匹ずつ手で捕った。煙草の乾燥も大変だった。特に黄色種の乾燥は、昼夜通しての温度管理などの番をしながらの作業であった。

煙草は専売品なので、畑に定植してから専売公社から植えつけ検査に来て、本数を数えられ多く植えつけてあれば、その本数をその場で引き抜かれた。

コーズむき（楮剥き）

和紙が盛んに造られていた頃は、畑の周りなどに楮の木がいたる所に植えてあった。

楮は紙の原料として高値で取引きされ、農閑期の副業として晩秋から冬にかけて楮切りをした。

野上地内でも、数軒の家で楮を扱っていて、晩秋になるとコーズ剥（む）きが始まった。集められた楮の生木を決められた寸法に切って、大きい釜で蒸した。

楮剥き

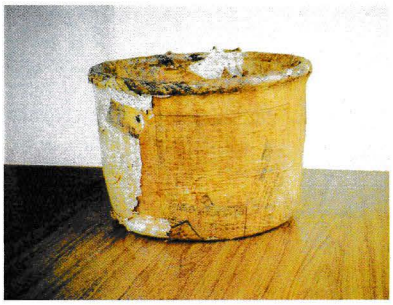
近所隣りから大勢の手伝いが集まり、蒸した楮の皮を剥いた。コーズ剥きは年の暮れの恒例の行事であった。大きいカマドで直径一メートル以上もある大釜の上に束ねた楮を重ねて結び、大きい桶のセイロを被せて蒸して皮を剥いた。

楮蒸し

部屋の土間いっぱいに手伝いの人が集まって皮剥きをした。剥いた楮の木をコーズカラといって、自分で剥いた分は手伝いの代償として家に持ちかえることができた。良く燃えるので、薪などと同様にカマドや囲炉裏などの燃料とした。手伝いの人達はコーズカラが目的でもあった。家族で一日皮剥ぎすると結構な量となり、軒下いっぱいに積まれた。手伝いを受ける家でも、手伝いの人もお互いに助かったのである。

楮が蒸し上がるまでの時間には、楮と一緒に麻袋に入れて蒸したサツマ芋やジャガ芋などが、おやつとして出されて寒い時に暖かいご馳走であり、カマドでは薪が燃やされて寒さ知らずの真冬の楽しい行事であった。

粉挽きとハリッカ貼り


ハリッカ

山柿など渋柿の渋をとり、その渋汁で古くなって使えなくなったザルなどに和紙などの紙を貼ってつくった入れ物を、ハリッカといった。粉やゴマなどの細かいものを入れるのに使用した。

梅雨期の雨の日などには、近所同士が声をかけ合って集まり、新しい大麦や大豆を大きな鉄の鍋で炒りあげ、石臼で挽いてキナコやコガシをつくった。石臼にヤリ木を天上から紐で吊るして、石臼を操る人と、ヤリ木を二人で押したり引いたりし、三人がかりで挽いた。ハリッカは、この挽いたキナコやコガシを入れるのに最適であり重宝された。

ハリッカは、古いザルなどに柿の渋を幾重にも貼ってつくった。渋をとる柿は渋味が強い程良いとされ、山柿は渋味が強いので山柿を使うことが多かった。青い渋柿を臼で搗いて、その汁を絞って漉したものを使った。貼る紙は一般の紙ならなんでも使ったが、最後の表面の仕上げには和紙を使った。和紙は丈夫で滑らかであり、袋とじの和紙の本などを和紙のない時には良く使った。柿の渋を使ったハリッカは虫がつかず長持ちした。小麦粉の糊で貼ったものは、一夏過ぎると虫の穴だらけになってしまう。粉類、ゴマやナタネなど細かい物を入れるのに使われた。ビニール製の容器などない時代は重宝された。

また、昔は投網なども絹糸を使用していたので、柿の渋に浸して、三本柱に張って乾燥して使った。糸が硬くなり水切りが良くなるのと、網が長持ちすることで使用した。

昔の井戸と風呂

車井戸

井戸には、車井戸、跳ねつるべ、他に自然の湧水を利用した井戸で「ゴキイド」と呼ばれる井戸があった。

跳ねつるべ井戸は、てんびんを応用したもので比較的地下水の浅い井戸で使われた。栗の木などの二岐のついた大きい柱を建て、柱を軸にして大きい孟宗竹の中心あたりをアンカーボルトで二岐に取り付け、釣瓶桶を付けた竹を孟宗竹の先に井戸に合わせて付けて、弥次郎兵衛式に重心をとっ

て水を汲み上げた。

車井戸は、深井戸用として地下水の深いところで利用された。木製の大きい滑車を使って、太い、特別に造られた井戸綱の両端に釣瓶桶をつけて滑車に取り付け、交互に汲み上げる方法である。屋根の棟木に滑車を取り付けた。

ハネツルベ

湧水を利用した井戸（ゴキイド）は、自然の冷たい湧き水どころを利用して作られた自然の井戸で、多くは山際の水源で、直接水を汲み上げて使った。ゴキ井戸の語源はさだかでない。

夏の暑い時期には、井戸にスイカを浸したり残ったうどんなどを籠に入れて吊るしたりして冷蔵庫代わりに利用した。また、井戸水で沸かしたお茶はおいしかった。

毎日の風呂の水汲みは婦人の仕事とされ、手桶に井戸水を汲んでてんびん棒を使って肩で担いだり、手に下げたりして運んだ。風呂桶いっぱいに水を満たすのには大変な量で、女の仕事としては重労働であった。

風呂の釜は、一般的にヒョットコ釜が多く使われていた。煙の出る口の部分がヒョットコに似ていたことから通称ヒョットコ釜といっていた。桶の中に薪を燃やす釜があるので、直接触ると熱いので二人で入るのには少々狭かった。また、風呂の湯が冷めてきたときに外風呂の場合、湯が沸くまでに時間を要した。

他に、五衛門風呂があり、この風呂は鉄の釜に直接入るようになっているので、簀子の板を沈めて入らないと熱くて火傷をする。しかし、中に障害物がないのでゆったり入れた。周りが鉄板なので、触ると少し熱い欠点はあったが、残り火でいつまでも冷めない特徴があった。石川五右衛門の釜茹でからその名前がついたと思われる。

昭和四十年代より簡易水道の普及と生活様式の進歩によって、井戸も風呂も大きく変貌した。

ハエとりと蚊いぶし

昔の家の建築構造は、雨戸と障子だけの隙間だらけで、どこからでも蚊や蠅などが入れる構造で、夏になると日中は蠅に、夕方になると蚊に悩まされた。

鍋などの周りや、食べ物などには黒くなる程の蠅が集まってくる。蠅叩きなどでは間に合わず、四角い紙に粘着のついた蠅捕り紙や、吊るして使うリボン型の蠅捕りなどが市販されていて使用するが、一日で黒くなるほど蠅がついてしまう。四角い蠅捕り紙は子供や猫などが踏んでしまうことがあり、一段高いところに置いた。

他にガラスで造った蠅捕りで、中に水を入れて置きハエが中に入ると出られなくなり水の中に落ちる仕掛けの蠅捕りもあった。

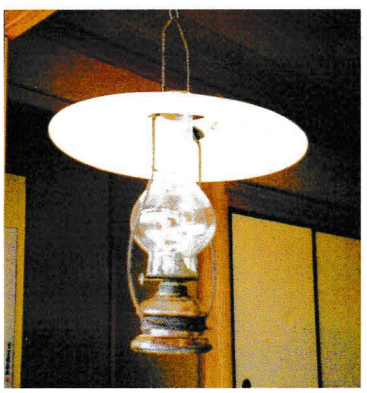
夕方になると、今度は蚊にせめられる。網戸などなかった時代で、当然殺虫剤もなく蚊の駆除の方法がなく、扇風機などなく暑いので戸や障子は開けっ放しであり、暗くなる頃には家の中は蚊でいっぱいである。当時の蚊の対策として、夕方暗くなる前に軒下で火を燃やし、煙攻めで蚊を追い払った。わざと燃えにくい半生の草などを燃やして煙を家の中に扇ぎ込んで充満させて追いだす、蚊いぶしという方法で追いはらった。菊の葉を燃やすと効き目があるといわれた。しかし、一時的には逃げ出すが、煙がなくなると、また戻ってくるので、蚊のいない僅かな時間に夕食を済ませる。

寝る時は、蚊帳を吊ってその中に寝た。ハエ帳のようなもので部屋全体を覆い蚊を防いだ。各部屋の四つ角に蚊帳を吊る取っ手が下げてあった。蠅とりや蚊いぶし、また蚊帳にしても今では笑い話のようだが、当時はどこの家でも蠅や蚊の出る季節は毎日行われたものである。

ランプのホヤ磨き

昭和二十年頃の電気が導入される前までは、石油ランプでの生活であった。

ランプには、大ランプと手ランプがあった。手ランプは、ブリキで造られた小さいランプで、手に持てるように取っ手が付いていた。小さいので台の上などに置いて使った。

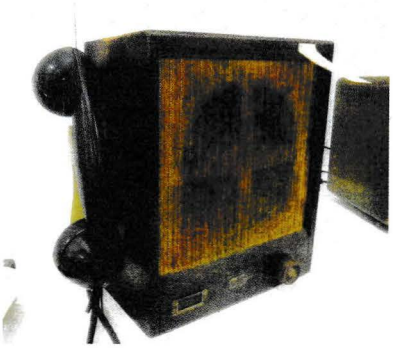


ランプ

大ランプは、居間などの広い部屋で使うメインの照明であった。しかし、大ランプとは言っても、新聞などを読むのは余程目の良い人でないと見えず、新聞をランプに近づけて見ないと読めなかった。石油を入れる台の部分と、ガラスで造られたホヤという風除けがあり、上には反射板の白い笠が太い針金の枠についていて、吊りさげて使用した。ガラスのホヤは炎の部分が膨れていて、上と下の部分が細くなっていた。一晩灯を灯すと、石油の煤で黒くなってしまうので、毎日磨いた。ホヤの上下が狭まく大人の手は入らないので、ホヤ磨きはもっぱら子供の仕事とされていて、毎日磨かされた。夕方遊びから帰ると、ランプのホヤ磨きが待っていたものである。子供の居ない時は、大人の手は入らないので箸や棒などに布きれを巻いて磨いたが、思うようには磨けなかった。

有線放送

昭和32年に山方町に待望の有線放送（電話）が導入された。当時、一般の黒電話は公共施設（役場や農協等）や商業を営んでいるごく限られたところしか入っていなかった。


有線放送受話器

有線放送は10戸前後の複数が同じ回線（１回線）になっており、電話番号は各戸違う番号を持っていた。役場に交換室があって常時交換手が勤務していて、一般の家庭から交信があった時に相手の番号を伝えてつないでもらうのである。複数の戸数による回線なのでその回線は全部呼び出し番号が入るので、呼ばれた番号の人が受話器をとる。

しかし、その回線の者は通話中に故意に聞こうとすれば聞こえるわけであり、あまり秘密の話や都合の悪い話はできなかった。

当時としては有線放送は非常に便利で、役場からのお知らせ一斉放送ができ、行事連絡や災害時などの緊急放送等にも利用された。

呼び出しは各家庭の番号を呼び、「１番さん、１番さん」のように２回呼び出した。したがって13番の場合「13番さん、13番さん」と呼ぶが、聞き方によっては「爺さん、婆さん」と聞こえたものだった。

この有線放送も、経済成長と共に各家庭の黒電話の普及により廃止となった。

えましむぎ

現在では麦飯を健康食として雑穀飯などと共に嗜好品として健康や美容のために食べるようになったが、戦前戦後は麦飯は常食として食べていた。白いご飯は正月や祝い事の時以外は食べられなかった。当時は白いご飯を銀めしなどと言い、なかなか食べられなかったのである。米は強制的に供出されてしまったので米は貴重であり、麦は米のカテに使われたものである。

麦つきの杵と臼

大麦は、家でも収穫したものを臼と杵で搗いた。餅搗き臼の３倍位大きい臼であった。杵も同様であった。臼の中にワラで編んだ輪っかを入れて搗いた。麦の粒が杵

で搗いた時に良く循環するためである。また、臼の中の麦には水を加えて湿り気を出し、麦がこすれて早く搗けるよう工夫した。

このようにして搗き上がった麦を鉄鍋で半日位トロ火でじっくりと煮た。煮えた麦を、えましざるという目の粗いざるを使って水にさらしたものを米と一緒に炊いた。このご飯が、えましむぎの麦めしである。

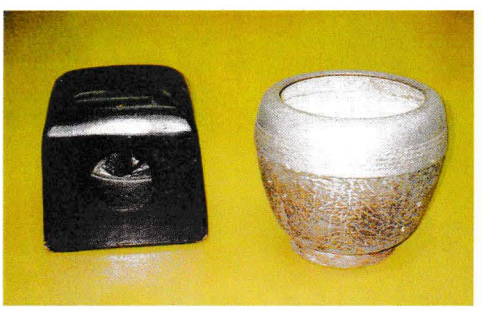
えましザル

子供の頃、暖炉裏の鉤吊しにこのえましむぎの鍋がかけてあり、とろ火でブツブツ煮立っていたものである。学校から腹をすかして帰ると丁度えましむぎがふっくらとふくれて炊き上がっており、茶わんにかき込んで醤油などかけて食べて見つかり、叱られたものであった。お世辞にも旨いものではなかったが、腹がすいているのでご馳走だったのである。

えましむぎの麦めしは、なめなめし、舌ざわりがありおいしかった。えましむぎの麦めしの味も、子供時代の懐かしい思い出の味となってしまった。

火鉢とアンカ

電気や灯油等による暖房器具はなかった時代の昭和30年代位までは、暖房といえば木炭による暖房であった。他には囲炉裏の火位である。座敷ではもっぱら火鉢による暖房で、炭をおこしたものを入れて暖をとった。火鉢には色々なものがあり、四角い木製で内側がブリキで周りは桐の板でできているもの、鋳物の大小のものや土焼きの火鉢、瀬戸焼きもあった。一般的には値の安い土焼きの火鉢が多く使われた。一番暖ったか味のあったのは、四角い桐の火鉢であった。鋳物や瀬戸焼きのものは天端（てんば）や周りが熱くなってしまう。



アンカと火鉢

昭和40年頃まで町の公共施設でも暖房器具はなかったので、職員は机の下に火鉢を置いて手を暖めながら事務をとった。早朝、若い職員達が七輪で上司の分まで炭をおこしたものである。

また、寒い冬の暖房のひとつにアンカ火燵があった。炭をおこして中の皿に入れて使った。囲炉裏に火燵ヤグラを作って火燵にしたのは、昭和30年代以降であった。それまでは土焼きのアンカが火燵として使用された。

しかし、土焼きのため炭を入れ過ぎると上部が焼けて熱かった。直接布団を掛けて火燵にした。

他に瀬戸焼きの湯タンポやブリキで造った湯タンポなどがあり、寝る前に布団の中に入れて暖をとったものである。

信　仰

厄落とし

厄落とし

男性は四十二歳、女性は三十三歳が本厄とされる。女性は派手なお祝いはしないが、男性の場合はほとんどの人が何等かの形でのお祝いをした。

男性は、人によって異なるが豪華に祝った人もあり、集落から親戚、友達など大勢招いて盛大に厄落としのお祝いをした。家で細やかに祝う人、料亭などで豪華に祝う人それぞれである。

昭和五十年当時の厄落としの例をあげてみると、同級生全員で行うこととし、代表二名で宮司宅に出向き、該当者の氏名と、生年月日を記載した名簿を持参し、厄払い当日の祈祷を依頼した。

一月十四日の厄落としの当日、時間は午後一時に諏訪神社に集まり、一堂に会して御祈祷をした。祈祷料として一人当たり二千円とし、他に車代三千円でお願いした。

厄落としの儀式には、それぞれ男女の子供達を依頼したが、平日であったので前もって野上小学校に出向いて、該当する児童の一時間位の休みをお願いした。厄落としの落とす金額と内容は統一し、十円玉で四十二枚とし、晒しに包んで、子供達と一緒に祈祷に向う途中、境内の参道で落とした。子供達には、それとなく話してあるので今か今かとついてくる。

依頼した子供達には、統一してお祝いとして、のし袋に三千円を入れ、その他一括して発注し準備しておいたケーキをあげた。集まった子供達には、みかん一箱を蒔かずに均等に分けてあげた。小学校には、初老祝いとして三万円を寄付する。ロッカー書籍箱等は毎年初老祝いで戴き、置く場所がないとのことなので、必要なものを自由に購入できるように現金とした。

記念事業として、全員による二泊での伊勢神宮参拝を実施した。

八丁じめ（一月と八月の十八日）

八丁じめは、年二回一月十八日と八月十八日に行われるもので、嵐除け、魔除けとして続けられてきた。

当時は、上の原と西の坪中で行われ、差し板制の当番で実施されてきた。藁ツトにお札を巻いて、新しい青竹の笹枝を三節位残したものに、藁ツトのお札を結んで下げたものを、上の原は県道の十文字、西の坪は諏訪神社南側入り口の角付近と、それぞれ一か所ずつ二か所に立てた。

この行事は、いつの頃から行われてきたのか分からないが、集落で代々受け継がれ実施されてきた。集落の入口付近に立てられるところから、集落の災難や疫病を入口で阻止し、併せて無病息災を祈願したものと思われる。当番になった家では、上の原と西の坪の各戸を回り、昭和六十年当時で三十円をお札代として集めた。

代々、西の坪の野上寿一様宅に諏訪神社の神主より、ご祈祷したお札が届けられてあった。しかし、若い者には藁ツトの作り方などはできなかったので、毎年、野上家で一式を二組作って準備してくれた。

八丁じめ（上の原）

八丁じめ（西の坪）

先代から次代へと代々引き継がれてきたが、最近の若者の信仰心の遠のく中で、更に戸数の急激な減少などにより、平成十年に廃止となった。

現在でも続けられている地域もあり、時々見かけることがある。所によっては、お札を竹に挟んで立てるところもある。

地蔵講（子安講）

子安講ともいわれ、安産祈願と子供の健やかな成長を願って行われる行事である。

元倉地域では、カシマ講などともいっていた。地域の婦人達が集まり、米や金銭を出し合い、宿は持ち回りとして行われてきた。二月十五日を目安に相談して実施された。餅を搗き、小豆餡をつくってアンコ餅にし、他にご馳走をつくって、お供え餅と安産祈願の木札、二岐の木を削って造ったものに、奉納安産祈願・子安講元倉坪中と奉納年月日を書いて子安地蔵に奉納祈願した。

子安地蔵（照田）

子安講祈願の代表的な子安地蔵は、諏訪神社南の道路沿いに小高い塚があり、石の地蔵尊が祀られてあった。塚の上には樫の大木が生繁り、地蔵尊の前には二岐の木で造られた安全祈願の木札が、古いものから新しいものと重なり合って奉納されてあった。中には二岐の大根なども供えられてあった。

この地蔵尊の塚は、道路拡張改良工事によって削り取られて道路敷となり、現在は同場所の北側の道路沿いの小高いところに移設されてある。

子安地蔵（西の坪）

天神講

学問の神、天神様のお祭りで、二月二十五日に行われた。

元倉地区には、天神講などお祭りの行事は行われていなかった。当時、原地区では毎年恒例的に天神講が行われていた。同級の友達からの誘いで原地区の天神講に参加させてもらったことがあった。

米二合を持参しての参加であった。原地区以外からの参加は一人だけであり、特別参加で飛び入りの参加であった。

天神講

半紙を四枚位糊で継ぎ合せて貼り、奉納・北野天満天神宮と、自分で毛筆を使って大きく書いた紙を糸で結び、のぼり旗をつくって篠竹の先につけ、それぞれ旗を担いで天神山に行った。当時は流田をシモッパラといっていた。その手前から山に入り、松林の道らしい道のない山道を登り、眺めの良い頂上に出て、松の林を少し行ったところに、白い岩肌が一帯に露出した山の頂に出た。ここが天神山であった。

頂上付近に、石で造られた小さい祠があった。

持参したのぼり旗を立てて奉納し、学問の向上を祈願した。天神山の奉納祈願も済んで、再び松林の急な坂道を下って帰った。宿の家に帰って、友達の母親達が数人集まりつくってくれたお昼の会食が楽しかった。ご飯は五目ご飯であった。これが美味しかった。人参、ゴボウ、それに芋ガラが入っただけの五目ご飯であったが、当時としては大変なご馳走であった。

昭和十八年当時で、食糧事情も最悪で非常時の時代であった。

幟奉納

幟奉納

奉納・諏訪神社、陰陽神社、金砂神社と晒の布に書いて幟旗をつくり奉納するもので、三月十五日に諏訪神社に奉納した。

この行事も、差し板による当番の家で行うもので、上の原と西の坪の各戸を回って晒代として、昭和六十年当時で三十円を集めて晒の布を購入し、幟旗をつくり旗の上部に横書きで奉納と書きその下には縦書きで、眞中に諏訪神社、右側に陰陽神社、左側に金砂神社と書き、上野原、西の坪中と年月日を書いて幟旗にして持参し、諏訪神社拝殿入口の格子戸に結んで下げて奉納した。他に手洗い所（お清め所）にも供えた。

お賽銭を供えて、両坪中の家内安全と、無病息災を祈願した。

この幟旗奉納行事も平成の初め頃まで続けられてきたが、八丁じめと同様に廃止された。

十三詣り

十三詣り

数え年十三歳になると、村松山の虚空蔵尊にお詣りに出かけた。十三詣りは戦前までは旧暦の三月十三日とされていた。子供達にとって楽しみの行事であった。

昭和の初期は、常磐線で石神駅（現在の東海村駅）で下車し、歩いて村松の虚空蔵尊様まで行った。阿漕ヶ浦沼のほとりを通って行ったが、石神駅から村松山までは結構距離があり大変ではあったが、当時は誰もが歩いてお詣りした。

祈祷が済んでから、海岸までの長い砂浜を歩き、やっと辿り着いた時の、初めて見る海に感動したものであった。当時の十三詣りのお土産は、海で拾った貝殻と、名物のあられの入ったきれいな飾り物の米俵であった。

天祭り

雷神様

上の原集落には雷神様があって、毎年四月に天祭りが行われてきた。

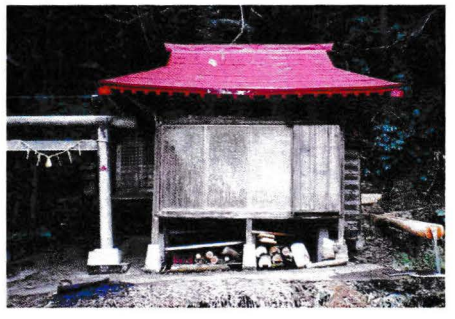
現在では、諏訪神社の境内に社が移設され祀られてある。雷神様は昭和の中頃までは上の原の、十三塚近くに安置されてあった。入口には鳥居もあって、長い参道の奥の小高い塚の上に社が安置されてあった。

雷神様の祭日は、春と秋の二回行われた。春季祭礼は四月十九日に、秋季祭礼は九月二十七日であった。天祭りは四月十九日に行われ、差し板による当番の家が役にあたり、昭和の後期の頃で、一戸あたり米一合と御神酒代百円を集めた。

天祭り当日は、当番の家では両隣りの手伝いをうけて、米の粉で餅を搗き（うるち餅）、蒔き餅と、大きい供え餅をつくった。その他、煮しめや茶菓子、御神酒などを準備した。米の粉でつくる餅は、臼で搗くので手間がかかり大変な仕事であった。当日午後四時頃に当番の人達は先に行って準備し、坪内の人達が集まるのを待った。餅や御神酒を供え、雷除けと五穀豊穣を祈願し酒を酌み交わした。子供達も大勢集まり蒔き餅が配られ、子供達にとっても楽しい行事であった。

普段、顔を合わせることの少ない者同士が集まり、世間話に花が咲き遅くなるまで酒を酌み交わした。

お不動様


お不動様

お不動様のお祭りは、旧暦の六月二十七日であり、夏の宵祭りには、いっぱいの灯籠が並んで大勢の参拝の人で賑わった。

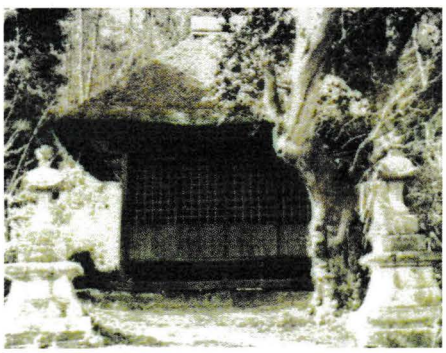
お不動様には、冷たい水が湧き出ていて、丸太を削って造った水樋が設置されていて、年中冷たい湧水が絶えず流れ落ちている。

社は、羽場地区に集落センターが建設されるまでは、羽場、新道地区の集会施設としての役割も果たし、両地区の憩いの場でもあった。

野上小学校は分校だったので、五年生からは本校の山方小学校に通学となり、距離があり、夏などは一時間位かけて枇杷川を通り、急な大坂（マザカ）を上り終わ

ると必ずお不動様に立ち寄った。まず、冷たい水を飲んで生き返り、顔を洗って冷たい水に足を浸して一息ついたものである。夏の暑い時期は毎日の日課であった。また、一般の人達もお不動様の湧水には癒されてきた。

観音様


観音様

元倉地内に観音様の御堂があり、昔から子安の神として多くの婦人方から信仰され親しまれ、内外からの参詣客も多く栄えてきた。大祭日は旧暦の八月十七日で、春季の天祭りは四月十七日であったが、現在は新暦で行われている。

昭和二十年頃までは元倉集落の戸数も全戸で二十戸位あった。

観音様は、元は坪井家一族の氏神として管理されてきた。隣接して山林も保有しているが、坪井家で管理していた。地区に集会施設がなかったので、観音様の御堂が集会の場として利用されてきた。元倉集落の相談事から新年会など、すべて集会所的な役割を担ってきた。

このような実状から集落全体の施設に改め、屋根など茅葺きから現在の屋根に改修するなど整備され、集落の施設として管理されるようになった。

旧暦の大祭日は、当番の世話人達が朝から集まり、宵祭りの準備などで忙しかった。宵祭りに正面に掲げる角型の大きい灯籠や、小さい角灯籠の張り替えなどの準備で忙しかった。張り替えた灯籠には、夏休みで大勢の子供達が集まり、思い思いの絵や文字などを好き勝手に書いて楽しんだ。夜になると灯籠の灯が、十三塚のあたりまで点々と灯り、幻想的であった。

なお、当日には新道のお不動様から大きなホラ貝を借りてきて、ご祈祷を受けた幣束を纏いのようにいっぱい付けたものを担いで、ホラ貝を吹き鳴らしながら元倉集落の全戸を清めて回り、無病息災と家内安全を祈願して歩いた。また、纏いの幣束を戴いて神棚に供えたりした。子供達も吹いてみるが、ホラ貝は慣れないと中々音が出てくれず、子供の時にウンコを食べた人は音が出ない、などと大人の人にからかわれたものであった。子供達も大勢でぞろぞろついて回った。

観音様の正面には広い芝生があって、大祭日にこの広場に舞台を造って浪花節などが行われ、近郷近在から参詣客が訪れ盛況に行われたことがあった。記憶の中では大子町の浪曲師で、東家伯燕という師匠で、曲師は目の不自由な女の人であった。

当時は御堂の周りには、黒松や椿の大木が生い繁り鬱蒼としていた。中でも目通

り周囲三メートル程もあり、幹には大きいコブだらけのサルスベリは見事であった。平成二年頃までは辛うじて花も咲かせていたが、残念ながら枯れてしまった。

四月の天祭りには、世話人の家でウルチ餅を搗いて蒔き餅をつくり、他に煮しめなどの料理も準備され、御神酒と一緒に神前に供えられた。一戸一名が参加して御神酒を酌み交わし、子孫繁栄と家内安全を祈願した。集落の人が集まる絶好の神事で、常日頃、顔を合わすことの少ない者同士の、コミュニケーションの場でもあった。

子供達も春休みで朝から集まり、諏訪神社から世話人が借りてきた太鼓を、庭のアセビの木に備え付け、交代で順番に叩いた。夕方には蒔き餅や菓子などが配られ、いっぱい戴いて帰った思い出に残る楽しい祭りであった。

神輿と雨乞い

神輿

野上地区には、立派な屋台（山車）は備えてあるが、何故か神輿はなかった。

聞くところによると、野上地区で神輿を造ったりもんだりすると、災いを招くと伝えられてきたとのことである。このことから想像すると、昔は神輿があって、災いが生じて神輿を置かないようになったと考えられる。

以前、小学校の運動会のときに、ダルマ神輿を造って運動場を担いだことがあった。好評をうけ盛会に終わったが、年寄りに注意され一回だけで止めてしまった経緯がある。

夏の渇水期になると何日も雨が降らず、農作物が旱魃によって被害をもたらすことがしばしばあった。このような時に、雨を降らせる手段として雨乞いを行った。陰陽神社の祭礼用の神輿を若衆達が持ち出し、深夜に気づかれないように野上まで持ち帰り、諏訪神社の拝殿の前に安置した。翌日に氏子総代や陰陽神社の世話人が相集まり相談し、雨乞いとなり、一晩中野上全域をもみ歩いた。当時は若い者が一軒に二人位はいたので、担ぎ手は大勢いたので盛大な雨乞いとなる。休憩度に御神酒が供えられ、ご馳走は出るしで若者達にとってはこたえられない行事であった。

以前は、たびたび行われてきたようだが、平成二十五年頃の雨乞いに参加したことがあったが、翌日の夕方に雷による大雨が降り効果覿面で旱魃から免れ喜ばれた。一晩がかりで苦労して陰陽神社から持ち出した甲斐があり、安心したものであった。

しかし、老朽化していた神輿は、その時を最後に壊れてしまい、雨乞いも最後となってしまった。

このような、陰陽神社の神輿による雨乞いは、幾度となく行われてきたとのこと

であるが、神輿を担いでの災いは全くなかったとのことである。

三夜様

旧暦の八月は十三日が三夜尊の夜まちで、原集落の世話人が御灯明の灯籠貼りなど準備した。灯籠には、子供達が文字や絵を書いたりして三夜尊の軒先に備え、夜を待った。

夜になると、世話人がお参りに来た人達を出迎え、お神酒の接待をしながら二十三夜の月の出を待った。しかし、二十三夜の月の昇るのは夜半であり大変である。

三夜様

昭和の中頃までは、二十三夜尊は手前の交差点のところに安置されてあった。また、三夜尊と隣接して、太い丸太の木で造られた三本柱の火の見櫓も建てられてあった。

車の普及等に伴い、道路の拡幅改良工事により三夜尊は現在のところに移設され、火の見櫓は上町交差点の現在の場所に移設された。以前の消防詰所は、踏切を渡った辺りに建てられてあった。

弁天様

弁天様は、大蓮寺墓地の西に位置し、以前の弁天様は周りが池に囲まれ、赤く塗られた社があった。正面には立派な鳥居があり、弁財天の額も掲げられてあった。

池の水も涸れることなくいつも水を満々と湛え、水辺にはセキショウの株が繁り池の周りを覆っていた。夏の祭日には、宵待ち（ヨマチ）で、灯籠がいっぱい灯り参拝者で賑わった。

平成に入り、県道山方門井線の改良工事等によって水源も涸れ、社も草の中に埋もれ、昔の面影はなくなってしまった。

しかし、平成二十五年頃に上町集落の浄財によって社も立派に復元され、コンクリートの参道も施工された。

旧弁天様

新弁天様

雷神講

雷神様は、上の原地区内の雷神様信仰愛好者が相集まり行ってきたもので、春季と秋季の２回実施されてきた。現在、諏訪神社境内に安置してある雷神様は、昭和の時代まで上の原に設置祀られていた。

雷神講

昭和30年代は15名位の愛好者があり、各自持回りの宿とし行われてきた。宿では赤飯、そば、うどん、天ぷらや煮しめなどをつくり、他にさしみ、煮魚などでいっぱいの料理が並べられた。会費制ではあったが、2,000円程度で魚代位であった。その他、会員は米２合を持参し雷神様に供えた。床の間には別雷皇太神の掛軸を掛け、御灯明のローソクを灯し、御神酒と当日のご馳走も供えられ、雷神の静安と五穀豊穣を祈願した。

掛軸

宴会は供えられた御神酒から始める。講のきまりとして清酒１升位とされた。しかし、世間話に花が咲き毎回盛り上がり、結局３升位飲んでしまうことはしばしばであった。農業、職人、勤めの人など職業もさまざまで、年に２回の講であり、情報交換の場として、またコミュニティの場としても最高の楽しみの場であった。個人名義の積立て貯金もあり、１人ずつ預かり、額は決まっていないので自分の懐次第でお願いする。当番の人が集めて郵便局に積立てた。

いつの頃から講が発足して続けられてきたのかはさだかでないが、掛軸に入れる桐の箱には昭和７年寄贈井坂栄助君と記されてある。この頃から講ができたのか、または箱が古くなり以前からあったものを造り替え寄贈されたものかはわからない。

昭和40年代まで10数名の愛好者で行われてきたが、その後７名の講員で細々ではあるが実施されてきた。年々高齢化し準備する宿の負担も考慮し、丁度元倉に料理店が出店されたのを機会に宿回りは廃止し、5,000円の会費制として例年どおりの春と秋との２回とし、料理店で行うようになった。予約や手配、会員との連絡等は今迄どおり当番の者があたり、供えもの白米２合とローソクは宿の当番が準備することとし、前回の宿の者は掛軸を持参する。会員は会費5,000円のみとした。しかし、

年を追うごとに高齢化し、平成17年9月25日を最後に休講を余儀なくされた。

庚申講

庚申講

干支（えと）の一つ、かのえさる（赤面金剛）の信仰者による講で、60日毎に回ってくる庚申の夜に行う行事とされている。

昔は庚申講は寝ないで徹夜する風習があった。庚申愛好者が集まり年１回とか決めて、かのえさるの日に講を行い、宿は持ち回りで米や金銭を持ち寄り庚申（赤面金剛）の掛軸を掛け、灯明と共に御神酒や当日の料理などを供えて酒を酌みかわし、世間話に花を咲かせ夜を明かした。当日は平打ちそばやうどんをつくって盛大に行われた。野上でもいくつかの集落で講があり、盛んに行われてきた。しかし、時代と共に若者の信仰心の関心も遠のき、高齢化も進み廃止に至り、実施するところは少なくなった。

現在野上で行っているのは、羽場地区の講のみとなった。

漁　猟

火ぼり漁

カンテラと針ヤス

針ヤス（うなぎ用）

夜に火を灯して漁をすることを、火ぼり漁といった。カンテラに石油やカーバイトを燃やして、その灯りで漁をした。燃料の石油やカーバイトは店で販売されていた。

石油用のカンテラはブリキでつくられ、丸い缶の両方に石油を吸い上げる細い筒がついていて、筒に木綿の布を通し芯にして火を灯した。主に久慈川や枇杷川の上流で漁をした。

夜間は、魚も眠っていて行動が鈍いので、ヤスで突いて捕った。火ぼり漁は初夏から夏に行われた。昔は川の水もきれいで、遠くにいる魚まで透けて見えた。また、魚の種類や数も多かったので、色々な魚が捕れた。うなぎ、鮒、かじか、おいかわ、あゆ、バカゾウ、ナマズ、鯉などの他、数多くの魚が生息していた。その頃は雷魚なども生息していた。川の魚ではバカゾウが一番簡単に突けた魚であった。砂利のところにいて、目が光って見えた。

他に、火ぼり漁で水田のドショウを捕る漁があった。昔は五月頃に、稲の苗を作るのに、水田の中に水苗代をつくって種を播いた。丁度その頃、田植え前に火ぼり漁によるドジョウ捕りが盛んに行われた。

捕ったドジョウを入れる一斗ザルを腰につけ、針ヤスという木綿針を金具に並べて付けたような形をしたヤスで、カンテラの灯りでドジョウを突くというより叩くようにして刺して捕った。この季節になると、カンテラの灯りが水に映り、狐火のように、火掘りの人が並んで見えた。当時は水田用の長靴などはなく、誰も素足だった。時々谷津田などでは大きな、まむしなどに出会うこともあった。うなぎなどもよく見かけたが、大きいうなぎはドジョウ用のヤスでは針が折れたり曲がったりして、ヤスが使えなくなってしまうので、うなぎ用の特性の針ヤスを作って持参した。

戦後の石油の買えない頃は、松の根株を掘って油脂化した部分のヒデというものを細かく割って、これを特製の網を作って燃やし、カンテラ代わりにして漁をしたこともあった。しかし、ヒデの場合は入れ物が重いのと荷物になり大変であった。

ヒデはヤニが多いので良く燃えたが、ヤニの煤で顔が真っ黒くなってしまう欠点があった。が、初夏とはいっても夜は冷えるので、ヒデを燃やしていると焚火にあたっているようなもので、寒さ知らずという利点はあった。

カーボシ漁

堀や川の水を堰止めて水を全部払い出して魚を捕る漁で、川干しが訛ってカーボシといった。

昔は、田んぼの中ほどを流れる用水堀の水量も多かった。当時は自然に流れる自然水を利用して稲作をつくったので、それぞれ自分の水田に水を引き込むために、堀に堰を作って水を確保した。五月頃から秋の収穫前まで、夏の間は堰を止めておくので、堰の中には鮒やうなぎ、ドジョウなどがいっぱい住み着いた。

稲の穂が出揃い垂れてくる頃になると水田の水も不要となり、堰の水も抜くことになり魚も水と一緒に下ってしまうので、堰を壊す前にカーボシを始めるのである。

最初に、止めておいた堰を壊わして水を流すが、全部一度に流してしまうと魚も一緒に逃げてしまうので、適当なところで水の流れをとめて、今度はバケツなどで水を払い出す。水が少なくなってくると、うなぎや小魚が草や藻の中から続々と出てくる。大きい堰になると、うなぎやドジョウなどの他に、鮒やギンバチも生息していた。最後にドジョウ掘りである。泥の中にいたうなぎも、最後には苦しくなって頭を出してくる。

子供の頃は、夏休みに入ると、まだ田んぼに水が必要な時期に、待ちきれず堰を抜いてしまって、水田の持ち主に叱られたこともあった。

ドクモミ漁

夏の渇水期の暑い時期に行うもので、毒物を流して川の水を荒らして濁し、魚を一時的に麻痺させて仮死状態にして捕る漁である。毒を入れて川の水を揉んで捕るところから、ドクモミといったと思われる。

毒の材料は、エゴノキの実を実の入らない青い実のうちに採り、実を臼などで潰したものに囲炉裏のアク灰と一緒に混ぜ合わせて捏ねたものや、他にサンショウやニガキの樹皮を煮詰めたものをエゴノキの実と同様にアク灰で捏ねて拳大のダンゴにしたものをいっぱい作る。これでドクモミの材料は出来上がる。

このドクモミ漁は、真夏の渇水期で水の流れが少ない時期を選び、また一日のうちで一番暑い時間帯が毒の効き目があった。仲間数人と毒ダンゴを持ち、小川に向かって暑い最中に出かけ、魚のいっぱい潜んでいそうな場所を選び、場所が決まっ

たら毒ダンゴを投げ込む。これも上流から始めて下流へと流していく。毒ダンゴを投げ込んだらバケツやスコップなどを使って水を動かし、できるだけ水を荒らして隅々まで毒が入るようにする。水を動かしたりして荒らす程、毒ダンゴと水の濁りで苦しくなり効果があった。始めて十分も過ぎると効き目が出始め、最初にウロコのないうなぎやギクなどが先に水面に頭を出し泳ぎ出してくる。特にうなぎはエゴノキの実の泡には弱いようで、水面に頭を出して蛇のように泳ぎ始める。これを出てきた順に網やザル等で掬いあげる。鮒や雑魚類のウロコのある魚は、後から徐々に効いてくる。

上流から流すので、下流に行く程毒の濃度が濃くなり効き目があった。このドクモミで捕った魚は、毒の材料がエゴの実やニガキの皮であり、一時的に弱るもので、きれいな水に入れて置くと一時間も過ぎると元に戻り、元気になる魚も多かった。

自動車のバッテリーなどを使って電気によって魚を感電させて魚を捕る人もいたが、毒モミやバッテリー等による魚捕りは、いずれも禁止されていた漁法であった。

テビシャギ

この漁は、川岸の水際の草や藻などの中や、波で削られ土手際がえぐれて窪みができているところなどに潜んでいる魚を、素手で探って両手で挟み撃ちして捕る漁法で、手びしぎが訛って、テビシャギといった。

川岸などの草や藻の中に隠れている魚を、両手を使って挟み撃ちにして捕った。波で水際のえぐれたところの魚を捕る手法が一番多かった。草や藻の生えたところの魚が捕りやすくて良く捕れた。昔は多くの種類の魚が生息していた。また、魚の数も多く住んでいた。川岸の草の繁みなどには大きい鯰やギクなどもいた。最初の頃は、手探りしていで大きい魚に出会った時は、一瞬ビックリして手を放してしまったりした。しかし慣れてくると、場所によっては面白いように捕れた。

時には、蟹に挟まれたり、ぎんばち（ギク）のトゲで刺されたこともあった。

最近では、川で遊ぶ子供はいなくなり、また素手で捕れるほど魚もいなくなった。

ヤスツキ漁

木製の板で箱型に造った箱の底にガラスをはめ込んだもので、水メガネや箱メガネ、他に水鏡などともいった。魚を捕るための水中を眺める用具で、このメガネを使って水の中の魚をヤスを使って突いて捕る漁法である。

昔は水がきれいで遠くまで透けて見えたので、魚が泳いでいるのが良く見えた。水中を泳いでいる魚や川底に潜んでいる魚をヤスで突いて捕るもので、カジカやバ

カゾウ（カマツカ）などは川底にジッとしているので突きやすかった。特にバカゾウは、砂利のところに多く生息しているので突きやすかった。慣れた人は泳いでいる鮎も突いた。鯉の場合は鱗が硬いので難しく、正面から頭を突くのがコツとの慣れた人の話であった。また、鯉などの大きい魚を突くヤスは、特製の大きいヤスを使った。

水メガネとヤス

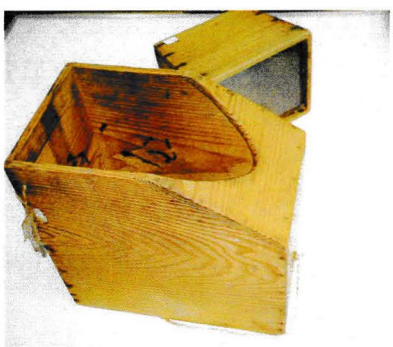
メガネで水中を眺めていると、色々な魚が目の前を通り過ぎていく。うなぎなども石の間などから頭を出してくるので、突いてみるが潜るのが速くて難しかった。いろんな魚が生息していて、水中を眺めていると飽きることはなかった。

今では見られなくなってしまった魚も当時はいっぱい生息していた。特に最近見られなくなった魚は、雷魚、八ツ目うなぎである。また、スナハギやギンバチなども数が少なくなった。

現在では透明度も悪く、また魚も昔より数が少なくなりヤスツキ漁は難しくなった。

ヒッカケ漁

ヒッカケ漁も、ヤスツキ漁と同様に水メガネを使って主に鮎を引っかけて捕る漁法で、熟練した者でないと難しい漁であった。ヒッカケ用の針は、大きい釣り針のような形をした針で、釣り具店で売っていた。



水メガネ（箱メガネ）

仕掛けは、キセルの吸い口を加工したものを竿の先につけ、大きい針三本を錨状に親糸に結んだものを、吸い口に通して固定して作った竿で、水メガネを使って鮎を引っかけて捕った。鮎が引っ掛かると吸い口に通してある親糸が外れる仕掛けになっていた。

ヒッカケ漁は難しいので、慣れるまでは、待ちびきといって鮎が通るのを待っていて引っかける漁から始めた。浸食を防ぐために川岸などに打った杭、ボングイが岸に並んで打ってあり、その杭の周りなどを泳いでいる鮎を待ち、水メガネで覗いて引っかける。鮎は縄張り区域があり生息する範囲が決まっていて、他の鮎が侵入してくると追い払う習性があり、じっと待っていると必ず一周して戻ってくる。失敗しても時間が経つと同じ鮎が戻ってくるので、いつも通るところに狙いをつけて

待ち、針の上を通ったところを素早く引いて引っかける。しかし、結構引くタイミングが難しいものであった。

ヒッカケ漁には、鮎が通るのを待って引っかける待ち引きと、流れながら泳いで鮎を引っかける流れ引きの方法があった。流れ引きができるようになるには、相当の熟練と経験を要した。

穴づり

昔は、小川や水田の堀などにもウナギが生息していた。初夏の田植えが終わる頃に大雨が降ると、ウナギが小川や水田の堀に上って来て住み着き、良い穴を見つけて入り込み住み着く。この季節になると、独特の形をした、細長くて底が平べったく広がったビクを担いだウナギ釣りの人を見かけるようになる。

ウナギ釣りの仕掛けは、ミシン針や木綿針をつかった、一般的には、ウナギ専用の釣り針が売っていたので使用した。大きいウナギの場合は、ミシン針の方が逃げられずに引き上げられた。みつ糸に針をつけ、エサには主にドジヨウを使った。細い篠竹の先にドジョウなどエサをつけた針を引っかけて、ウナギが入りそうな穴にさしこむ。穴の中にウナギがいれば、すぐにエサのドジョウに食いつき一気に引き込む。ときにはガニ穴といって、足のハサミの付け根にいっぱい毛の生えた大きい蟹で、ガニと呼んだ蟹のいる穴もある。ガニの場合もウナギのように引き込むが、すこし引いてみると感触でガニだとすぐわかる。相手にしているとエサのドジョウだけ取られてしまう。中々放さないので無理に引っ張ると、ハサミで糸を切られてしまうこともある。

久慈川など川でのウナギ釣りは、水メガネを使って川底を眺めてウナギの潜みそうなところを探す。川岸の浸食を防ぐためカゴに石を詰めて護岸してある蛇籠でジヤッカゴと呼んだカゴの辺りか、川岸の土手辺りの少しドロ混じりのところに生息していることが多かった。

川でのエサは鮎を使った。鮎を付けた針の竿を川底に近づけると、ウナギが首を出してくる。何匹も首を出してくるので、どのウナギを狙うかは、針に食いついたらすぐに引き込むので、できるだけ容易に釣り上がりそうなところのウナギを狙うのがコツである。見た目で大きいのを狙っても、ジヤッカゴの中などに引き込まれたら終わりであった。

多少は小さくても上げ易い場所のウナギを狙った方が無難であった。気長に根気よく粘っていれば何匹も釣れたものである。

下げ針

田植えの準備も終わり、余分な水を水田から堀に放水する頃になると、小川や堀にウナギ捕りの下げ針を仕掛けた。水田から水が流れ落ちるところとか、水の流れ落ちる堰の下などにウナギが集まってくるので、水の流れ落ちるようなところが仕掛けのポイントであった。

仕掛けは簡単で、ウナギ針を五十センチ位に切った水糸につけて、篠竹などに結んだものにエサのドジョウを付けて、水が流れ落ちるところや、堰の下などに挿して仕掛ける。夕方暗くなる前に仕掛けるのが良い。ウナギは夜に活動するので、明るいうちに仕掛けるとエサのドジョウが弱ってしまい、ウナギが好んで食べなくなってしまう。明朝うす暗いうちに仕掛けを上げに行く。明るくなると逃げてしまったり糸に巻きついて死んでしまったりする。

久慈川などの大きい川での仕掛けは、太目の水糸を親糸とし十メートル位に切ったものに、五十センチ位の水糸にウナギ針をつけ、親糸に五十センチ間隔位に均等につけて杭に結び、親糸の先に石を重石として結びつけて、エサは川の場合はドジョウでも良いがスナハギの方が好んだ。マゴタロウ虫が最高とされるが、中々手に入らない。ミミズでは、仕掛け終わって十分も過ぎるとサイ（ニゴイ）が食いついてしまう。

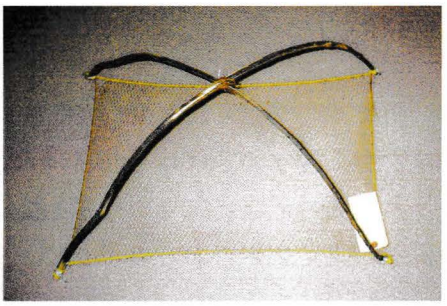
釣れそうな場所を見つけて、川岸に仕掛けの杭を打ち、片一方に付けた石をできるだけ遠くに投げ入れて仕掛ける。これを五組位準備して仕掛けた。明朝、暗いうちに上げに行く。杭の糸を引っ張ると魚が釣れている時は感触でわかる。ウナギの他、ナマズや大きいギンバチ（ギク）などが釣れた。大物が釣れた時の感触は最高であった。舟を使っての下げ針の仕掛けは三十センチ位の長い糸の仕掛けで、途中に何か所か重石の石を付け舟から仕掛けを下ろした。

久慈川の場合は、小川や堀と違って色々な魚が釣れるのと大物が釣れるので、醍醐味が違った。

カジカ押し漁

カジカ押し漁の道具は、二メートル位の木を二本使って、五十センチ角位に板を張り、板の真ん中あたりに足をかける穴をつくって押し板とする。他に八十センチ角位の四ツ手網と、捕れたカジカを入れる一斗ザルを準備すればカジカ押しの道具は完了である。

カジカ押し漁は、久慈川などの流れの速い川瀬で漁をするので、川底の石や砂利が滑るので、アシナカ、別名イボッキリという短い爪先だけの草履を履いて漁をし


四ツ手網

た。この漁は一人での作業は余程慣れないと難しく、一般的には二人組の共同で漁を行った。板押し役と四ツ手網に捕れたカジカをいれるザルの役で、ザルは押し板につけるか腰につけておく。

板押しは、四ツ手網にタイミングを合わせ、カジカを網に追い込むように押す。上部の二本の木をしっかり握り、波に逆らって水圧を利用してグリグリ川底の石を動かして下流の四ツ手網に追い込み、入ったカジカは素早くザルに投げ入れる。

この漁は、流れの速い川瀬で水をさえぎり、板の穴に爪先を入れて砂利を動かして漁をするという非常に体力のいる漁法であり、交代でやらないと大変であった。また、押し板と四手網の呼吸を合わせることが大事な漁であった。

このカジカ押し漁をすることによって、川底の石や砂利を動かして鮎のエサとなるノロを落としてしまうため、鮎の友釣りにとってよくないということで禁止となった。

バカゾウつり

バカゾウは、久慈川など大きい川の小石や砂利などの、比較的小さい石のところを好んで生息していた。小石混じりの砂利層で流れのあるやや深めのところに住んでいた。

川岸の竹藪で、適当な青竹を切ってきて釣竿にして仕掛けをつくった。青竹の先に直接釣り糸を付け、釣り針はバカゾウ針といって普通の鮒釣りの針より少し大き目の釣り針が売っていた。バカゾウはハゼに似ていて口が大きいので、普通の針では飲み込まれてしまうので大きい針を使った。重りに小石などをつけ、浮きはつけずにミミズや川虫などをエサとして仕掛けた。カワゲラの幼虫が一番良く釣れた。仕掛けを五本位つくって挿して置いて、浮きがないので釣れているかどうか判らないので、適当な時間帯で片一方から順に竿を上げていく。しかしバカゾウという魚は釣れていても全く手応えがなく、デレーと着いてくる。釣りの醍醐味は味わえない。このような動作から、バカゾウというまたの名がついたのか。本名は、カマツカという。

場所が良いと結構釣れたが、あまり美味しい魚ではない。

ズーコンづり

終戦後の昭和二十年代に流行った釣りで、一時的ではあったが夏休みなどは大勢の子供達で毎日のように、久慈川はズーコン釣りで賑わった。

この釣りは、釣りの中でも最も簡単な仕掛けで、最も良く釣れた釣りであった。釣り竿は一メートル位の竹の枝を使い、竿と同じ位の長さの道糸に、針は毛バリを使った。普通の鮒針に川虫をエサにつけても釣れた。毛針五本位を十センチ間隔位につけ、浮きも重りもつけないでそのまま、竿ごと水の中に入れて釣る。ザー頭などの流れの速いところで、仕掛けごと川の流れに流して、出したり引いたりする。同時に、片方の足で川底の砂利を動かして、すこし濁すと更に効果があり面白いように釣れた。

上流の方で雷が鳴り出し、雨が降ってきそうな時などは特に釣れた。子供達が集まり並んで釣ったものである。短い竿をグイグイ引く感触は何とも言えなかった。釣れるのは主にオイカワで、地方名でイカリメとかピンカリメ、或いはニガッチョメといった魚が釣れた。他に、鮎やウグイの稚魚なども釣れた。一時間も釣れば結構いっぱい釣れたものであった。

竿をだしたり引いたりして釣ることからズーコン釣りとか、ザー頭で釣るところからザーコン釣りなどと言った。

しかし、このズーコン釣りを大人の人がやっている姿は、あまり格好のいいものではなかった。

石タタキ漁

石タタキ漁は、魚捕りの中でも手ビシャギと同じく最も原始的な漁法である。

漁をする道具としては特別な仕掛けなどなく、大きいハンマーがあれば最高である。大ハンマーなどなかったので、もっぱら川の大きい石を道具とした。小川などの大きい石の下には、カジカや雑魚（ザコ）がいっぱい隠れていた。あまり大きい石の場合は効果がないので、子供が二人で動かせる程度の中間の石を選んで持ち上げ、上から落として打ちつける。ハンマーがあればハンマーで石の上部を思いっきり叩く。石の下に潜んでいる魚が打ちつけた時の振動の衝撃で、一時的に気絶して浮き上がる。素早く石を除けて、仮死状態になっている魚を捕る。捕るというより魚を拾って捕る。ゆっくりしていると本気づいて逃げられてしまう。中には衝撃で目が飛び出たり、内臓が破れたりする魚もいた。

現在では、魚が少なくなり、また石の下を住家としているカジカ類も少なくなり、この漁もできなくなった。昔は、沢川などで子供達がよくやっていた石タタキ漁である。

ドジョウすくい

一斗ザル

水田に水を入れるために、水田の周りには水路や堀があり、田植えの季節になると堰止められ常に満水となっており、草や藻などが繁茂し魚の生息場所となっていた。

現在では水田も基盤整備が進み、小川や堀も大きく様変わりしてしまい、ドジョウすくいをする場所も少なくなってしまった。

農家にはどこの家にも穀物などを入れるザルで、一斗ザルという大きいザルがあった。子供達は、この大きいザルを持ち出して腰まで水に漬かってドジョウすくいをしたものである。

捕れる魚は、主にドジョウが多かったが鮒やうなぎも捕れた。ギンバチなどが捕れることもあった。

今ではあまり見られなくなったが、水田の堀などにはメダカが水面いっぱいに泳いでいて、近づくと足音で一瞬に水中に散ってしまい、すこし過ぎるといつの間にか水面いっぱいに戻っていたものであった。

ドジョウすくいは、始めると追い目になって夢中で、ドジョウをザルに追い込み、ザルの渕が壊れているのも気が付かず夢中になり、帰って叱られたものである。

昔は、麦飯を炊く前に、大麦を囲炉裏やカマドなどで半日位の時間をかけてじっくりと鍋で煮込んだ。エマシ麦といって、ご飯を炊くとき米と混ぜて炊いた。このエマシ麦を洗ったり漉したりするザルを、エマシザルといった。エマシザルは水の切れがよくて手頃の大きさで、ドジョウすくいには最適なので持ち出して使ったりして叱られものだ。

うなぎ鎌漁

うなぎ鎌

夏の渇水期に備えて、水田用の水を貯めておく溜池が各谷津ごとに造られてあった。野上地区でも、笠敷の溜池をはじめ十か所位の溜池があった。

渇水期に、水田の水がなくなると溜池の水門の栓を抜いて水田に入れた。堰下全体に水が行き届くように、池の水を全部抜くことが

多かった。池の中には、一年かけて育った鮒やうなぎなどが数多く生息していた。特にうなぎが多く住んでいて、池の水がなくなると集落の人達がザルや網、バケツなど持参で魚捕りにやってくる。泥が深く、腰まで泥に漬かっての魚捕りである。うなぎが多いので針ヤスで突くのが一番捕れたが、泥の中に潜っているうなぎを捕るウナギ鎌という特殊な道具があって、泥の中にいるうなぎを引っ掻き回して引っ掛けて捕る漁具で、泥の中で見えないうなぎも大量にとれた。

上手な人は素手で掴んで捕る者もいた。

大勢の人が泥の中を歩き回るので、うなぎも苦しくなって泥の上に頭を出してくる。他の人の周りばかり眺めていて、自分の足元に頭を出しているのに気が付かず捕られてしまうこともあった。

このように泥の中で発揮したのが、うなぎ鎌であった。

落ち鮎のコロガシ漁

秋も深まり鮎の産卵期なると、落ち鮎のコロガシ漁が始まる。鮎が産卵のため川瀬に卵を生むため集まるのを、セヅキといった。

昔は、久慈川も水量が多く川幅も広く、ゆるやかな流れであった。魚も他種多様で、鮎などは群をなして泳いでいるのが川岸からも見えた。以前は小貫方面に渡る橋はなく、舟で渡った。渡船場があり小貫側に渡し船の船頭さんがいて、大声で怒鳴ると舟を漕いで来てくれた。片道十円位で渡してくれた。

夏になると、釣り場には鮎の友釣りの常連が大勢集まった。当時は自分で作った釣竿が多かった。カラッツネでアシナカを履いて、どの顔を見ても真っ黒に日焼けして目だけがギョロギョロ輝いていた。一日に一度は川に行かないと落着かないという常連達ばかりであった。

秋の彼岸を過ぎると一段と涼しくなり、そろそろ落ち鮎の季節となる。雄鮎の腹部が赤みを帯びてくると、産卵も近くなる。浅瀬で流れのさらさらした小石のところが産卵に適しており、産卵が始まると、雌の数倍もの雄鮎があつまってくる。腹部の赤くなった雄鮎は、夏川のような容姿はなく、痩せこけて肌はざらざらとなって頭部ばかり大きく感じられるようになる。

鮎の産卵で集まるのをセヅキといった。このセヅキの場所を見つけると、コロガシ漁で一晩に数キロもの漁をする者もいた。夕方から夜にかけて鮎は産卵の場所に寄ってくる。北の空が晴れて寒い北風が吹くような夜は、漁が多かった。

夜になると、どこからともなく釣り人が集まってきて、暗闇の中で一本竿を振り回しているので、隣の人の背中や、竿の糸に引っ掛けてのトラブルはしばしばであった。晩秋の十一月頃まで落ち鮎のコロガシ漁は続いた。

現在では、縄張り漁をする箇所は増えたが、落ち鮎のコロガシ漁をする人は少なくなった。

イタチのバッタ罠

終戦後一時的に毛皮が流行り、襟巻やコートなどが若者から年配層まで珍重された。

イタチ、ウサギ、タヌキなどの毛皮が高価で売れた時代があった。特にイタチの毛皮は高価で取引きされた。ミンクのコートなどはご婦人方にとって高嶺の花で、キツネやタヌキなどの襟巻をしていると金持ちに見えた。

中学生時代に、友達と小遣い稼ぎにイタチ捕りに挑戦したことがあった。自分達で簡単に取れる方法として、バッタ罠の方法を選んだ。赤松などの若木を七十センチ位に切ったものを藤蔓などで簀子状に編んで作り、イタチの来そうな場所に仕掛けた。山手の谷津田の一番奥辺りが、イタチの来る最良の場所であった。好物のドジョウを餌にし、罠の奥の方に吊るしておく。イタチが来て食べようとしてドジョウを引っ張ると、罠の簀子が落ちる仕掛けになっている。罠の簀子の上には田圃の土などが載せてあり、圧死するという仕掛けである。罠を五か所位仕掛けておき、早朝暗いうちに見回りに行く。冬の厳寒期なので寒くて大変ではあったが、一朝に三匹捕れたこともあった。しかし、全く捕れない日の方が多かった。毛皮は十二月から二月位までに捕れたものが最高とされた。それより先でも後でも値打ちが下がってしまった。皮に青味が出たり、毛の艶が悪くなったりして安値となる。

皮の長さが二十インチ以上の皮は、当時で一枚三百円位で売れた。ちなみに、その頃で勉強机が二千円位であった。

イタチ猟は、甲種の狩猟免許がないと捕ることはできなかった。なお、バッタ罠は当時も狩猟免許があっても禁止されていた罠であった。

野うさぎのヒックグシ罠

雪の降った朝などは、家の近くまで野うさぎの足跡が点々と、どこまでも続いていたものであった。足跡を辿って雪の中、うさぎ追いをしたものである。冬から春にかけて食べ物がなくなると、畑に出てきて麦を食い荒らされた。最近は雪が降っても、あまりうさぎの足跡が見られなくなった。狐などに食べられたのか、野兎病などによって死滅したのか、激減してしまった。

終戦後の、食糧事情の最悪の時代には、肉は店にもなかったので滅多に食べられなかった。家で飼っている鶏の肉なども年に数回で、それも卵を産まなくなった鶏

をつぶして食べる程度であった。肉は貴重品であり、野うさぎの肉なとは高級品であった。

そのような状況下で、野うさぎ捕りの罠の仕掛けが流行った。仕掛けは簡単で、針金の十六番線を使った罠をつくる。針金を軟らかにするのと、臭みを消すために藁などを燃やして焼きを入れ、輪をつくってヒックグシにして捕った。野うさぎは通り道が決まっていて、キツネや犬などに追われるなどの余程のことがない限り同じ道を通った。この習性を利用して、通り道を見つけて仕掛ける。通り道はいつも行ったり来たり通っているので足跡などできれいになっていて、通り道だとすぐ判断がつく。林や藪などはトンネルのようになっていて、邪魔な草や木などを噛んだり、また、通り道の枝などに毛が付いたりしているのですぐに判った。

ヒックグシ罠

仕掛けの輪の大きさは、うさぎの頭に合わせて、握りこぶしがやっと入る位が丁度よく、大き過ぎても小さくても失敗した。高さは地面から五センチ位がよかった。立ち木を曲げて固定し、うさぎが罠にかかって暴れると外れて宙に跳ね上がり、首が絞めつけられるように仕掛けてあった。材料が針金だけなので、通り道に何か所も仕掛けたこともあり、また、野うさぎの数も多かったので結構捕れたものであった。

あそび

兵隊ごっこ

昭和二十年前後は、大東亜戦争の最中でもあり、また戦後になっても戦争の名残があって子供達の遊びは兵隊ごっこが多かった。ラジオやテレビなどはなく、遊び道具もなく、子供達で遊びを考えて遊んだ。家の中で遊ぶものはスゴロクや将棋の山くずし位で、一時間もすれば外での遊びがしたくなる。屋外での遊びといえば、男の子はやはり兵隊ごっこであった。

竹や木を削って刀や鉄砲を作って振り回したものであった。ボール紙で階級章や勲章までつくり、二等兵から大将までつくった。刀で頭を叩かれるので、家から鍋や洗面器などを持ち出し頭に被って応戦した。鍋などデコボコにして叱られたものである。

頭にコブができたり血が出たりすると、階級が上がったりした。大将や上級の階級は、いつも上級生が多かった。一二年生はいつも二等兵である。

敵味方に分かれて野山を素足で駆け歩いた。腹が減って生のサツマイモや生の栗などを食べたものである。勉強などはそっちのけで駆け歩き、宿題など忘れて先生に叱られたり、立ち番などさせられたりしたものだ。

パーぶち（メンコ）

パーぶちは、何年かの周期で流行ってくる遊びで、数年続いたと思うと、いつの間にか廃ってしまう。何年かが過ぎると、また流行りだしたり廃ったりの繰り返しであった。

昔は遊びが少なかったので、正月など外で遊べるのは凧上げかパー打ち位で毎日のようにやったものである。パー打ちを始めると負けるのが悔しいので、色々な知恵もついてきて上手になってくる。遊びの技術や誤魔化し方が身に着いてきて、あまり力を入れないで瞬間的に相手のパーを裏返しにしたものである。

誤魔化しの典型的なものに、子守用のネンネコ伴天や、大きな袖の付いたドテラなど着込んできて勝負に挑むものもいた。伴天やドテラの大きな袖を巧みに使って風を起こして裏返しする方法で、袂の風の煽りを利用した卑怯な反則技である。また、何枚も張り合わせ重たくしたり工夫したものであった。

このパー打ちは、下手をすると手打ちをして指先を地面にいやと言うほど打ちつけることもあった。

地方によっては、パー打ちのことメンコ打ちとも言った。

ビー玉あそび

ビー玉遊びも、パー打ちと同様に、流行り廃りはあったがよく遊んだものである。今でもビー玉は店で見かけることがある。しかし、昔のようにビー玉を使って遊ぶ姿はみられない。

昔は色々な遊び方があって、考えながら遊んだものである。一定の距離を決めて線を引きその線の上に各自ビー玉を一個ずつ置いて、そのビー玉をジャンケンで決めた順にビー玉を投げて当てる方法で、線の上のビー玉に当たるとそのビー玉は自分のものになる。

他に、それぞれ一個ずつ置いてあるビー玉を狙い、真上から落として当てる方法もあった。しかし、芯に当たると割れてしまうこともあった。

定番として一番遊んだのは、相手のビー玉を指で弾いて取る方法の遊びであった。この遊びは、最初に通過点として、一定の距離のところに穴を作っておいて、必ずこの穴に入れてからでないと、相手のビー玉を狙うことができない。わざと入りにくい斜面などに穴を作る。発射線から親指と人差し指を使って打ち始めて穴に入れる。いつまでも穴に入らないでいると、先に入った人に当てられて取られてしまう。

小指を地面につけて、親指と人差し指で弾いて相手に当てる方法である。穴を三か所位作っておいて、これを全部クリアしないと相手のビー玉は狙いない。穴の数を何か所にするかは、始める前に決めて作る。

慣れてくると面白くなり夢中になって、夕方ビー玉が見えなくなるまで遊んだものである。

ベーゴマ

鋳物で造った三センチ位の小さくて平たいコマである。表面には時代のキャラクターなどが刻み込まれてあった。

樽や大きいバケツなどの上に、肥料袋など厚めの紙や布を被せて紐で固定し、すこし弛みをつけて土俵をつくり、その上にコマを打ちつけるように投げ入れて回し、相手のコマを土俵の外に弾き出す遊びである。

ベーゴマ

コマは、薄くて低い程、相手のコマを弾き出す力があるので、ヤスリで磨ったり、コンクリートの上で磨ったりして薄くしたものである。

最初は中々土俵の上にのらないが、慣れてくる

と百発百中でのるようになる。相手のコマを土俵の外に弾き出せば、そのコマは自分のものになる。ポケットが抜ける程コマを入れて持ち歩いたものである。

正月などには、自分で木を削って作ったコマを回して、長く回っている時間を競い合った。コマ作りはバランスがポイントで、均等に削ることができれば成功である。麻紐などで巻いたコマを投げつけるようにして回して遊んだ。

ベーゴマ

タガまわし

一般的には自転車のタガを使って回すのが普通であったが、中々手に入らない時代であり、やむを得ず大きい桶に巻いてある、針金の八番線を縒って作った桶のタガを回して遊んだ。自転車のタガと違って軽くて細いので、回すのに技術を要した。回す棒は細い竹の二岐の部分を使い、巧みに回した。回すのが難しいところが面白かった。

また、金のタガのないときは、樽などについている竹のタガまで回した。竹のタガの場合は、最初に回り出すまでのバランスが取れず難しかったが、慣れてくると面白くなり病みつきになったものである。

毎日、自転車のタガでばかり回して遊んでいると、飽きてきて変わった難しいものに挑戦したくなり、思いついたのが桶などのタガであった。

自転車が少なかったので、自転車のタガはあまりなかったので手に入らず、色々と工夫して遊び道具を探して遊んだ。

クギぶち

素手で地面に釘を打って遊ぶので、通称クギぶちといった。この遊びは長くは続かなかったが、終戦前後に一時的ではあったが流行った遊びであった。

五寸クギや三寸クギなど比較的大きいクギを使った。小さいクギでは軽くて、指で反動をつけても地面に刺さらない。遊び方は、親指と人差し指でクギの頭の部分を掴んで地面に打ちつける要領で打って遊んだ。

竹馬のり

昔は、親に教わり友達や兄弟などと、苦労して竹馬作りをしたものである。当時は小さい頃からみんなが乗っていたので、竹馬に乗れない子供はいなかった。最初は十センチ位の高さから乗り始め、上手に乗れるようになったら徐々に高くしていった。

小学校の上級生になると、自分で竹馬を作って乗った。足を載せるところがよく結んでないと、ずり落ちたりして慌てることがある。昔は針金などなかったので藁縄や藤蔓などを使って縛ったので、乗っているうちに、だんだん延びてきて弛んでしまい、竹の節からずり落ちたりして転んだりした。

雪が積もった時など、近くの子供は学校まで竹馬で来た人もいた。大雪の時などは自分の背丈位の高さにして友達の家まで遊びに行ったりした。地面に竹馬の足がめり込んでしまい抜けなくなって飛び降りたこともあった。高い竹馬を乗る時は台をしたり、土手の上から乗ったりした。

上手になると、片足乗りや駆け足もできて競争をしたものであった。

三角のり

子供用の自転車などなかった頃で、大人の自転車も古いものを修理しながら使っていた当時である。当時の自転車は丈夫にできていて車体も重たく、重い荷物を荷台に載せて運んだりするため頑丈にできていた。

今の自転車のようにサドルから前の部分がオープンになっていなかった。サドルの下からハンドルにかけて鉄パイプがあって三角になっていた。大人の自転車を子供が乗るにはパイプを跨ぐことになり、子供ではペタルに足が届かない。当時も婦人用の自転車はパイプがなく、前の部分がオープンになっていた。しかし一般家庭では普及していなかったし、経済的にも無理であった。

結局、ほとんどの子供が普通の大人の自転車に乗らざるを得なかったが、子供の足ではペタルに届かないので、考えたのが三角のりである。車体の三角の間から足を出して反対側のペタルを踏んで、自転車の横面にはりつく形で乗ったのである。いわゆる横乗りであった。バランスをとるのが難しく、すいすい乗れるようになるまでには、何十回と転びながら覚えたものであった。

三角の間から足を出して乗ることから、三角のりといった。この三角のりは、当時の子供で経験のないものはほとんど居なかった。上級生になって成長し、足が長くなって普通にペタルに足が届くようになるまでは、誰もが三角のりであった。女性でも、お転婆娘は男子に負けずに三角のりをしたものである。

オニムシとり

野上地方の子供達は、すべてのクワガタを総称してオニムシといっていた。

雄の大きいクワガタをオドゴメといい、雌は全部ババーメといった。ミヤマクワガタは背中には箱型があるのでハコショイといい、角に細かいギザギザのクワガタは鋸の歯に似ているところからノコギリといっていた。体が小さくて角のギザギザが少ないクワガタだけをクワガタと呼んでいた。地方によって色々な呼び方があったようだ。

昭和二十年代は、クワガタ捕りの方法として、オニムシホーロキという捕り方が多かった。クワガタが住みそうなあまり大きくない木を選び、幹を足で蹴って揺さぶる。ホーロキとは揺さぶることで、その振動の衝撃で幹や枝にいるクワガタが落ちてくる。しかし、落ちてきたクワガタは素早く拾わないと落ち葉の下などに入られてしまうので、急いで拾う。時には大きい毛虫なども落ちてきて、びっくりしたものであった。

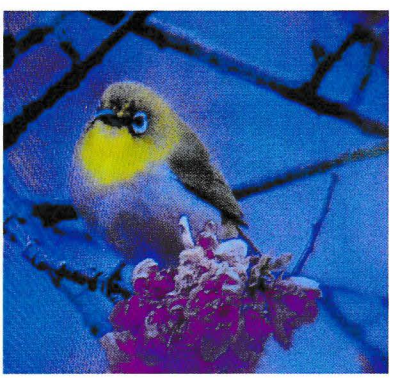
樫の木が一番多く住んでいた。次に、クヌギの木、ナラの木の順に多く住みついていた。子供の力では、あまり大きい木は蹴っても動かないので、子供でも振動が効くような木を選んで蹴った。

木の幹にバヂックイといって、虫に食われた傷跡で汁が出ているところにはカブト虫やクワガタなどが集まってくる。しかし、スズメバチなども集まってきて一緒に汁をすっていたので注意が必要であった。

周りが農家なので、堆肥などにカブト虫の幼虫がいっぱいいて、カブト虫はいくらでも捕れたので興味はなかった。時々友達と大きいカブト虫を捕ってきて、マッチ箱などに糸を結び角に引っ掛けて引かせて競争をして遊んだくらいであった。

メジロとり

鳥籠におとりのメジロを入れて、籠ごと風呂敷に包んで早朝のまだ薄暗い時間にメジロ捕りに行った。できるだけ山奥で小高い頂上付近をめざした。高いところ程メジロの鳴き声が聞こえて集まってくるからである。笠敷山から金毘羅さん、ジジイコロバシ辺りがメジロ捕りの集まる場所で、野上や長田から大勢の子供達が集まった。栗の若木の徒長枝を使い、枝のトリモチを巻く部分を口で舐めてぬらして巻いて使った。



メジロ

仕掛けは、メジロが来そうな、あまり大きくない木を選びオトリの鳥籠をひっかける。籠の上にトリモチを巻いた栗の若木を二本位挿して、他にメジロの好きな、熟した柿や、タラの実などを置いてメジロを引き寄せる。

オトリのメジロの鳴き声に誘われてメジロが方々から集まってくる。メジロが籠に近づいてきたら、すぐにトリモチにかかったメジロをとりに行けるようにヨーイドンの姿勢で待つ。ゆっくりしているとメジロの羽毛に、トリモチがくっついでしまったり、逃げられてしまうからである。メジロはトリモチにかかると、すぐにクルッと逆さまにぶら下がる習性があり、温かい日などはトリモチが軟らかになり、ゆっくりしていると、その儘ぶら下がって逃げられることが多い。

メジロが近づいてきて息を殺して待つスリルが、何とも言えない心境であった。一度に三羽位かかってしまった時などは、メジロの足に着いたトリモチを取っている暇がなく、その儘入れてしまうので、足のトリモチに毛が付いてしまい抜けてしまったりして価値が下がってしまう。メジロとりは、秋の霜が下りる前がよいとされた。誰もが経験したメジロとりである。

ヤマガラも捕ったが、ヤマガラ捕りはトリモチを使わず、オトリの籠を使い、二連式の籠で半分に仕切られ、片方にはオトリのヤマガラを入れ、もう片一方は仕掛けになっていて、エサのエゴの実などヤマガラの好むようなエサを入れて置き、オトリのヤマガラに誘われて仕掛けの中に入ると天上の開いていた戸が閉じる仕掛けになっていた。

水ハゴとバカハゴ

ハゴとは、小鳥などを捕るときに使う、栗の若木の徒長枝などを利用してトリモチを巻いた枝のことである。

雑木林の谷間などに、僅かに流れる湧水でできた水溜りがあり、そこは小鳥達が水を飲んだり羽を休めて水浴びをしたりする水場となっている。それぞれの小鳥達は、いつも来る水場は決まっているようで、一日のうち何回か決まった時間帯にやってくる。この水場にトリモチのハゴを仕掛けて捕る方法を、水ハゴといった。オトリの鳥がない時に、オトリを取るためによく利用した方法である。

他に、バカハゴというやり方で捕る方法もあった。小鳥が飛んできて何時も決まって止まる枝があり、その枝を利用して仕掛ける。何時もの止まる枝を切って、代わりにトリモチのハゴをすり替えて仕掛けて置く。気付かずに止まってしまい捕れたものである。注意深いスズメさえこの方法には引っかかることがあった。これをバカハゴといった。

ホージロ追い

ホージロ

最近はスズメの数も昔よりは少なくなったが、特に、ホージロの姿は最近めっきり少なくなり滅多に見ることができなくなった。昔はスズメの次にホージロと言われる位に、山の近くや原野の林などにいっぱい生息していた。

ホージロは、雄の頬が白いことからホージロの名がついたと思われる。追われたりすると、少しでも高いところに飛んで行く習性があった。特に春先の繁殖期になると、雄のホージロが高い木の梢で盛んに鳴いているのを見かけたものであった。

ホージロの習性を利用してホージロ捕りをした。メジロ捕りと同じように、トリモチを使って捕った。栗の徒長枝にトリモチを巻いて、ホージロが何時も集まる茶の株などの高いところにトリモチを篠竹の先に挿して、茶の葉より先にトリモチの部分だけ出して仕掛ける。ホージロが止まりやすいように仕掛けるのがコツであった。茶の株が一番仕掛けやすい高さであった。これを何か所か仕掛けて、田んぼなどにいるホージロを、反対側から仕掛けの方に追い払うのである。あまり遠くには飛んで行かず、止まるところが決まっているので仕掛けやすかった。トリモチにホージロがかかったら、一目散に駆けて行かないと逃げられてしまう。

学校が休みの日などに、二三人の共同でよくやった遊びがホージロ追いであった。春先に高い木の梢で雄の鳴く、一筆啓上……の甲高い声でグデル姿は懐かしい。

バッタ罠

秋の取り入れが終わる頃になると、子供達が待ちかねたように仕掛けたのがバッタ罠である。このバッタ罠は生け捕りにする方法として仕掛けた罠で、ホージロ、アオジ、他にカワラヒワなどが捕れた。

バッタ罠

篠竹を六十センチ位に切って、藁縄や藤蔓などで簀子状に編んだものを使って罠を仕掛けた。エサは稲穂を使い、落穂などを拾っておいたものを使った。罠に付けてある稲穂を引っ張ると、仕掛けが外れて簀子の罠が落ちる仕掛けである。簀子の上には土や石などの

重しが載せてある。入った小鳥が圧死しないように、エサの稲穂の周りの地面を十センチ四面ぐらいの穴を掘っておく。この穴で小鳥は生きているという仕掛けであり、数か所仕掛けを作っておく。学校から帰ると真っ先に罠を見に行ったものである。この方法の罠には毎日のように入っていた。しかし、学校の帰りが遅くなったりして翌朝に見に行くと、既に猫などにやられて羽毛だけが残っていたこともあった。一番捕れたのはホージロであった。ホージロは水田近くの林に多く生息していたので、そのような場所を選んで仕掛けを作った。懐かしいバッタ罠の仕掛けである。

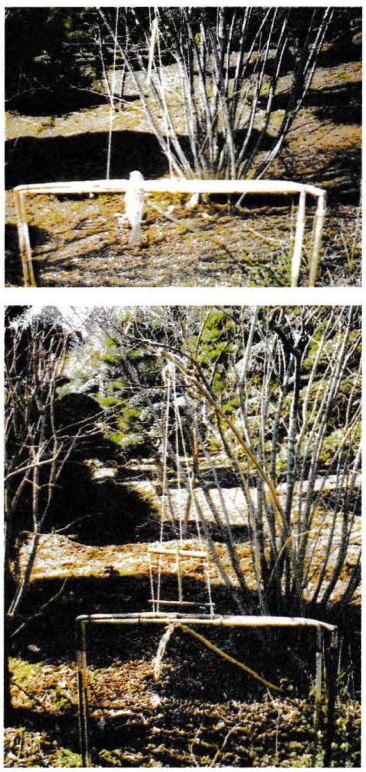
ブッチメ罠

この仕掛けも、捕れるのは、ほとんどホージロが主であり、時々アオジが捕れることもあった。ブッチメ罠は小鳥を捕る仕掛けとしては、もっとも残酷な方法の仕掛けである。

罠の材料は、篠竹を曲げて四面に挿してつくる。近くの適当な立木を折り曲げてバネに利用して仕掛けた。エサはバッタ罠と同じ稲穂を使った。罠に下げてある稲穂を食べようと近づいて罠の止まり木にのると、仕掛けが外れて立木のバネによって小鳥の首が絞め付けられる仕掛けである。

同じような罠で、キジバトを捕る仕掛けを地面に仕掛けた。竹笹などで周りを囲い前方だけ開けておき、中には大豆やソバの実などキジバトの好きなエサを蒔いておく。キジバトは茶の実を好んで食べるので、茶の株の近くに仕掛けることが多かった。

仕掛けの要領や作り方、仕組みはホージロの罠と全く同じだが、ホージロは地面から一メートル位高いところに仕掛けるが、キジバトの場合は地面に仕掛けた。



ブッチメ罠

ホージロにしてもキジバトにしても、首を絞められる仕掛けであり、焼き鳥用であった。いずれもバネによって絞めつける仕掛けからブッチメ罠といった。

フルイ罠

フルイ罠

フルイ罠は、農家で収穫時に穀物等のゴミを篩にかけて選別するときのフルイを使用することから、フルイ罠といった。

小鳥の中でも賢くて敏いと言われるのがスズメであり、トリモチや罠には用心して近づかない。したがって、中々捕れないのもスズメであった。何時も人家の周りに数多く生息するのもスズメである。人との係わりも多いが、また厄介者とされるのもスズメある。

色々な罠やトリモチなどで試してみるが、いずれも警戒して近寄ってこない。しかし、どういう訳かフルイ罠には入ってくる。天上が金網で明るいので安心なのか、網目の粗いフルイほど近づいてくる。フルイの中には籾殻や稲穂、小麦などを蒔いておいた。

スズメが稲穂などのエサに誘われて、フルイの中に入って仕掛けを踏むとフルイがパタンと落ちて生け捕りとなる仕掛けである。

綱を引くとフルイが落ちる仕掛けもやってみるが、スズメは綱に警戒して中々近づかず、周りのエサばかり食べていて中には入らない。

フルイ罠にスズメが入った時、スズメを取り出すのが難しく、フルイを持ち上げたときフルイと地面の隙間から逃げられてしまうことも多かった。

ニラ虫つり

ニラ虫

昔の農家では、すべて手作業によって作業をしたので、庭が作業場となっていた。稲や麦類、大豆、そばに至るまで、庭で収穫作業を行った。大切な庭の保護のために、冬期間は木の葉や稲藁などを敷きつめて凍らないよう防寒した。春になり暖かくなったら、敷きつめた稲藁など全部取り除き竹箒できれいに掃除する。

六月頃になると、きれいになった庭の表面に、一ミリ位の無数の穴が夜空の星のように並んで開いていた。人が通ったりすると、足

元の近くから進む方向に順に次々と穴が開いていく。通り過ぎるとまた、地面の穴がなくなって見える。これは、穴の中にいる虫が地面まで頭を出していて、人の足音で潜ってしまうので穴が開くように見えるのである。

この穴の虫を、ニラ虫と呼んでいた。図鑑によると、ツチハンミョウという虫の幼虫のようだ。頭と言うのか、顔と言うのか、平たい奇妙な頭をした不恰好な姿をした虫である。この平たい頭で穴に蓋をしたように塞いでしまう。足音などで地面に潜るので穴が開いたように見え、また出てくると頭で穴が塞がる。蟻や虫などが穴の上を通ると、一瞬のうちに穴の中に引きずり込む。

穴に潜っている虫をニラの葉で釣ったことから、ニラ虫の名がついたと思われる。ニラの葉を穴に差し込むとすぐに噛みつき、エサの虫でないことが判ると外に噛みついた儘、ニラの葉を押し上げてくるので、素早く引き上げると頭だけがガッチリした虫が釣り上がってくる。何匹釣れるか競争して遊んだものである。

七月頃から羽化して成虫の甲虫となり、人が通る方向に一斉に飛んで移動した。

庭に芝をはったり砕石等の砂利を敷いたり、また、除草剤などを散布したりするので、今はあまり見られなくなった。

グミとり

春から秋にかけて、各季節ごとに熟れる色々な種類のグミがあった。子供達は時期ごとに熟れるグミを待ちこがれて採りにいった。

グミの中でも代表的なのはナツグミで、実の形が才槌に似ているところからサイヅチグミといっていた。近くの山野に数本の大きい木が点在し、実の熟れる六月頃には友達同士で採りに行ったものである。また、初夏に熟すバラグミがあり、色々の種類のバラグミがあった。中でも黄色く熟れるモミヂイチゴがおいしく、バラグミ中では王様であった。

桑の木に熟すクワグミもよく食べた。当時は養蚕が盛んであり桑の木は多く植えてあったので、子供の頃は腹がいっぱいになる程食べたが、口の中や唇の周りが紫色に染まり、クワグミを食べたのがバレてしまったものである。

赤く熟れたウグイスカグラの実も、手の平いっぱいを一度に口に入れて食べた。田植えの頃に熟すことから、ナワシログミとも言われた。

庭木として植えられるヤマボーシの実も、夏の七月の頃に熟し、山野に自生していたので木登りして採って食べた。別名ヨメゴロシなどとも言われ、大きくなる木で枝先の方までいっても滅多に折れない木であった。

最近あまり見られなくなったが、秋に熟すアキグミがあり、木の幹や葉などはナツグミに似ているが、赤い実が枝いっぱいに熟し、甘酸っぱく口の中に渋味を残す

のが特徴であった。他にも、キイチゴをはじめ蔓性のグミ類も数多く自生し、熟す季節を楽しみにグミ採りをしたものであった。

グミとは全く種類が異なるが、塩辛い実をつけるヌルデの木があり、実が熟すと白い塩のようなものが実に付くことから、シオノミの木と呼んでいた。

水あび

久慈川までは遠いし、子供だけでは危険なので、条件は悪いが近くの小川や溜池などで水あび、水遊びをした。子供達は地域の、それぞれのグループで、より近い水場を見つけて水あびをした。

笠敷を水源とする元倉方面から流れる堀と、越地の奥を水源とした堀が合流した、県道の南側に水田用の広い堰があって、周りをコンクリートで囲まれた三角型をした天然のプールがあった。通称、三角場（サンカクバ）と呼んでいた。地域の子供達の格好の遊び場で、篠の沢、上の原、元倉方面からの子供達が、夏休み中はいつもいっぱい集まって遊んだ。今と違って、水量も多くいつもきれいな水が流れていた。

また、渇水期の水田用として造られてある溜池も、夏になると子供達の遊び場となっていた。元倉の奥に比較的広くて条件のいい、カサジキタメイケと呼ばれる溜池があり、地域のプール代わりとなっていた。小麦藁など束ねてイカダを作り浮かべて乗ったりした。多く乗り過ぎて、よく沈没したものである。しかし、溜池であり底はヘドロで周りには草や藻が繁茂していて、泳ぐとすぐに泥で濁ってしまった。また、蛭に吸われながらの水あび、水遊びであった。それでも大勢集まって遊んだものであった。

少し遠かったが、枇杷川の上流の沢川にもよく泳ぎに行った。大林を通って雑木林を抜けると急な坂道で、オオザカという坂道を下って行くと沢川に着く。川の流れが屈折し岩場に突き当たり浸食されてできた自然のプールのような場所があり、マワリカドと言っていた。深いところもあったが溺れる程のところはなく、水はきれいで、子供達にとっては最高の遊び場であった。しかし泳ぎ終わって疲れての帰り道は、オオザカの急な長い上り坂を上るのが大変で、また汗をかいてしまったものである。

ヒッパジキ罠

秋から冬にかけ稲の脱穀も終わり、田んぼに小鳥たちが下りてくる頃が、ヒッパジキ罠の時季であった。

手頃な真竹を５m位に切って、小鳥のよく集まる平らな場所を選んで仕掛ける。田んぼの稲の脱穀をした跡は最高の場所であるが、仕掛けの縄を引っぱるのに距離があり過ぎて無理であった。あまり距離があると、縄（紐）を引いた時に縄が動くので小鳥達に気づかれ、仕掛けがはずれる前に逃げられてしまう。家の近くの罠から目立たないところが、小鳥に気づかれなくてよい。

２本の杭を打ち、竹の元の方を杭に２ヵ所結んで固定し、先端を弓なりにグーンと曲げたところにもう１本の杭を打ち、先端をひっかけて止める。竹を曲げて反らした外側に籾や小麦、そばの実、モミガラなどを蒔いて小鳥をおびきよせる。曲げて止めた杭に縄を結び、縄をひっぱると止めた青竹が外れて竹の外側にいる小鳥が全部弾き飛ばされる仕掛けである。

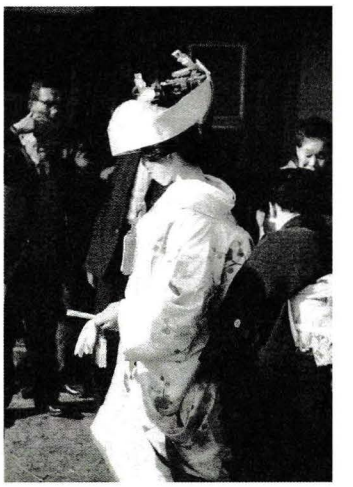
最初のうちは見事にきまり、１回に20羽位の小鳥が捕れた。しかし、馴れてくると警戒をして近寄らなくなる。

また、長い時間竹を曲げたままにしておくと、竹が曲がったままの癖がついてしまって弾力性がなくなり、全く機能を失ってしまう。また、冬などは凍ってしまって戻らなくなってしまうので、厳冬期にはやらなかった。

しかし、この仕掛けは小鳥を全部弾き飛ばして殺してしまうという、もっとも残酷な方法の罠であった。焼き鳥用の罠である。

冠婚葬祭

御祝儀


オミアワセに出るところ

昔のご祝儀は、仲人や知人の紹介によって持ち込まれる縁談が多く、本人同士の意見などはあまり重視されず、相手の容姿や器量などより、血統とか財産などに重点がおかれ、顔つきや器量は二の次で、相手が良いとなれば親同士と仲人によって決められてしまうことも多かった。

仲人は婚約が成立するまでには、両家の間を七度半通うとされていた。それほどに両家共に相手方を念入りに調査したので時間がかかったのである。ほとんどが仲人に勧められての見合いが多く、特に農家から農家への場合はその傾向が多かった。お互いに純情な農村の若者の場合などは、姉が不細工の場合、見合いに妹が替え玉に出されても、結婚式には当人の姉に代わっていても気が付かなかったという話もある。

見合いが終わり婚約が成立すると、〆樽（結納）となり当日には仲人が新郎方に行き、結納品一式と熨斗紙を水引で結んだ赤樽（祝い事に使用する柄の付いた樽）に酒一升を入れ、樽にはスルメ二匹を結び付け持参して新婦宅に参上する。ご両親と新婦の他、兄弟、親族等の迎える前で結納品一式、目録等を並べて、仲人は結納の口上を述べ盃を交わす。持参した赤樽の酒を、半分の五合を使用する。盃は両親、新婦、兄弟、叔父等と順に回し結納の固めとなる。なお、御祝儀の日どりなども結納の日に決めることが多かった。

仲人は残りの五合の入った樽を新郎方に持参し、結納金（御帯料）の受領証と目録を持参して新婦側と同様の儀式を行い、目出度く〆樽、結納の儀式は終わる。その後に近所の方なども招いて婚約の披露をして祝い酒となる。

昔は、〆樽と結納は別の日に行われ、それぞれの儀式が執り行われた。また、事情によっては〆樽の日から、足入れといって婚礼前に新郎方の家に行って生活することもできた。足入れをすれば御祝儀前でも夫婦として認められて、両家は親戚としての付き合いをすることができる。諸事情によって結婚式が遅れる場合などに行われることが多かった。

御祝儀は農繁期を避け、秋から春にかけて式を挙げることが多い。御祝儀の二三日前の吉日を選んで、嫁入り道具が新郎方に運ばれる。衣装入りの箪笥、布団、鏡台、

針箱、はり板、裁ち板、下駄箱、たらい、などが運び込まれた。箪笥の鍵はかけない儘とされ、衣装や道具を近所の人達が自由に見ることができた。中身などで評価されるので、親は無理をして衣装などいっぱい入れた。祝儀は自宅で行われ、二三日前から近所の人達が手伝いに集まり準備で大変であった。

結婚式当日は、新郎側から仲人夫婦と新郎の他、近親の人が五人か七人で嫁を迎えに行く。赤樽に〆樽の時と同様に酒一升を持参して家紋入りの弓張り提灯を持って出かける。

新婦側に着くと、相客の案内で座敷に上がる。仲人は持参の赤樽を新婦の父親に渡すと床柱を背にして座り、一同も向かって右に男、左に女がそれぞれ年の順に座る。最初にお酌よりお茶が出され、その後おひき合わせといって新郎側、新婦側の父母、兄弟、おじ、おば、などの紹介（名乗り合い）が行われる。それが済むと新郎方から持参した赤樽の酒の半分を冷酒で、三つ組の杯を回して飲む。本膳にはお頭付の魚や鯛、たこなどの刺身、酢のもの、吸い物などの七品。引き物は打ち菓子は「松、竹、梅、鶴、亀」。生ものは「鯛、めまき、かまぼこ、えび」。他に祝宴の最後に大きい鯛の塩焼きが出された。酒はお酌が次々とついで回る。それからは新郎方に近所の人が相客として酒の接待をする。相客の人が代わるがわる接待されるので酒の弱い人は大変である。

新郎は、宴会の途中で新婦の叔父などに連れられて名入りの手拭を持って坪内の家をオミアワセに回る。最後には、御納めの杯となり、三合杯、五合杯、七合杯などの大盃での接待となり、飲まないと新婦は渡せないなどと言ってすすめられるので結局宴会が長くなる。やっと最後のうどん（ゴタンのうどん）をご馳走になり、新婦の引き渡しのころは早くとも午後十時を過ぎることもある。祝宴の後、新婦は両親に別れを告げ仲人の案内で新郎方に引き渡される。新婦を送る一行は新郎と同様である。昔の嫁入りは、馬に乗せられて行ったそうだが、昭和になってからは自動車を利用するようになった。

新郎の家に近づくと、相客の人が家紋入りの提灯を持って出迎える。新婦が座敷に上がる際には新郎方の親戚の女の人が新婦の頭上に笠をかざす。笠被せといって、今日から新郎方の一員となって家業に携わるという表現をした。一行は相客の案内で座敷に落ち着くと、まず仲人は新婦方から預かった受領証や持参品を新郎の親に渡す。すぐに、落ち着きのお茶が出される。新郎方での接待は新婦方とほとんど同様であるが、祝宴に入る前に夫婦盃の儀式がある。座敷の六枚屏風で仕切られた中で三三九度の盃が交わされる。仲人の指揮で、五、六歳の男女の子供が雄蝶、雌蝶の銚子を持ってお酌をする。雌蝶は新郎に、雄蝶は新婦に酌をする。三三九度の夫婦の固めの式が終わると、今度は新婦方の客をもてなす酒宴が始まる。出されるお膳の料理や品は新婦方とほとんど同様である。この席には新郎方から話上手な相客

が何人も交代で酒を勧めて接待をする。酒宴が終わって客が帰るのは夜中になってしまう。酒宴が始まると、新婦は新郎の叔母などに連れられて花嫁姿で、提灯をかざして近所の家を回ってオミアワセを済ませることが多かった。

全ての式が終了し新婦の客が帰って、それから新郎方では近所隣の人や親戚の人達の祝いの酒宴に入るのである。しかし待ちきれず、また遅くなって迷惑をかけるので、襖で部屋を仕切ってお祝いの宴を始めてしまうことが多かった。

ご祝儀が終わっても、二、三日は友達や同級生などを招いて宴会が続き大変であった。

現在では、家での結婚式はなくなり結婚式場を利用し、また仲人（媒酌人）を介しての結婚式も少なくなり、本人同士で結婚式場を選び司会者に委ねる結婚式が多くなった。

お悔み（葬式）

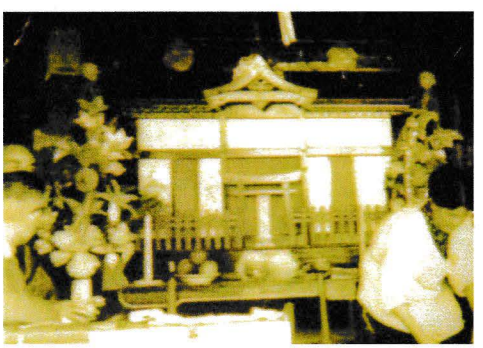
現在では、葬儀場を利用しての葬式がほとんどとなり自宅での葬式は少なくなった。

昭和四十年頃までは、ほとんどが土葬であり、集落総出の葬式で大変であった。亡くなった人があると隣の人や集落の代表に連絡し、当家と集合時間を決めて、ころばし（言い傳え）で決められた範囲の集落全戸に連絡する。勤めの人が多かったので夕方に当家に集合することが多かった。

時間となり全員が揃ったら、当家からの挨拶と依頼により、集落代表か長老の人が座長となり当家の意向を聞いて日程や葬式の役割などを決める。帳場五名、陸尺六名を決める。帳場が決まれば早速帳場はお寺様に連絡をとり、読経依頼と棺（本泉寺に既設の棺があった）の予約をする。次に、祭壇や棺桶の発注などをした。帳場が決まった時点からすべて帳場の指示に従った。相談が終了したら明日の朝の集合時間を帳場から告げられる。夕食前の時は簡単な夕食も準備した。豆腐と酒で焼酎上げをして当日は解散とした。

朝食は済ませてくるようになったが、昔は朝食から葬式の終了するまで当家で食べた。両隣は子供まで当家で食事をして学校に行った。その後は統一され朝食は済ませてくるようになった。

次の日は、帳場の人は早めに行って全員が集まるのを待ち、当家からの名簿によってお知らせの封筒の宛名書きを手伝っても



本泉寺の棺

自宅での葬式風景

らった。お知らせ状は学校に行ってお願いし、鉄筆書きのガリ版刷りで黒枠入りとした。お知らせ状は宛名を書いたセロハン封筒に入れて、地域ごとに振り分けてお知らせに出かけた。野上地内は一人とし、他は二人ずつ出かけた。大宮、大子位までで、遠くは電報とした。野上地内は歩いて行き、以外は自転車で行ったが、遠くに行った人は三時頃帰る人もいた。弁当代としてカツ丼程度を頂いて行った。親しまい、の家や縁の近い親族の家では、お昼の準備などして大変な接待をし、土産まで用意しておく家もあった。

帳場の人は葬儀に必要なものを書きだして、不足のないようこ婦人方とも相談して購入して取り揃えた。病院より死亡診断書を頂き役場で埋葬許可書を頂いてくるのも、帳場の仕事であった。陸尺の人は、お寺から既設の棺を借用してリヤカーで運んで来る。

当家より墓地の埋葬場所の指示を受けて、棺箱に合わせ六尺の穴堀りをする。山手の墓地は途中で岩や石に出合ったりしてツルハシで掘ったり、骨や頭蓋骨などが出たりして交代で掘るが、場所によって大変であった。帳場より酒一升と豆腐一丁が届けられ清めながら掘る。掘り終わったら道具は七日目迄その儘置いてくるのが習わしであった。他に、出棺時に備え、竹を割ってタイマツを作った。昔は夜に行ったので灯りとりの他、狐や狼除けとして行われ、その名残りで形式だけ残り行われていた。

手伝いのご婦人は、赤飯を炊いたり煮しめをつくったり、食事の準備などで忙しい。特に当日は早朝に集まり、葬式に来た客が式の始まる時間まで休む中宿(休憩所)の準備、また、接待など大変であった。中宿は両隣りの家を借りることが多かった。

当日、陸尺の人達は帳場で準備した地下足袋を履いて、六尺の晒をタスキに巻いて手拭の鉢巻で整え、帳場で準備した酒一升と豆腐一丁で清めながら出番を待った。酒は残してはいけないと言われ、飲まない人がいると大変である。既設の棺は四人で担ぎ途中での交代はできないので、酒をひっかぶった人は大変なことになる。

帳場では焼香の呼び出し以外の人は、香奠等の受付をするが、並んでの行列で一時は忙しい。親しまいが多かったり引きものがある場合は特に大変であった。式が終わって墓に埋葬に行っている間に、香奠の金額を数え香奠帳と合わせる。しかし、香奠を袋に入れずに出されたり釣り銭の人、また行器代として現金を出す人などもあって実際には中々合わず、埋葬の人が帰っても合わない場合もしばしばあった。

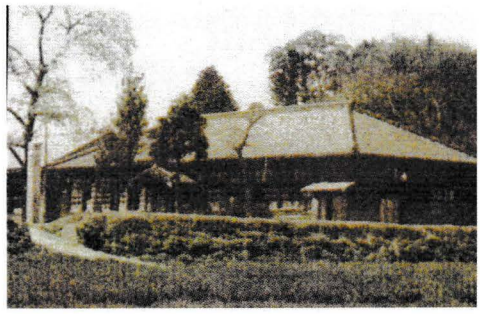
計算が終わって、当家や親しまいの人にそれぞれ香奠の金額を渡し、最後に葬儀

に支出した決算の報告をして帳簿と残金を渡して、一応の役目は終わる。行器代は集落の手伝いの方にとのことなので、手伝いを受けた戸数で均等に分ける。行器とは、手伝いの方にと赤飯や煮しめ、饅頭、菓子などをホカイという四段重ねの重箱に入れて容器に納めて帳場に持参するもので、近い親族で持参するものである。

葬儀終了後は、当家よりご苦労振る舞いのご馳走が準備された。帳場長よりの挨拶と当家からの御礼の言葉があり、三日目、七日目の法要も併せて行う場合が多かった。当家や親戚からご苦労に対しての品など頂いて、三日間にわたっての葬儀は終了となる。

思い出

野上分教場のころ



野上分教場

昭和三十六年三月までは、野上小学校も舟生分校と共に山方小学校の分校で、野上分校であった。木造の二教室で、校舎と隣接して教員の住宅があり、住宅の一部に事務室が併設されていて渡り廊下で校舎と結ばれていた。

分校は四年生までで、複式の二学級であった。先生は二名で、主任の先生は住宅に家族と住んでいた。複式学級で一年生と二年生が一つの教室で、三年生と四年生も同様であった。一年生の授業の時は二年生は自習であった。三年生、四年生も同様であり、先生も切り替えが大変であった。頭の良い児童は上級生の教科を覚えてしまう子もいた。教科書は国定教科書で何年も内容が変わらないので、進級する時は下級生に譲り、また上級生から譲り受けて使ったりした。

運動場の南側に正門があり、立派な御影石の門柱が二本建っていた。一周五十メートル位の狭い運動場に大きい桜の古木が数本あって、春の桜の花は見事であった。校舎の玄関前には月桂樹の古木と、幹が半分枯れて空ろになった柳の木があって、校舎の前には二宮尊徳の像が建っていた。校舎の裏手に、汲み取り式の便所が渡り廊下で結ばれてあった。便所の近くには山桜の大木があった。

秋の運動会は、区民運動会として野上区民総出で行われ、青年会、婦人会等も一緒になり児童と共に大運動会が毎年続けられていた。岩崎までのマラソンから、土俵を造っての相撲や俵担ぎなどの種目もあって、四集落の対抗競技として行われ、集落と学校が一体となって賑やかに開催されたものであった。

昔は田植えも、現在より一カ月位遅かったので、麦刈りや葉煙草の植え付け、田植えと重なり農家は一度に農繁期を迎え、学校でもこの時期は農繁休があり、農家の児童は決められた期間内は、手伝いのための休みは欠席扱いにはならず、喜んで田植えの苗運びなどを手伝ったものであった。

水稲の苗は水田の中に作ったので、苗に害虫が寄生するので、学校から児童が害虫駆除の虫捕りの奉仕作業に出かけ、苗の上を篠竹の竿で撫でて虫や卵を捕った。捕った量によって学用品など褒美を戴いた。

国民の祝日の、四方拝、天長節、明治節、新嘗祭などの当日は、本校の山方小学校まで歩いて行って式に参加した。式の終了後には、国旗と軍旗の打ちだし模様の

入った紅白の米菓子や饅頭などが配られ、家に持ち帰って仏壇に供えてから食べるようにとの先生からの伝言であったが、毎年のように帰りの途中で腹が減って食べてしまったものである。

五年生からの、本校の山方小学校に通学する方法は、野上の中でも地域によって通学路は異なり、元倉、小屋場以外の生徒の多くは国道を通学路としたが、元倉や小屋場の生徒の多くは、新道から枇杷川経由は遠回りになるため、和田坂や大久保経由で通学した。元倉方面の生徒は、天狗沢から狭い坂道を下って、橋のない枇杷川にかかる飛び石を跳ねて渡った。台風などの大雨の時は、小屋場を通ってジンニンザカから和田橋経由で行った。しかし、夏の少し位の出水の時は、服などを脱いで束ねて向う岸に投げたり、頭の上に結んだりして、みんなで泳いだりして渡ったこともあった。帰りが遅くなった時などは、和田下のお不動様の森を抜けるのが、一人の時は特に寂しかった。

当時の履き物は、ほとんどの生徒が下駄や草履での通学で、通路は整備されていない砂利道であり、特に五、六年生の一時間掛けての登下校は大変であった。

勤労奉仕

昔は、田植えも現在より一カ月以上遅かったので、麦刈りや煙草の植え付けと田植えが重なり、農家は一度に農繁期を迎え、猫の手も借りたい程忙しい時期となる。

学校でもこの時期には農家の児童は、特別に農繁休があって決められた期間内は欠席扱いとされず、喜んで田植えの手伝いをしたものであった。

当時は水稲の苗を水田の中に苗代をつくって苗を育てていたが、苗に害虫が寄生したので学校から児童が寄生した害虫の駆除をする虫捕りの勤労奉仕をするのが例年の行事となっていた。

全校児童で班を編成して出かけ、苗の葉の上を篠竹の竿で撫でて葉の裏側に付いている虫や卵を捕った。捕った虫の数や、葉に産み付けてある卵のついている葉の枚数、また、蛾の数などによって、褒美として鉛筆やノートなどが配られた。当時の在校する児童の殆んどが農家であった。

しかし、当時は誰もが素足でズボンの裾をまくり上げての作業であった。蛭に吸われながらの仕事で、大騒ぎの勤労奉仕であった。

国民の祝日

野上分校の頃は、国民の祝日の四方拝、天長節、明治節、新嘗祭などがあり、当日は本校の山方小学校、現在の山方総合支所まで一年から四年生全員で並んで歩い

て式典に参加した。野上から徒歩での四キロの道のりは、特に下級生は大変であった。枇杷側のでこぼこの砂利道を通り、山方宿駅前を抜けて宿通りに入ると、初めて見る洋館風の建物や店が連なる繁華街に驚いたものであった。

学校も大きく、運動場の広さにも驚いた。真ん中あたりに大きい欅の木があったのが記憶に残っている。隣接して中学校もあり、小学校の玄関前には、教育勅語などを安置した洋館風の建物で、鉄筋コンクリート造りの奉安殿という建物があった。

式典が終わると記念として、国旗と軍旗の形が打ち出された紅白の米菓子や紅白の饅頭が配られた。家に持ち帰って仏壇や神棚に供えてから食べるようにとの先生の伝言であるが、道のりが長く帰る頃は昼過ぎとなり空腹で口を付けてしまったものであった。

今では国民の祝日が多くなり、また昔と変わってしまった祝日もあり、祝日でも国旗を掲げる家も少なくなった。

弁当箱の保温器

昭和十七、八年頃、戦争最中の当時で、野上分教場の頃であった。

学校給食など当然なかった時代で、それぞれ弁当持参であり、弁当箱での弁当が大半であった。真冬でも冷たい弁当をひろげて食べていた。その頃、学校に大きい書類を入れるような木製の戸棚が持ち込まれて廊下に置かれた。

弁当箱を温める保温器とのことであった。戸棚の中は、五段位の金網を張った箪笥のような引出しになっていた。一番下には火鉢を置くようになっていて、火鉢を置くところは引き戸になっていた。金網を張った引き出しの扉は観音開きの戸になっていた。

金網の上に裸の弁当箱を並べ、下の火鉢には真っ赤におこした炭を入れて弁当箱を温める仕掛けになっていた。学年ごとに一段ずつ利用した。

梅干しで穴の開いたアルミの弁当、ホーローびきの弁当など、形も色もとりどりの弁当箱が並んだ。冬期間、暖かい弁当が食べられ、毎日お昼の時間が待ちどおしかった。

あまり熱過ぎもなく、程よい温かい弁当が食べられるようになった。

父兄による給食

弁当箱の保温器が入ってから、間もなく父兄によるお汁の給食が始まった。

在校児童の母親などが五人位の班を編成して、回り番で毎日お昼に温かいけんちん汁や、浸した大豆を擂鉢で擦ったものを、けんちん汁に入れてつくったゴジルと

いう香ばしくておいしいお汁の給食があった。

校舎と事務室を結ぶ渡り廊下の北側にダルマポンプの井戸があって、その近くにカマドを設置して大きい鉄の鍋でお汁をつくった。

当番の人達がそれぞれ持ち寄った白菜、大根、人参、牛蒡や葱など各家庭で採れた野菜の食材を使ってお汁のけんちん汁をつくり、一晩浸した大豆を準備して擂鉢で擦った豆乳のようになった汁を、出来上がったけんちん汁に入れてつくったゴジルという美味しいお汁が毎日食べられた。特に冬の寒い時期には温かで、お代わりをして頂いたものであった。

このお汁が当時の給食であり、現在の給食の草分けでもあった。温かい弁当箱に温かいお汁の給食でお昼の時間が楽しみであった。

山方空襲

昭和十六年十二月八日から続いた戦争も、敗色が濃くなってきた十九年の頃より空からの爆撃機（B29）による空襲が始まり、毎日のように警戒警報の半鐘が鳴り響くようになった。

日を追って警戒警報から空襲警報が頻繁になり、学校の授業も校内は危険なので駒形神社の境内や、そっかえり（芝）の山などに授業の場が移り、山から帰宅とされる日が多くなっていった。帰る途中で空襲警報のサイレンや半鐘の音を聞き、山に隠れる日々が続いた。

特に昭和二十年に入ってからは空襲の頻度も激しくなり、ついに七月十日には太田方面からグラマン一機が飛来し、山方宿の上空でロケット弾を発射し六名が死亡し一名が負傷するという空襲による悲劇が起こった。

死亡者の中には東京から戦火を逃れて疎開していた二名も含まれていた。また、同級生で親友だった長谷川屋の野口誠君も布団を被った儘で亡くなった。駒形平に防空監視哨があり、二十四時間体制で空の監視をしていた。また、山方小学校の北舎の一棟に軍隊が駐留していたので、どちらかを狙ったものと思われる。当日の朝、午前六時頃、長田方面からグラマンという太った形の戦闘機が低空飛行で突然現れ、野上の諏訪神社の上空あたりでバリバリっと機関銃による射撃の音がし、山方宿駅を発車し台の内付近に差し掛かった列車が銃撃によって一名が犠牲になった。このグラマンが再度戻り、山方空襲に及んだと思われる。

七月十七日には日製工場の多い日立市が、太平洋海上からの艦砲射撃によって海岸住民は恐怖におののいた。なお、二日後の十九日には空襲により市内は焼土と化した。

また八月一日には、水戸市が深夜から未明にかけて爆撃機B29百数十機による大

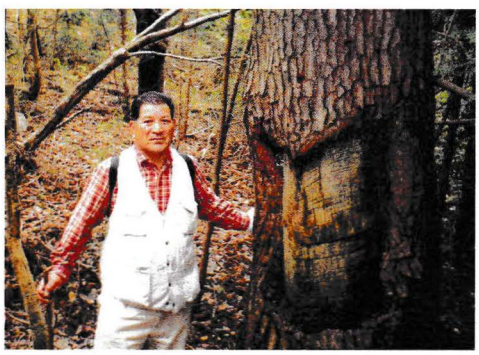
空襲に襲われ、市内の大半が焼失した。

灯火管制により電燈は黒い布で覆い光が漏れないようにし、腹に染みわたるようなB29の爆音が消え去るのを待つ夜が続いた。防空壕を掘ったり、縄筒や防火用水を準備し、防空頭巾を被って避難する毎日であった。

暗いハダカ電球に黒い布を被せて、空襲警報が終わるのを息を殺して待ったのを今でも思い出す。

松根油と終戦

二十年八月十五日、この日も茹だるような暑い日であった。今日も五年生以上の男生は交代制での当番で、十数人が組になり松根油採りに道具を担いで、汗を拭きながら歩いて山に向った。



松根油取りの跡

南皆沢の入口あたりの山で、現在のケビン村になっている付近で赤松の大木が繁る山林であった。松の幹にノコギリやナタなどでV型に傷をつけてブリキの樋を取り付けて、受け皿に空き缶を付けて松根油（松ヤニ）採りを三人一組位に分けて作業をした。

ノコギリの傷跡

この頃、一般の業者等においても、松の切り株を掘って焼き、ヤニの油、松根油を採る作業が行われていて、野上でもお不動様の入口付近に松の根株の集荷所があり、また、西の内集会所前の広場には大量の根株が置かれてあった。終戦後も松ヤニで真っ黒になったドラム缶が何本か置かれてあった。

この油脂は精製して飛行機の燃料にすると聞かされ、戦争に勝つことを信じ、毎日毎日交代で暑い山の中で汗を拭きながら頑張っていた。

しかし当日の十時過ぎの頃、級の生徒が息をきらして駆けつけて来て、もう松ヤニ採りは止めて、すぐに帰って来るようにとの連絡であった。理由は、ラジオで重大ニュースが放送されるからとのことであった。

全員教室に集まり、不穏な気持で正午からのラジオの放送を待った。天皇陛下の玉音放送で無条件降伏の放送であった。誰も言葉はなかった。長かった、つらかっ

た、苦しかった戦争の終わった瞬間であった。

終戦直後の出来事

終戦から一カ月位過ぎた頃、突然アメリカ兵が見たこともない角ばったシート張りのジープという自動車で、しかも山方小学校入口の急勾配な石の階段を登って来たのである。

MPと大きく白い字で書いた鉄兜を被り、自動小銃を手に持った四人の大きな体をした兵隊が下りて、職員室に向かって行った。

初めて見るアメリカ人の兵隊である。当時は皆殺しにされるとか、連れて行かれて奴隷にされるなどの噂や憶測もあり、子供にとっては本当に恐れていたので、何に来たのか生きた心地はしなかった。出来るだけ目が合わないように恐る恐る見守っていた。英語の話せる河野恭一先生が通訳したとのことであった。その日は三十分位で引き揚げていったが、一週間ぐらいして今度は五名の兵隊が来て、裏庭にあった倉庫などの検査をして、当時青年学校で使用していた練習用の銃や中学校の剣道の防具、竹刀、薙刀など、中庭で灯油をかけて焼かれてしまった。剣道の面の部分や鉄砲の筒など、燃えない部分などが焼け残っていた。書類なども一緒に焼かれたとのことであった。奉安殿の中から、物置の裏板まで突ついて検査したらしく、天上裏がボロボロに破られてあった。

その後も何回か来るようになり、お互い慣れてきて近づいて来て訳の分からない英語で話かけるようになり、チュウインガムという菓子のような銀紙に包まれたものを頂き、みんなで少しずつ分けて噛んだことがあった。

戦争が敗れて誰もが動揺していた終戦直後の出来事であった。

地　名

笠敷

元倉から長田に行く町道の途中に、笠敷というところがあり、地名にもなっている。この道は昔、太田方面から長田、長沢、檜沢を経て烏山に通ずる旧街道筋であり、烏山街道と呼ばれてきた道で、太田方面から塩や魚を馬に載せた商人が往来したといわれる。

旧烏山街道（笠敷坂）

元禄年間、水戸の黄門様が諸国漫遊のとき、この道をお通りになり坂道を上った頂上付近にさしかかった折に、赤松の枝ぶりの良い古木があって、根本で一休みした際に笠を敷いて腰をおろして休んだことから、笠敷と呼ばれるようになったと伝えられ、この峠を笠敷峠と呼んでいる。

昭和の中ごろ、笠敷峠を越えずに長田に抜けられる立派な町道ができたことにより、薬研掘りの旧街道の難所、笠敷坂を上ることなく峠を越えることができるようになった。

金田と金洗い

野上地内の中程に金田という小字があり、またその下流にには金洗いというところがあり、いずれも地名になっており金に係わる地名である。

昔この辺りは川が流れていて、金田から金洗いにかけて砂金の採取をして砂金洗いをしたことから、金田、金洗いの地名になったものと思われる。金田から下流の渡芝、金洗いにかけての石は、角のない丸い石が多く出土している。砂金の砂を採取して、下流の比較的水量の多い金洗いあたりで砂金を洗ったものと考えられる。いずれにしても、同じ流れの郷に金に係わる二つの地名があるというのは関連があるものと思慮される。

柳久保

野上の元倉地内に柳久保というところがあり、地名になっている。

元倉の奥に位置する柳久保谷津に溜池があり、土手には柳の古木があって、水田

の作業時には柳の下で休んだといわれる。

この溜池の南側が大きい杉の森であったので、冬季には陽があたらず厚い氷が張り詰めて子供達の格好の遊び場となり、氷すべりで賑わった。

現在では、溜池の奥からゴルフ場となり当時の面影もなくなったが、溜池と地名だけは柳久保として残っている。

サイコ入り

元倉の中程から西に入った谷津を、サイコ入りと呼んでいる。昭和三十年代までは、この谷津の奥から長田や照田に通ずる二本の道路が通っていたが、ゴルフ場の造成によっていずれの道路も廃道となった。

昔、地内に現存する観音様の近隣にお寺があって、その寺の名とサイコ入りの由来と、地名との係わりがあるのでないかと言われてきた。観音様はお御堂とも呼ばれ、また氏神として地域住民に親しまれてきた。現在では樹齢三百年以上という椿の木だけが残っているが、昭和二十年代までは御堂の周りには黒松の大木が数本立ち並び、生繁っていた。特にコブだらけの幹で推定樹齢五百年ともいわれ、昭和五十年頃まで花を咲かせていたサルスベリは、見事であった。

シモッパラ

現在の流田辺りを、シモッパラと言っていた。以前この辺りは赤松の大木が生繁る山林であった。営林署管理の官林山であったが、昭和の初期の頃に地域の農家の人達が払い下げて、数年かけて開墾して畑となった。畑になったことにより、一面の野原となり地域としては原地区内であり下の原であることから、シモッパラと呼ばれるようになったと思われる。

以前は、四、五軒のみの家が点在していたが、平成になってからは団地も造成され大きな集落となり、昔の原っぱ、シモッパラの面影はなくなった。

ジジイコロバシ

野上の笠敷から更に奥に入り、長田との境に位置する辺りに、ジジイコロバシと呼ばれる珍しい地名のところがある。姥捨山という山の話は聞いたことがあるし、楢山節考で映画化されるなど婆さんの姥捨て山の話は有名だが、爺さんを捨てる山とも思わせるような地名の、ジジイコロバシと呼んでいるところが現存する。笠敷山の北の方角にあって、山の行き詰まりの突端で、険しい崖があり断崖絶壁のとこ

ろがある。ここが爺さんを捨てる山ともとれる、ジジイコロバシと言われてきたところである

この周辺は、メジロ捕りによく行ったところで、当時の人は誰もが知っている山であり、隣接する沢をオニクボといった。

経塚

経塚

上の原地内に、経塚と呼ばれる塚があり地名にもなっている。他にも経塚から北にかけて数か所の塚が一群をなしていた。しかし、経塚と呼ばれる塚とは全く異なるものであるといわれる。経塚、十三塚いずれも町の遺跡になっている。

経塚は、仏教の経典を書写して供養したものを地中に埋納したものといわれる。塚の大きさは直径（幅）が約十五メートル、高さ二メートル位で、塚の上に石の碑が建っており、「法師宥傳不産、元禄十四辛巳歳」と刻まれている。法師宥傳という願主が元禄十四年に造られたものなのか。

なお、経塚、十三塚は茨城県遺跡地名表にも掲載されている。

十三塚

野上に十三塚という小字があり、経塚の付近より北から南にかけて一群を成して塚が点在している。この塚に添って笠敷山から長田を経て烏山に通ずる旧街道筋となっていた。

その内の二基はとりこわされたが、何も出土はなかったとのことである。取り壊された二基の塚のうち一基は、十三塚の中でも特に大きい塚であった。

何の目的で造られたのかはさだかではないが、今でも街道筋に添って数基の塚が残っている。現在でも、この辺りは十三塚という地名で呼ばれている。

越地

県道、門井山方線の野上と照田堺近くの谷津一帯を、越地という。コエジとかコシジと呼ばれている。地元の人達はオッコウシとも言っていた。

コエジ谷津の周辺は雑木山が多く、キノコの産地で知られたところであった。谷津の入口付近に溜池があって、コエジダメイと呼んでいた。

昭和の初期のころ溜池に隣接する上流付近に炭鉱があり、石炭（亜炭）が掘り出されていたことがあった。太い松の木の丸太で組まれた鉱跡が残っていたが、この辺り一帯がゴルフ場となり、造成工事によって坑道跡もなくなってしまった。

オオガッパラ

野上の原前から上大賀に抜ける途中辺りを、オオガッパラと呼んでいた。

現在では、野上から上大賀の善光寺様まで住宅地として家が並んでいるが、昔は馬車が通れる程度の道路で、両側はクヌギや松などの林が延々と連なっていた。

野上の原前から上大賀までは家も数軒しかなく、クヌギ等の原っぱであり、この辺りをオオガッパラと言っていた。

上大賀の大賀原なのか、広い原っぱ地帯なので大岡原、オオガッパラなのか、今でも年寄りはオオガッパラと呼んでいる。

野上の宿場

現在は、野上消防団詰所前の県道と町道との交差点で交通信号機のある所が野上十文字とされているが、昔は、JR水郡線の踏切手前辺りを十文字と呼んでいた。今でも年寄りは集合場所など間違えることがある。丸太で造られた三本柱の火の見櫓が、三夜様と並んで建っていた。

昔も上町から下町あたりまでが野上の宿場であったように地名などから窺える。上町、仲宿、横町、下町と小字で分けられるが、十文字から小屋場にかけて、橋場、桜本、仲宿、バンバ、ギンナンの木（銀杏）、タナ（店）などがある。

南郷街道筋でもあり、下町から上町にかけて十文字を中心に栄えていたようだ。古書等によると、横町周辺も大蓮寺にかけて住宅が多かった。また、野上原駅前あたりを下町（シタマチ）と呼んでいる。

なお、上大賀から野上原を通り、経塚の坂を抜け笠敷を経て烏山に通ずる烏山街道も走っている。他に、野上原から流田を通り照田を抜けて御前山方面に通ずる街道がある。

野上のことば

あいたっこ、 ええだっこ	隙間
あかっぱち	恥
あかっぱら	嘘
あかし	灯火、証拠
あがりっぱな	上がり口
あさっぱら あさっぱぎ	早朝
あさってのほう	方向違い
あしっこ	足跡
あじをひっこむ	味をしめる
あだっぺい	火にあたろう
あだり、あたる	豊作
あたる	命中
あます	もどす、吐く
あんにい	兄、兄さん
あんねぇ	姉、姉さん
いいからかん いいかんべぇ あっためげぇし	温めなおし
あっけねぇ	物足りない
あっぱとっぱ	あわてふためく
あでげいぶち	あてがいぶち
あでごどもねぇ	予想外のこと
あでっこすり	あてこすり
あでられる	うまくやられる
あどっちゃり	後ずさり
あどっぴき	最後まで残る
あどっつぎ	交互に寝ること
あどっつぎ	後取り、後継ぎ
あひしょ	くしゃみ
あらがだ ながら	だいたい、おおよそ
あらめっけ	あらさがし
あらぐ	開墾地
いしけぇ いしこい	良くない
いじいじしている	いじけている
いじがやける いじゃやげる	腹が立つ
いじる	いびる（嫁をいびる）
いしゃる	下がる、よける
いだぐした	怪我をした
いたっぱじ	板切れ

ありやんす	あります
ありやんせん	ありません
あまだ	大勢、多勢
あまや	納屋
あなっこ めど	穴
あわくった	あわてた
あへら	いいかげんなこと
あんちゃけ	あれだけ
あんめぇ	ないだろう
あんしょうけん	じゃんけん
ああだに	あんなに
あおなじみ	打たれた跡の青アザ
あくどい	しつこい、どぎつい
ああぺ	きたない
あでられる	中毒する
あだりばったり	手当たり次第
あだりめぇ	あたりまえ
あっけにとられる	唖然とする
いいやんべぇ いいかげん	でたらめ、丁度良い
いいはっちぁぇ	丁度良い時
いがっぺ	良いだろう
いかがなはりゃんした	いかがなされました
いがれる	こわれる
いがずい	態度が大きい
いかめで	もう少しで
いがねぇ	行かない
いがむ いきばる	いきむ
いぐ、えぐ	行く
いげぇぇ	大きい
いげすかねぇ	気にいらない
いごじ	いってつ
いぢいぢ	一つひとつ
うっつぁし うっせぇ うっさし うっちゃし	うるさい
うじんなか	親戚
うらっぺ	先の方
うわっつら	うわべだけ
うんだ	化膿した、熟した
うんと	たくさん

いちにちさんげぇ	一日中（朝から晩まで）
いったはった	行事が重なり忙しい様子
いってすける	一緒に行ってあげる
いっけっぱなし	のせたまま
いっかる	のっかる、乗る
いっちめぇ	行ってしまえ
いっきあった	逢った、行き会った
いっちょうめぇ	1人前、一丁前
いないはっちゃあ	居ないうちに
いめぇましい	いまいましい
いへらいへら	うすら笑い
いんべぇ	行きましょう
いんねぇ	いらない
いいごどした	良かった
いいきび	いい気味、ざまぁみろ
いきれる	むしむしする
いっける	のせる
いぶったい	けむい
いんがす	動かす
いんにん	えんりょ
いんがみる	ひどい目に合う
うげわるい	気分悪い
うすばか こばか うすでれ	間が抜けていること
うっちゃる	放置する
うぶう	おんぶする
おがっつぁわぎ	大したこともないのに騒ぐ様
おがせぎなんしょ	お稼ぎ下さい、さようなら
おかまいなはりゃんすな	お構いしないで下さい
おがんじめ	乞食
おきむくり	起き抜け
おぎり	真っ赤におきた炭
おげいはく	おせじ、おべっか
おごうご	野菜などの漬もの
おごう	あんこ
おござま	かいこ（蚕）
おぐれ	下さい
おごる	怒る
おごんなんしょ	下さい
おしゃらぐ	おしゃれな人
おせぇ	おかず
おせぇる	つかまえる
おっこじる つっこじる	落ちる
おっこどす	落とす
おっかげる	欠ける
おっかぐ	割れる
うやげる	ただれる
えがった	良かった
えぎれる	むし暑い
えぎもねぇ	無意味、無駄
えげぇ でげぇ	大きい
えごい	えがらい、えぐい
えでる	凍る
えしけ	粗悪、良くない
えしゃる えじゃる	腰を下ろした儘移動する
えんがす	動かす
おいでなはりゃんしょ おいでなんしょ	いらっしゃいました
おあがりなんしょ	お上がり下さい お食べ下さい
おあさ	朝食
おいはん	夕食
おおがん	大通り
おおがまし	洪水、大河増し
おおでんまくり	大げさ、雑
おおどっくじ	表口、（大戸口）
おおもさも	沢山、いやというほど
おおどした	せいせいした、安心した
おおざに おおだに	いっぱい、大層
おがだ	奥さん、つれあい
おっぱめる	はめこむ、おしこむ
おひんのめぇ	お昼前
おふかげ	夕立、雷雨
おぼだて	出産のお見舞い
おぼぎ うぶぎ	産衣
おもさも	思う存分に
おもしい	面白い
おろぬく	間びき
おりき	霜柱
おやす	終わらせる
おしめぇなんしょ	ゆっくり食べて下さい そろそろしまって下さい
おばんかだ おばんなりゃんした	夕方や夜のあいさつ
おんまげる	曲げる
おがげじ	掛け軸
おがまおこす	裕福になる
おさある	教わる
おだてもっこ	おだて、そそのかし
おっぱじめる	始める

おっかねぇ おっかない	恐ろしい、さびしい
おっころぶ	転ぶ
おっちゃす おっこわす	壊す
おっくぐる おっこぐる	追い出す、追い払う
おっきる	切る
おったまげる	おどろく
おっとばす	追い払う、押しとばす
おっちょる	折る
おっとまり	行きどまり
おどめ ねんね	赤んぼう
おっぱずれる	はずれる
かげんがわるい	体の具合が悪い
がげいなし	元の姿なし
だでぇなし	使いものにならない
かすたれめ	粕のような者
かだっぺら	片一辺
かっけなす	けなす
かったるい けったるい	だるい
かったたない	地面などが固いこと
かっくらす かっとばす	殴る、突きとばす
かっとまりがない	意地がない
かっつぁぐ かっちぎる かっちゃく	引っ掻く
かっくれぇ	お年玉
かっつぁわぐ	わいわいうるさく騒ぐ
かっつぁらう	強引にさらう
かっこむ	かき込む
かっちゃがむ	しゃがみ込む
かっぱぐ	とり払う
かっぱだく	殴る
かっぽる すっぽる	投げる、捨てる
かっぱだぎ	最後まで、きれいになるまで
かっぺずる	削る
かっぱらう	とり払う、盗む
かっぺなす	けなす
がさばる	威ばる、荷物になる
かっこうつける	いいところを見せる、見栄
かで	たしめ、量を増やす
かべっかす	かす、汚れ
かべっと	粘土

おどげる	ふざける
おっこでる	落ちる
おっぴしゃぐ	押しつぶす
おどげる	ふざける
おどでぇ	一昨日
おもれる	むし暑い
おらげ	我が家、俺の家
おんだす	追い出す
おんのまる	埋まる
かあべ	皮
かあらっぽ	河原
があだぐ	がらくた
がおる	ふさぎこむ
かぎまあし	炊事
かぐし	ポケット
からっきし	全く、まるっきり
かんだす	かき出す
かんまわす	かき混ぜる、かき回す
かでっぽ かだっぽ	片方
かだす	片付ける、しまう
かっくらう	食う、食べる
かっちゃす	散らかす
がめる	盗む
がんがん	缶、空き缶
かんだます	だます、ごまかす
かんか	頭
がぎめら	子供たち
きいだごどした	失敗した、困った
きかあ きこう	君は、おまえ、貴様
きぎんねぇ	気に入らない
きたねぇ	やり方がずるい、きたない
きとしていろ	じっとしていろ
きっかじる	聞きつける
きびっちょ	急須
きまぁせず	来たばかりの頃
きめっこ	すねる
きやがんねぇ	来ない
きゃづ	彼、あいつ
きゅうろ	黄色
きぼっちょ	木きれ
きわどい	もう少し、すれすれ
きかねぇ	気が強い
ぎっちら	ぎっしり、しっかり
きっとばす	切る
きどころね	うたた寝
きっくもっく	不平不満、文句

かねぇじうぅ やげいじうぅ	家族全員、家内中
かれっこ	枯れ枝
ぐでる	小鳥達のさえずり
くぐらげる	糸などがもつれること
くっきる	食いちぎる
くっつぶる	目をつぶる
くっちゃぶす	噛みつぶす
くっちゃべる	しゃべりまくる
くっちめる	くいしばる、くわえる
くらせる	なぐる
くれはらう かっくらう	いっぱい飲食すること
くそっぽね	無駄な骨折り
くんだす	吐き出す
くんのむ	飲み込む、忘れる
くんちょ、くいろ、くれろ おくれ、くんにゃん	下さい
くっきんにゃぁ	噛みきれない
くさっぽ	ふきでもの、しっしん
くじはび	まむし
くでぇ	むずかしい、しつこい
けいまく	剣幕
けぇこ	貝、貝殻
けぇんしょ	買います、下さい
けぇちょ、かいちょ	裏返し
けえじょ	回覧
げえぇ	多い、充分、たくさん
けえっぺぇ	帰ろう
げえぶん	外聞（世間の聞こえ）
けつかる けつっぺた	尻のあたり
けっけじょめ	蛾やトンボの総称
けっき	元気、盛り
けしかける けんなるい	羨ましい
けんなぐる	蹴りとばす
けんぴきがさがる	筋肉のひきつり
けっくり	しゃっくり
ころひいでいる	べてらん、長い経験
こわい	つかれる、こわい
ころばし	言い継ぎ、言いまわし
こおしゃく	尤もらしく説明する、文句
こみっちり	いっぱい、しっかり
こんにゃ	今夜
こきのめす	叱る、叱りつける
こんてに	こんなに
さあぁる	触る

くいんぼう	杭
くたばる	死ぬ、亡くなる
くでい	くどい
こうだに	こんなに
ごうせに	うんと強く
ごきいど	自然水の浅井戸
ござっばたき	最後まで残ること
こごまる	かがむ
こどっこい	特に濃い
こでっちり こみっちり	特にいっぱい
こぎる	値ぎる
こてなわ	細い縄
こじょっぺぇ	少し塩辛い
こじゃらくさい こっぺくさい	しゃらくさい
ごじゃっぺ	でたらめ、わからずや
こじゅうはん	中間食
ごじんじ	神社のお祭り
こすってぇ、こすい	けち、ずるい
こぜい	小家族、小人数
こすべねぇ	ぞくぞくする程さびしい
こそっぺい	滑りが悪い、ごそごそ
こったりねぇ	普通にいかない
こったんにゃぇ	量が少ない、半人前
こっぱっぱじ	余り板、きれはし
こっぴとが悪い	少々人が悪い
こっぺくさい	なまいき
こばんかた	夕方、日暮れ時
こはんぴ	やや半日
こねぇもの	穀物等の収穫
こねぇる	木の枝などを細かく切る
こぼす	世迷言
こまっちゃくれ	小さい、ませ
こまっこい、こまっけぇ	細かい
こえでる	太っている
ごめんなんしょ	ごめん下さい
これっぱかり	これきり
こんちゃけ	これだけ
こわっち	しなやかでなくごわごわ
こんてな	こんな
ごろさま	雷様、かみなり
こせぇる	こしらえる、つくる
ころっと	残らず、全部
こきたねぇ	うすきたない
ごったすった	ごたごた、もめごと
こんてな	こんな
さがんぼ	つらら

さぎっちょ、さぎっぺ	先の方
さっつえぇなし	ふざけたつまらない話
ささらほうさら	さんざん、よくよく
さらべぇおちる	思いっきり落ちる
さんぎっちょ	三本柱の主柱
ざあぁる	ざる
さばける	うちとける
しかだめる	仕事支度で固めること
じごくそば	ドクダミ
しじめぇそ	くだらないいたずら
しっちばる	結びつける、縛る
しっかど	しっかり
しっしゃねぇ	仕方ない、しょうがない
しっちょう しょいこむ ひっかぶる	背負い込む （借金、責任）
しっぺがえし	やりかえし
しゃあしゃあど ちゃあちゃど	悪事後など平気でいること
しらっつぁげる	白色っぽくなる、しらける
じなる	怒鳴る
しもや	堆肥舎
しんでぇい	身代
じんかだばんかだ	シーソー、落ちつかない
じなる	怒鳴る
じゃまっけ	邪魔
すかねぇ	気に入らない、嫌い
ずっこける	ずり落ちる
ずずねぇ	気持ち悪い、寒気する
すまっこ	隅
ずんぶんくぐり	水に頭まで入ること
すっころぶ	転ぶ
ずべら	悪い意味での適当
せこい	けち
せどのほう	後ろの方
せんろっぽ	千切り
せぶる	隣地を侵食する、横領する
せーんに	だいぶ前に
そうげぇ	そうですか
そうでんす	そうです
そっけねぇ	味気ない、そっけない
そそっぺ	雑、そそう
ぞめ	あらい（縄などぞめになう）
そうだっぺぇ	そうでしょう
ぞんきにする	思いやりがないこと
そっくりげぇる	そりかえる
そんてな	そんな

ざくまた	木の二岐など
さっさとえぇべ	さっさと歩け
さすけねぇ	さしつかえない
さむけぼうさま	とりはだ
さんざっぱら	さんざん、充分に
さいな	さようなら
さんざっぱら	さんざん
しこだま	いっぱい、どっさり
じきに	すぐに
しっちまる	キリッとしまる
しっちねる	つねる
しはしり	茅葺屋根の陸回り
しっちゃかめっちゃか	めちゃくちゃ
しっぱね	履物で泥を跳上げること
しみったれ	けち
しゃでい	弟
しゃあんめぇ	仕方ないだろう
しゃっぽ、ちゃっぽ	帽子
じゅうばち	重箱
しりのげぇ	後の責任を任されること
しんにゃぇ、しんねぇ	知らない
しゃらくせい	小生意気
じくねる	すねる、ふざける
すいる、ついる	暑さで食物が腐ること
すける	ひいき、助ける
ずばぐれる	刃物の先が曲がったりすること
すねっぱぎ	脛
ずのぼせ	我を張る、血迷う
ずんぐら	ずんぐり
すけぇ	すっぱい
せぇる	入れる、加える
せぐ	急ぐ
せづねぇ	苦しい、貧乏
せじる	煎じる
せいせど	せいせい、さっぱり
せなぁ	兄、長男
そうりょう	長男
ぞうさもねぇ	雑作ない
そっぺ	勾配、斜面
そじる	減る、少なくなる
それぐし	全部、それごと
そんで	それで
そうだに	そんなに
そっちっぺた	向う側、反対側
たあし	たわし

たかすっぽ	竹づつ
たけんぼう	竹の棒
たでる	戸を閉める、風呂を沸かす
たてめぇ	建前、上棟
たぼこれ	たばこ入れ
たっぺ	水が浸み出し凍っている所など
だんばれぇ	一番後、最後
たりっぴり はらっぴり	下痢
ちぐ	嘘
ちっちめる、とっちめる	懲らしめる
ちょうずばち	便所の手洗い鉢
ちょうろくでない	まともでない
ちゃあらもっこ	つまらなく扱う
ちんこ	本物でない
ちっかげる	ひっかける
つぐむ	しゃがみこむ
つっこどす	突き落とす
つっとす、つっとおす	突き刺す
つっぺぇる	川などに落ちること
つっけぇぼう	つっかい棒
つんぬける	突きぬける
つんむく	向く
つんもす	燃やす
つんだす	突きだす、差し出す
でぇどころ	台所、土間
てでぐ	連れて行く
てばたき	拍手、手拍子など
てぼっけ	手に何も持たないこと、手ぶら
でろでっけぇ	泥だらけ
てぶところ	ふところ手
てんこもり	山盛り
てんでんこ	別々に
てぇげぇ	だいたい、おおよそ、おおかた
てわすら	手遊び
そうでぇんすべぇ	そうでしょう
どだっぺぇり	囲炉裏などに土足で入ること
とうれぇ	継母、後妻
どてら	綿入れ半天、胴着
どではら	腹いっぱい
とは	外、屋外
とっけぇる	とりかえる
どっけつ	尻
とっけぇっこ	交換

たかあし	竹馬
たげぇ	高い
たてげぇし	一回の水で２日使う風呂
ただきころぶ	強く転ぶ
だぼら	大ぼら、駄ぼら
たよっけねぇ	頼りない、もの足りない
だみあう	重複する、重なる
だっぺ	だろう
だかさる	抱かれる、だっこする
ちくぬき	嘘つき
ちょうずば	便所
ちょっくら	ちょっと
ちゃらんぽらん	でたらめ
ちんこえ、ちんちゃぇ	小さい
ちんころめ	コーロギ
ちゃぶす	潰す
つっこじる	落ちる
つとっこ	藁つと
つっかけもっこ	押し付け合う、責任をなすり合う
つらっつき	むっとした顔をする
つんもぐる	潜る
つんのめる	倒れかかる
つんまでろ	燃えている薪を更に突き出せ
つっけぇし	口答え、反論
つんぬく	突きぬく
でっけぇ、えげぇ	大きい
でずっぱり	出しゃばり
てぬげ	手ぬぐい
でれすけ	馬鹿者、うす馬鹿
でほうらく	でまかせ、でたらめ
でんげぇる でんぐりげぇる	倒れる、転ぶ
でんきんばしら	電柱、電信柱
てぇらあ	人達
てんつけ	最初、はじめ
でんぐりげぇる	どんでんがえり
とうぱしり	遠くまで行くこと
どじる	失敗する
どぢびら	地面
どでっぽ	土手
とぼう	戸
とっくりげぇす	取り返す
とっぱぐる	取り損なう
とっとげぇす	引き返す

とっしょり	年寄り
とっちらかす	散らかす
でもどり	出戻り、バツイチ
どんのくぼ	ぼんのくぼ
とんのけぇし	鳥の糞、鶏糞
とほうずもねぇ	途方もない
とりっくら	取り合い、奪い合い
とんだごと	とんでもないこと
ながら	おおよそ、半分
なぐした	落とした
なじょった	どのような
なじょうにか	何とか
なりぎに	ゆっくり
なんぼかええ	いくらか良い
なんのじ	案の定、思った通り
にがみっつら	渋い顔
にしゃぁ	お前は
ぬっつける	責任をなすりつける
ぬげる	逃げる
ねごぼう	寝ぼう、朝寝ぼう
ねっきれねぇ	煮えきらない、はっきりしない
ねしかる	すわる
ねじっぺ	すねる、へそまがり
ねじぐる	曲げる
のがっぽい	ちかちかする
のっこす	追い越す
のめっこい	のめのめする
のろい	おそい
のんのさま	お月様、あかり
のざえる	吐く、つかえる
ばかめぇそ	くだらないこと
はかがいく	能率が上がる
はしゃぐ	乾く、乾燥する
はだる	要求する
はっとうじる	すいとん
はっきんねぇ	はっ切れない
はっくらす はんなぐる はっとばす かんなぐる	なぐる（強く）
はなぐら	いびき
はらくじい	腹いっぱい
ばんぎりばんぎり ばんたび	度々、その都度
はんこ	袖の無い半天
ばんかだ	夕方
ひしゃげる、へしげる	潰れる、へこむ
ひすぎる	桶などが乾いてゆるむこと

どっちがっちば	どちらかと言えば
とっぴょこりん	変わり者、ひょうきんもの
とんだめついた	ひとい目にあった
どんまんま	ぶらんこ
とっつかめぇる	つかまえる
どまずく	まごつく、とまどう
とんねぇ	取らない
ながっちん	中の方、芯
ながら	丸太の長いもの
なだっこぎり	刃物いじり、ナダ
はじょうにも	どうにも
なした	産んだ
なんでもかんでも	何がなんでも
なんだでもねぇ	音沙汰なし
ながっちま	長居をする人
にっちもさっちも	どうしようもないこと
ぬぐい	暖かい
ぬるまっこい	ぬるい
ねえだつ	煮え立つ、沸湯する
ねどごろ	寝室
ねばっこい	ねばりつよい
ねじがぬけない	はっきりしない人
ねぇしょ	内緒
ねえる	煮える
のっぱぐる	乗り遅れる
のまる、のめる	埋まる、ぬかる
のやのやする	むし暑い
のんべんだらり	だらしなくゆっくり
のろまっこい	おそい、じれったい
のべる	うすめる
はあやらない	もうやらない
ばける	あまえる
はだつ	始める
はだがれる	打たれる
ばっちっこ	末っ子
はっちめる とっちめる	懲らしめる
はっこむ	はりこむ、夢中になる
はなど	鼻
はねぇる	段取りをする
はぶち	まわり
はりっか	柿渋でザル等に紙を貼ったもの
はんけ	半作
ばんげ	今晩、夜
はぎる	切る、刈る
ひざっかぶ	膝、膝小僧
ひじっこぎ	肘
ひだりっこぎ、ぎっちょ	左きき

びだぐら	大あぐら
びだげる	甘える
ひっちぎる	無理にちぎる
ひっちゃばく しっちゃばく	引き裂く
ひでい	ひどい
ひとべらぼう	馬鹿らしい
ひっこなす	強くこらしめる
ひったぐる	奪う
ひとっぱたらき	一働き
ひとんじ	1人で
ひやく	ひしゃく
ひやす	浸す
ひゃっこい	冷たい
ひんげぇる	寝返る、裏切る
ひんまげる	無理に曲げる
ひんなか	日中、昼間
ぴったし	丁度
ひっけぇる	引き帰る
ひとっつも	少しも、全く
ひんむく	無理に剥す
ふぐす	ほぐす
ふしめど	節穴
ふたっこっこ	二個がくっついたもの
ぶしまける ぶんまける	水など強くあけること
ふったてる	仰ぎ立てる、おだてる
ぶっかく ぶっつぁぐ	割る、叩いて壊す
ぶへいっこめ	小さい雑魚など
ぶっちゃす	壊す、つぶす
ぶっけぇる	病気などで倒れる
ぶっちげぇ	互い違い、交互
ぶんどいろ	くろむらさきの色
ふんぬき	釘などを踏んでの怪我
ふんじゃぶす	踏み潰す
ぶんのめす、ひんのめす	懲らしめる
ふんじめる	踏みしめる
ふくしい	裕福
へぇる	入る
へひて	一日中
べぇぇこら	奪い合い、取り合い
へんめ	へび、蛇
ほうかぶり	知らぬふり
ほうたんぼ	頬
ほうろぐ	ゆさぶる
ほうらぐ	只（見るはほうらぐ）

びだまる	ギブアップ、挫折
ひあわぇ	狭いところ
ひっちねる	つねる
ひっかぶる	頭からかぶる、全部まかされる
ひっぱり	親戚関係
ひでぇいなし	つまらない冗談
ひっこげる	くじく
ひっこぬく	引き抜く
ひとつまなぐ	俵作りの道具
ひとっとし	同じ年齢
ひぼっこ	細い紐
ひゃあもしねぇ	何の値打ちもない
ひょごる	噴出す
ひんだす	引き出す
ひんもぎる	無理にもぎりとる
びんこ	もみあげ
ひんね	昼寝
ひんねじる	強くねじる
ひっけぇす	天地替えする
ひぼい	炎
ふいに	急に
ふくらっぱぎ	ふくら脛
ふたがった	商売が栄え、火が燃え始めた
ふだ	多い、たくさん
ぷでねぇ	気がきかない
ぶったぎる	切る（強めて）
ぶっくらす	強く殴る
ふったげる	火をつける、盛り上げる
ふっけぇす	息をふきかえす
ぶっつぐり	枝を切った焚き木
ぶっちょる	折る
ぶっちめる	強く挟まれる
ふっとめ	山の頂上、山道などの終点
ぶんまげる	強く曲げる
ふんのぼる	足で踏む
ふんばだかる	ふんばる
ふんずかまえる	捕まえる
ふんづまり	便秘
ぶじまわす	殴る
へぇぁぼ	灰
へぇぇめ	蠅
べんぞ	泣き出しそうな顔
へぇつくばる	這いつくばる
ほうげぇもなぐ	並みはずれて
ほうろった	落とすこと（財布をほうろった）
ほうせぇ	子供達があばれること
ほうろぎ	四十二歳の男の役落とし

ほぎる	生える、芽が出る
ほげほげ	思う存分
ぼでふり	魚行商人
ほっちゃくる	掘る、掘りまわす
ほったらかし	放っておく、放置
ほまじっこ	かくし子
ほら	嘘（大ぼらふき）
ぽんくりっこ	頭同士がぶつかること
ほっちゃくれる ほじゃぐれる	雨などで土が掘れること
まぐら	枕
ましらっぽい	まぶしい
まだるっこい まのろっこい まぬるっこい	のろま、まぬるい
まるっこい、まるっけ	丸い
まんむき	最適、丁度合う
まっつぐ	真っ直ぐ
まぎめ	眉毛
みじみじ、みしみし	しっかり
みっこます	七合五セキ
みみっきり	目いっぱい、いっぱい
みばわるい	見栄えが悪い
むかっぱら	むかはら
むぎっぽ、よれっぽ	一徹者
むげげえる	むけがえる、脱皮する
むこうぺた	向う側
むすい、むせい	長持ちすること
むる	漏る
めえる	見える
めんごい、めんこい	可愛い
めっかんねぇ	見つからない
めっける	見つける
めめぐる	芽が生えてきた状態
めんどんまわり	目がまわる状態
もうにもいんねぇ	多くはいらない
もっきり	コップ酒、もっきり酒
もやってぇ	見通しが悪いこと
もえっちゃし	燃え残り
やげぇじゅう	家内中、家族全員
やだっぺぇ	嫌でしょう
やだっちば	嫌だと言うのに
やあこい、やっこい	柔らかい
やりぎんにやぇ やっきんにぇ	やりきれない
やんめ	はやり目
やれる	叱られる
ゆきやんしょ	行きましょう

ほかい、ほげぇ	ほかい、行器
ぼさっか	藪
ほっけぇす	掘り返す
ほづく	つつく、鳥にほづかれた
ほまじ	褒美、へそくり
ほねだ	大変だ
ほろすけ	ふくろう、まぬけ
ぼさ	ほこり
ほんこ	正式、本気
まきだっぽう	薪のような棒
まげる	値引きする
まなぐ	まなこ、目
まのみず	馬の飲み水
まんぱち	嘘、でたらめ
まんにゃった	間にあった
までる	混ぜる
まっくろちょっけ	真っ黒
まっと	もっと
みじっけぇ	短い
みづいぢ	三分の一
みもっこ	余計者、邪魔者
みばいい	見栄えが良い
みぶるき、みぼうろき	身震い
むきもほうもなく	なりふり構わず
むぐす	漏らす（小便をむぐす）
むさくしない	きたなくしない
むじなつかう	狸寝入りする
むすぐったい	くすぐったい
めぇりゃんしょ	行きましょう
めげぇ	目籠
めどっこ	穴
めっけもの	見つけもの、堀出しもの
めっこ、めっかぢ	目の悪い人
めなし	あかぎれ
もうだ	多いこと、たくさん
もともこうもない	全てが無くなること
もうろく	ぼけること
もやえっこ	共同使用
もよういだしゃんす	天気が下り坂ですね
やげっぱだ	やけど
やだぼう	田植え前に均す道具
やしんぼ	食いしんぼう、いやしい
やあはに	やんわり、やわらかに
やっきもっき	気をもみいらだつ
やれまわされる	叱られる
やっとこすっとこ	ようやく、やっと
ゆげあげる	湯に長く入り気分悪くする
ゆっちばる	縛る

ゆっこび	子守理の背負い帯
ゆんべ	夕べ、昨夜
よいとり	ユイとり作業
ようがんす	いいです
よぎ	斧
よっぴて、よひて	一晩中
ようっぱり	夜ふかし
よれっぽ	へそまがり
よばれる	ご馳走になる、招待される
らくだ	簡単だ、快適だ
れぇさま	雷様
ろくなものではない	あまり良いものではない
わげぇねぇ	簡単だ、すぐた
わだまわし	新築祝、引っ越し祝い
わっつぁぐ、わっかく	割る

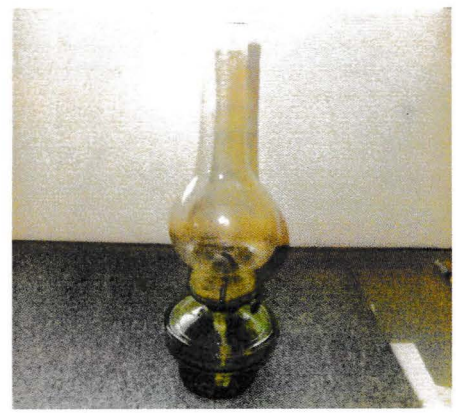
ゆわしなべ	遠い親戚
ゆっくら	ゆっくり
よかっぺ、いがっぺ	良いでしょう
ようげんなし	無鉄砲、向う見ず
ようわり	よなべ、夜業
よじゃれる	潰れそうになる
よごせ	出せ、返せ
よっぱら	充分、さんざん
ようだ	ほしい
れぇじんさま	雷神様
ろくろく、ろくだに、ろくすっぽ	ろくに
わっさ、わすら	玩具
わっちぇぁ	わりあい
わげぇし	若い衆
んだねぇ	そうではない

史料写真

逆さランプ

テランプとガラスランプ

ランプ



ランプ

ヤダテ

トウシン皿

トウシン台

十能（炭火を移した）

炭おこし（炭火を入れ振っておこした）

火のし

火のしアイロン

二合徳利

鉄ビン

鉄ビン

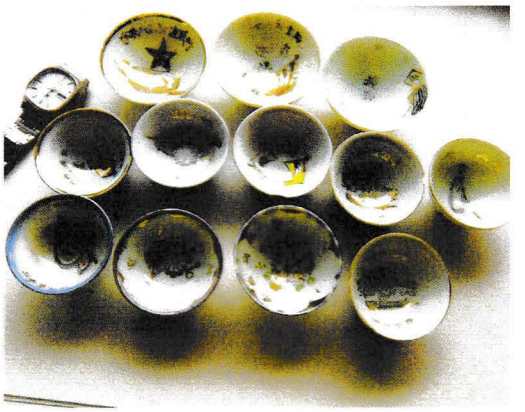
二合徳利

二合徳利と一升徳利

買いもの袋

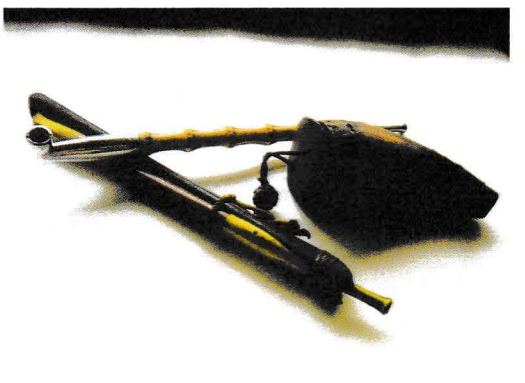
マス酒用一号マス

出征祝、凱旋祝の盃



出征祝、凱旋祝の盃

タバコ入れ

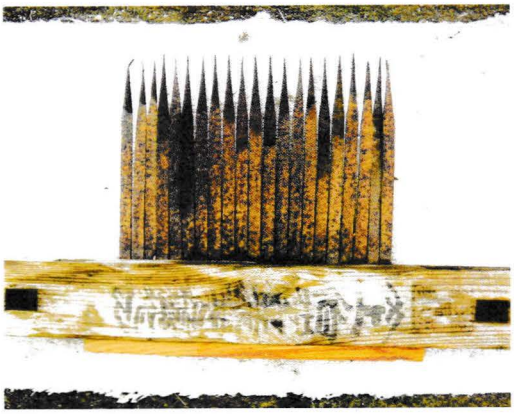


タバコ入れ

たばこ（きざみのききょうはキセル用）

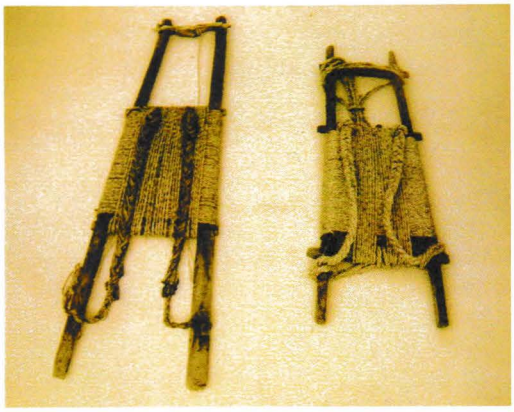
たばこ（昭和後期）

下刈り用大鎌

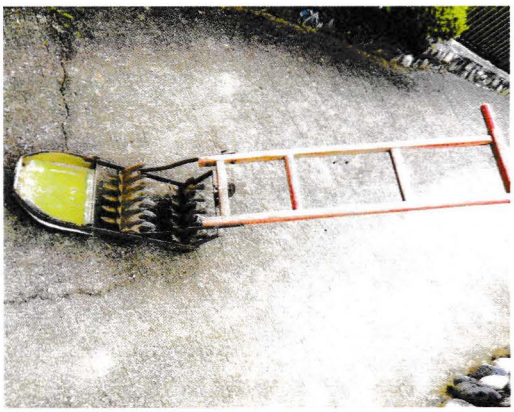


千歯ごき

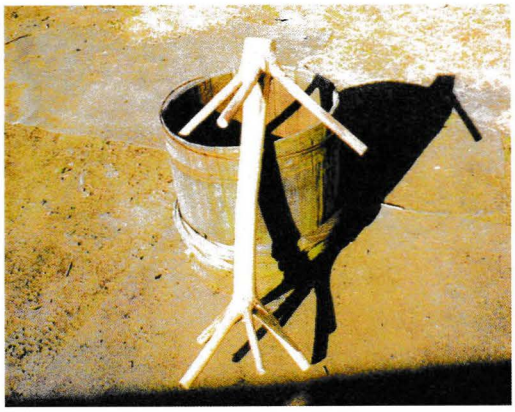
棒打キネとクルリン棒



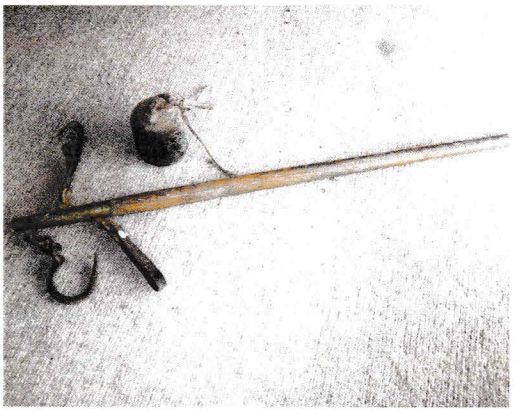
背負いバシゴ



田の草取り機



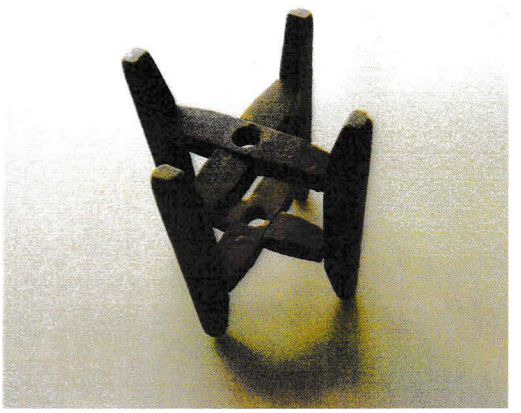
芋こしり棒



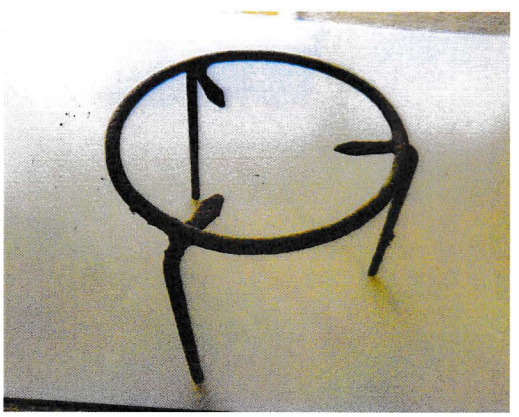
棒秤り

マス（一升、五合、一合）

エチコとオヒツ



糸つり



サントク

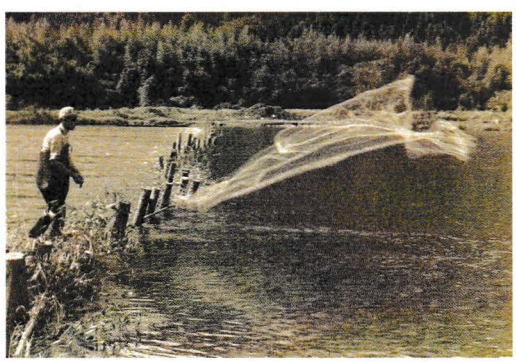
エポッキリ（草履）

草履

カーバイトカンテラ

ハケゴウ（ビク）

うなぎ鎌



ナワバリ漁（投網）

バッタ罠

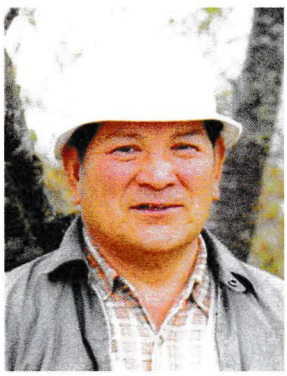
兎のヒックグシ罠

フルイ罠

ブッチメ罠

屋台（改修前）

屋台（改修後）



《著者略歴》

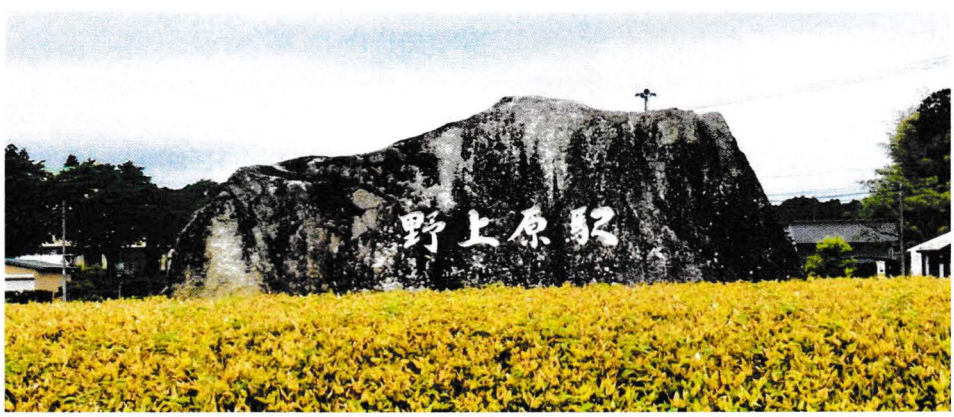
坪井　克

（つぼい　かつ）

昭和８年４月24日
旧山方村野上（現常陸大宮市野上）生まれ

山方町立新生中学校卒業
山方町役場職員（最終職：山方町議会事務局長）
山方町立野上小学校ＰＴＡ会長
山方町立山方中学校ＰＴＡ副会長
県立山方商業高等学校ＰＴＡ会長
山方町野上一区区長

【趣味】
魚捕り　盆栽　書道



（坪井 克　書）

ふる里を記憶と写真で綴る昭和・平成

非売品

発　行　令和３年（2021）７月７日
著　者　坪井　克
〒319－3114
茨城県常陸大宮市野上1245－7
☎ 0295－57－2595

印　刷　山三印刷株式会社
〒311－4153
茨城県水戸市河和田町4433－33
☎ 029－252－8481